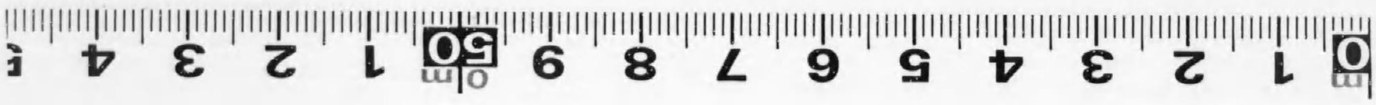
525
285



ヨ1161
く

古谷榮一 著

循環論證の新世界觀と錯覺自我說

大正
15. 6. 3
內交

525-285

自序

■私は大正三年に『オイケン哲學の批難』を著して、その中で『循環論證の世界觀』と『錯覺自我說』とを發表した。其の當時未見の批評家は私の主張を熱心に擊撥して呉れたが、私自身が思ふ處あつて、其の次の年に絶對の沈默を守る事に決してその儘大正十二年に及んだ。そうして沈默中にこれ等の學說について各第一卷を完成した。處がどちらも表題の示すが如く世間的興味から緣遠い著作の上に各册が可成り大部のものでも有り、且つ永い沈默を守つて居た爲め殆ど斯う云う面倒な著述を發表する便宜が無かつたので、之れ等及び科學の新說について各概要一册宛を作つて震災の前後にわたつて學界に頒布したが只の一人も反對しなかつた。

處で本著はその中の二學說について發表した概要や沈默の前後に各雜誌に書いたものを集めたもので、之の小册子を御覽になれば私の兩學說が凡そどんな性質のものか、どんな重大な價値のものかゞ好く御判りになると思ふ。

卷尾の日本宣言はこう云ふ思想的立場から當然生れる處の私の主張であるが、之の宣言を權威あ

るものとして裏付ける爲めには實に私の『エネルギー不滅則及びニウトン運動則の形而上的困難』を御一讀なさる事が必要である。日ならずして之れも一般讀者に御目にかける事が出來るに相違ない。然し之れも已でに學界には發表を了したもので、現代の學者は私が連發する之等の諸說に對しては只の一人も反對しなかつた。が概して御世辭を云つたり、口實を設けたり、或は默殺する事に依つて何處迄も批評を保留して居た。僅に四五の人々が之れを是認し聲援を與へてくれたに過ぎなかつた。

然し私の說に對して小さい利害關係を持たない批評家、文士、或は公衆が如何に正直で公明であつたかを私は確かめる事が出來た。そうして之等の範圍に屬する人々は殆ど皆私の主張に荷擔して呉れるだらうと確信している。恐らく私の思想は之れ等の職業的講壇的學者に非ざる批評家、藝術家、公衆の力に依つて天下に廣宣流布せられるだらうと思ふ。實にそう云ふ人々の筆舌に依る聲援を熱心に期待する。（十五年四月）

目次

第一　循環論證說の哲學史上の意義……一頁
第二　循環論證の新眞理概要……七頁
第三　循環論證說大義……五一頁
第四　循環論證の立場より純粹經驗を否定す……九三頁
第五　形而上的思索、形而上學、循環論證說……一〇五頁
第六　錯覺自我說概要……一一三頁
第七　死と自我意識の錯覺……一九一頁
第八　錯覺自我の肯定と形而上慾の藝術……二〇五頁
第九　西洋精神文明に對する日本宣言……二二七頁

■私の書籍には大字が交つたり。傍點が付したり色々の事がしてある。誠に見た目が面白くないが、然し今日の急がしい讀者には通讀の出來ぬ人もあらう。熟讀玩味の出來ない人もあらう。その人々の便宜の爲めに文章の要點を示して置いたので、之の要點をしつかり握つて讀んで行かれゝば割合に小さい努力で全體を御理解になると思ふ。實際私の著述の樣な讀み辛いものには譬へゆつくり熟讀する人にも之れがどれ程有用だか知れないのである。

循環論證說の哲學史上の意義

（大正十四年八月中旬）

■私の唱ふる循環論證說を一口に云へば斯うである。

『人間の論證は如何に避けんとしても結局循環論證を脫し得ざるものである。即ち論證に使用した一切の前提、其の他一切の論證材料を形而上的に證明し、始末しやうとすると更に無限に前提を延長して結局何處かで最初の結論と交渉し、關係し、或は之れを前提の前提として豫想しなくてはならなくなる。之れが人間の宿命である。然らば人間は潔く之の循環的

關係を正面から肯定して、之の中から眞理獲得の手段を講じなくてはならない』

之の手段を循環論證說と云ふのである。

勿論之れは困難である。然し困難だからとてやらねば人間は證明を放棄しなければならない。證明の放棄、即ち學問の放棄である。之れは人間には耐えられない。それ故人間は何うしても之の人間思索の海の循環の渦卷を乘切る可く餘儀なくされる。

處で三千年の間、西洋哲學は己れの直覺と經驗と常識とを非常に尊重して來た。デカルトは之れを甚だしく疑つたが結局『自我』の直覺の前に降參した。そうして彼れ等經驗主義者は、哲學は高い塔を築く樣に明白な直覺を土臺にして積上げる事が出來ると信じて居た。三千年の間只の一人として之れを疑つたものはなかつた。それで西洋哲學の基礎論は直覺主義の基礎論とも云ふ可きで、之れを便宜の爲め、公理主義、準公理主義、純粹經驗の三部類に分けられる。ユークリッド、在來の論理家、科學者は皆公理主義に屬する。デカルトの如きは準公理主義に屬する。日本の西田博士の如きはデカルトより少しく進歩して居るので特に一部類に分つて見るのが妥當に思ふ。そうして西田博士を西洋哲學派の基礎論の一番最後の人と見做してよいと思ふ。西田博士が日本に於て之れ丈けに雷名を走せられたのは之の純粹經驗なる新基礎論を唱導せられてからであるらしい。

之れ等の基礎論者の根本思想は公理主義に盡きて居る。純粹經驗も公理主義の變形であると云つて云へない事はない。實に西洋哲學の一切の基礎論の根底を爲して居るものは之の公理主義であつて、即ち其思想內容は

之の世には何等の證明を要しない非常に簡單な、自明的な、不可疑的な、直接的な、萬人一致的な、絕對眞理的な認識がある。そうして之れは經驗の中に無雜作に攪めるもので、吾人は之れを基礎として人間の哲學を築く可しと云ふのである。西洋及西洋系統の哲學者は皆之の信仰の上に其の哲學の基礎を築いて來たのである。處で私は斯う云ふ公理主義を形而上學の立場から絕對に信じないもので、『循環論證の新眞理概要』の中で公理思想の各要素を凡べて打破して置いた。

純粹經驗に就ては又別の機會に打破して置いた。之れに對して西田博士は遂に答辯を與へられなかつた。

處で斯うやつて公理思想を破つて見ると後へ何が殘るか?

即ち人間の思想は循環論法と云ふ頭も尻尾もない無限大の證明連鎖環の渦卷の中へ突放されて居

*之れは本書第四論說に載せてある。

るのを見出すのである。實際之の宇宙は始めから循環の微分流動在である、其處へ人間の意識が現はれて之處に證明行爲を企圖したのである。即ち之の現象を發生的に見た丈けでも人間は循環論證を脫する事の出來ないのが判る。人間が循環論證を脫し得ないのは、人間が循環流動を脫し得ないからである。一口物を云つても循環論證になる。少し捕はれない頭で公理を分析して見ると片ッ端から循環論證に陷つて了ふのである。

然らば人間は何うあつても循環論證を肯定し、利用し、工合し、運轉し、組合して之の中から最高の蓋然を持つた眞理を創造す可きである。

一、體西洋哲學者の信ずる樣な方法で何か確實な眞理が得られると假定すれば、必ずや私の主張する循環論證で眞理が得られぬ筈はない。何となれば西洋的方法論は只循環論證を胡麻化して循環論證でない樣に見せかけた丈けの手品證明であるからである。三千年來西洋の學者の爲し來つた一切の證明は形而上學の見地からは實は本當の證明ではないのである。只公理と云ふ獨斷の上に立つた論證遊戯である。然もよく〳〵觀察すると皆幼稚な循環論證の運轉なのである。即ち人類は證明を始めて以來今日迄一人も殘らず不完全な循環論證をやつて來たのである。それを自分では循環論證でないと思込んで居たのに過ぎない。其の位なら早く迷妄から覺めて、本當の自意識的循環論證に依つて本當の眞理を得可きであつたのである。

循環論證の眞理論と云つたからとて、循環論證なるものが其の儘眞理だと主張して居る譯ではない。寧ろ循環論法の方法論と云つた方が誤解がないと思ふ。つまり循環論證は析伏論理ではなくて、眞理を生み出す爲めの運用論理である。決して三段論法の如きものではない。それ故循環論證を析伏論理に使へば忽ち目的を誤つて誤謬推論となるのは當然で、在來は之の爲めに循環論證は誤りだと一口に片付けられたが、之れは誠に當然の事で、循環論證なるものは析伏に使ふ可きものではない。只眞理を運用して終局の證明を獲得するにある。つまり個々人を析伏するのでなくて、第一眞理を析伏するに使用す可きである。第一眞理が得らるれば、それからは漸次に循環論證の大傘の中で色々の小さい非循環的な證明をする事が出來る。

循環論證說の開展は基礎論のみに止まらない。在來の論理學の各部分の證明法に凡べて大な革命的變化が起つて來る。在來の一切の論理學は重大な變化を被つて來る。

それから幾何學の劈頭にも大な變化が起つて來る。

凡べて科學數學の基礎的言說にも大變化が起る。

其の他一切の西洋的な物の見方に一般的な革命が起つて來る。手つ捕り早く云へば、主觀主義客

觀主義唯物唯心などの大論爭に對しても、循環的態度で尤も矛盾のない解決をする事が出來る。哲學史の中には斯う云ふ撰擇論爭が實に澤山あつて皆一本調子に爭つて歸着する處がなかつた。然し斯う云ふ見方は循環論證の問題でなくて、循環的見方と云つた方が好いかと思ふ。斯う云ふ立場から說くなら西洋哲學史の中の色々の論爭は餘裕綽々として解決する事が出來る。彼等の如く融通の利かない立場に立つて互に愚劣な水掛論に果らずに濟むと思ふ。

兎に角循環論證の哲學の出現に依つて世界哲學史は今や雄大なる轉回を描かむとしつゝある事を私は豫言するものである。

それには追々に私の說かむとする處を御覽あり度い。

新提說循環論證の眞理概要

（大正十二年三—四月）

■之れは長い沈默の後で始めて發表する意見である。私は嘗つて發表した處女作の中で循環論證の新眞理論と錯覺自我論とを放縱な即興的な態度で極簡單に發表した。更に微分新說なるものと、外一二の新說を豫約した。其の後始んど今日迄沈默を守つて居た。其處で私としては此發表した眞理と豫約したものとの眞面目な研究を發表しない中は餘り世間へ大きな顏をして出られない羽目にある。私は目下前二說に付いては三千枚許りの仕事を長い前に書き上げて了つたが、微力の爲めに發表の出來ない仕儀にある。微分論に付いては其の後其の名の不妥當なのに心付いて、分量論と云ふ風の名に改めて二百枚か二百五十枚位書いた丈けで目下は中止して居る。そうして殆んど本論に觸れずにある。今では丸で違つた仕事にかゝつて可成り急がしいので尙二年間位は微分論には手をつけられないと思ふ。然し前二者に付いて嚴肅な仕事を發表すれば世間でもそう私が無責任な風呂敷屋でないと思つて呉れるだらうし、そう思つてきへ貰へれば世間へも顏出しの出來る理窟になる。

錯覺自我論に就いては野村隈畔氏が過度に推讃して呉れたが、循環論に付いては彼れは非常に曖昧な態度を取つた。即ち之れは哲學界の面白い問題だとは認めたが『古谷の循環論は一寸批難は難かしい』と云ふ樣な事を云つて避けてしまつた。それで循環論に付いては未だ現代の何人も公開的に認めては居ない。少くも私は知らない。兎に角大體に於て此二つの主張は社會から默殺と云ふ最も新說者に對する厄介な待遇を與へられた。然し私其の人が間もなく沈默の絕對翼望を起したので、世間の默殺を私の方で默殺する氣になつて今日に至つた。それに幼稚な學生の放縱亂暴な態度を回顧するなら、世間が私に與へた待遇は如何にも至當なものだと思はざるを得ない。然し人間が幾等放縱でも理論は少しも放縱ではなかつた筈だ。それ故大いなる雅懷をもつて私の理論を讀んで貰ひ度かつた。

私はこれからは私の思想を發表する方法に付いて多少の靈力をしてもよいと思ふ。が相不變世間が私を默殺する樣な態度を取るかも知れない。がそれも廻り合せで仕方がないと思ふ。其の時は相不變私は現代哲學界が再び私を默殺する事を默認して日本思想界から暫く沈默し去つても構はない。まだ私は青二才である。思想界の表面で活動するよりもまだ私自身の魂の始末をしなくてはならない。人間は只世間の中をケバケバしく働き廻るのが仕事ではない樣に思ふ。世間にチヤホヤされてウカウカして居ると私は一生の間になし上ぐべき人生の一大事を仕遂げる事が出來ずに、人生の哀れむ可き內面的失敗者として終らねばならぬ。

がさうせ世間へ多少の努力をもつた新說を携へて現れた以上はどちらかと云へば學者の默殺に逢いたくない。どうか大膽な眞面目な學者が私の提說をよく吟味して明白な決定を投じて貰いたい。或はこんな安價な思想に對して草稿の暇はないと云ふ人もあらう。其の人はせめて一口か二口でも好い。『渠れの言は誤つて居る。即ち云々』と云ふ位の事を云つて貰いたい。それが學者の態度であり、渠れに依つて誤まらるゝ世人を救ふ所以でもあり、渠れを反省せしむる所以でもある。

新らしい異說を吐くものに眞面目に同意して荷擔する人は必ずや大膽なる人物である。卑怯な人間はこんな良い頭を持つて居ても此新說を受け入れる丈けの度量がない。結局彼れは物を正しく判斷し得ない。正しく物を判斷するには良き頭は半分しか要らない。半分は度量に依る。度量海の如き人のみが山の如き大問題を理解する。斯くて新らしい提說眞理を第一に肯定する人は必ずや度量ある人である。大膽なる人である。斯う云ふ場合の大膽さには非常な道德的な芳芬がある。

哲學の新說は學者がこれを眞面目に考へて呉れる意志がなければ、何時迄たつても世に行はれる見込はない。物質的な發明はこんな人々にも直ぐに明白な結果を具體的に見せる事が出來るが、哲

學は理論に止まつて居るので、學者以外の人に認められるのは非常に困難である。本來民衆は必ず經驗的論理家なので形而上的論理を理解しない。それ故困難は形而上學に於て特に此感が深い。どんな新說を立てても簡單な實驗をやつて民衆の輿論と同情を仰ぐ事が出來ない。却つて民衆は純正なればなる程その形而上學を嘲るに相違ない。されば形而上學に於てどんな新說を立てゝも國內の極少數の學者が對手にせぬ以上は、其の新說は何時迄經ても行はるゝを得ない。それ故形而上學の如くそれに携はる學者が少數の場合に於て特別に新說に對する學者の責任は深いと思ふ。其新說が埋れて何時迄も認められずに居る場合には其の同時代の極く少數の學者の大責任であると思ふ。

私の思想は決して一寸した思ひ付きを鬼の首でも取つた樣に大袈裟に吹聽して居るのではない。そんな不誠實な所存でこんな面倒な努力が出來るものではない。私の一言一句を仔細に點檢せらるゝなら實に其處には哲學に於ての澤山な重大問題を觀取せらるゝに相違ない。哲學の新說は人生に起り得る最も靜かなる大事件である。それ故幾等でも情意を痲痺させて雲煙過眼視する事が出來る。然し思辨の良心の目覺めたる者には魂の底で熾烈なる興味と注意とを捲き起すに相違ない。

世間の人は異常な新說の起る度に之れを奇人の奇語として排斥する。そうして常に人並みの思想のみを要求する。然し人々が信仰して居る傳統思想は抑々何か？皆此異常なる異端に依つて開展されたものではないか？それなら異常な思想に出會つたらせめて二時間でも三時間でも無駄にする時間を割いて考へて與れてもよささうなものである。さうすれば私の思想は必ずや諸君に何等かの驚きを與へるに相違ない。如何に急がしいからとて思索をするものにとつて形而上學の原理の改造を雲煙過眼視する程に急がしい事が四六時中充滿する筈はない。

私は若輩である。然し循環論證の眞理と公理の批判に付いては自分の形而上的思索の全生命を賭けて居る。云はゞ思索家としての浮沈である。若し之れが間違ひならば私は終生思索の世界から引退す可きを宣言して置く。

之れは原著『循環論』第一卷の拔き書きの如きものを骨子として書いたものであるから誠に個條書の樣で各節が緊密でもなく、理論も飽く迄簡單であるから其の積りで想像して讀んで頂き度い。

■偖て循環論證の紹介に入らう。

本來人間の持つて居る眞理は如何に簡單明白なものでも證明なくんば形而上學の眞理として肯定する事は出來ない。第三者の信

用を得る事は出來ない。そは一個の粗雜なる經驗的眞理に過ぎない。處が如何なる證明も、特に哲學の第一根據となるが如き證明眞理は必ず巨大なる循環論證に陷つてしまふ。之れは人間の避ける事の出來ない一つの宿命である。それ故人間はどふしても循環論證の中に眞理を獲得するの工夫をしなくてはならない。然らずんば人間は哲學の希望を放棄しなくてはならない。

之れが私の第一に世間に呼號したい處の眞理である。此各句の殆んど凡べては現代西洋哲學と杆格する處の思想である。が西洋哲學に捕はれざる人なら必ず此言を眞理也と肯定せらるゝに相違ない。之れを肯定する事は私の循環論證の眞理を肯定する事で西洋的形而上學の大根據たる公理哲學を否定する事になるのである。

人が此世の中で何か或る事を第一に證言するには其の前提の眞を證しなくてはならぬ。處が其の前提を證するにはどうしても更に其の前提を證しなくてはならぬ。處がそうやつて最初の結論に關係せずに永遠に眞直ぐに歩く事は不可能であり、又それは故意に循環論證を延期して居るのである。そうやつて無限延期やるのは丁度話が盡きると王樣から首を斬られるのを恐れて『藏から今日も米を一粒出しました』と一生云ひ續けた男の樣なものである。かう云ふ方向に證明を求むる事は不可であるとすれば、結局之れは何處かで最初の結論と交渉し、關係し、或は之れを前提の前提として豫想しなくてはならなくなる。即ち大きな循環論證になつてしまふ。然も之が形而上學の出發點になる樣な眞理にあつては前提丈けでは足らない。實にそれの一切の關係を整理しなくてはならぬ。同時に其の證明に用いた凡べての概念の正しいものなる事を證しなくてはならぬ。其の概念を正しいと證するには又他の概念を用いなくてはならぬ。更に又其の證明的方法論が眞理なる事を證しなくてはならぬ。處でそれは何に依るか？矢ッ張り前提の無限延長が不可也とせば上述の循環論證に依らなくてはならない。

それ故一つの證明事業は巨大なる循環論證に陷る可き宿命にある。實に之れが人間の思辨の前に屹立してゐる最大の障害である。

■之處で西洋には公理思想なるものがある。之れは非常に無理な思索的手品である。即ち公理思想

に依ると

『此世には何等の證明を要しない非常に簡單な、自明的な、不可疑的な、直接的な、萬人一致的な、絶對眞理的な認識がある。そうして自分等は之れを無條件に公理として肯定して、其の上に人間の一切の思想を築くのである』と。之れは今日何人も信ずる處の思想であるが、不幸にも私は形而上學の第一出發點として斯くの如き公理の存在を信ずる事が出來ないものである。

上述の如く公理哲學に於ては無證明、簡單、自明、直接、萬人一致なぞと云ふ思想が重大な要素になつてゐる。以下簡單に之れを打破して見やう。

人類は或る認識を大形而上學として、大純正哲學として肯定するには必ず證明を必要とする。少なくも證明のなき一切のものは空想的獨斷である。危險なる思想である。一個の安價なる日常の街頭語である。斷じて最高の哲學ではない。若し證明が不可能ならば人間はそれの可能となる迄哲學として肯定する事を保留す可きである。そうしてそれは如何にして證明せらる可きかを研究するのが眞正なる學徒の天職で、證明の困難なのに避易して證明不必要と號するが如きは大なる不都合である。

或る事の所謂證明とは、其の有形無形の連絡を尋ねてそれを確

實な時間的前後及空間的周圍に連絡付ける事に依つて其の主張の正しき事を承認せしむる事である。故に此世の中に或る事實が吾人の認識に於て存在する限り、何等かの方法に依て其の前後周圍との關係を覓められぬものはない。單一直觀でも公理でも原理でも皆其の例に漏れない。それ故何等かの方法で其の眞理性を蓋然的にでも擧揚する事の出來ないものは存在しない。そうしてそれが出來ないものは必らず虚僞であるか又は學藝の眞理として肯定を保留すべき性質のものである。之れを眞理として安價なる妥協的肯定をするのは斷じて形而上學の事ではない。

本來彼等が『證明不必要也』と主張する以上は其の不必要な事を證明しなくてはなるまい。いや明白だから其の證明もいらぬと云ふならそれは滅茶と云ふものである。處で其の證明が不必要な事を證明するには結局公理が何等かの意味で證明せらるゝ事になるのである。即ち彼等は雜駁ながら

も部分的に證明して居るのである。只餘りに其の證明が雜駁で貧弱であるから之れを證明と號し得ずして已れを僞つて居るのだと私には考へられる。一體人類が公理に付いて經驗的確實感を得る樣になつたのはごう云ふ譯けかと云ふに皆長い年代の間實用して見て實効があつた、即ち實際的證明樣のものを得たからこそそう云ふ遺傳的徵證感を得たのである。公理家は此懲證を盲信してゐるが、此徵證感なるものが本來絕對ではない。只一種の參考的な證明樣のものである。處で之の徵證感が明白の理由となるなら、公理は決して無證明無理由で眞理とせらるゝのではない、と云ふ風の槍も入れられる。それから實行して見て功果があつたと云ふ事も矢張り實驗的證明である。公理は決して絕對無證明で立つているのではない。實にこんな處にも困難がある。但し之等は循環的批判なくんば形而上的には許容出來ない處のものである。

■在來、有名な傳統語たる『公理は證明出來ないが、外のものは證明出來る』と云ふ思想は論點相違の似而非斷言である。之れは有名ではあるが極く下らない誤である。彼等が公理に對して沈潛する事淺きが故に之の落し穴に氣が付かないのである。彼等は云ふ。

『一から一を引けばなぜ零になるか？全體はなぜ部分より大きいか？甲は何故甲なるか？それはわからぬ。然し、外のもの、例へば定理の如き、或は數學問題の如きは證明出來る』

と云ふのが之の場合の意味である。之れはよく考へると公理に對して要求してゐる證明と外のものに對して要求してゐる證明とは丸で別のものである。私は公理の場合に彼等が要求するものを絕對證明と云ひ、後者を普通證明と云つてゐる。『何故に？』と問ふ人が普通證明を要求するなら、答へる方でも何處迄も返答の出來る望みがある。例へ公理でも出來る。然し絕對證明なら直ぐその場で行詰つてしまふ。何も公理の處迄辿らなくても日常の事凡べてに於て行詰つている。

好くこんな事を云ふ人がある。『何故に？　何故に？　何故に？　と順々に問詰められると人間は必ず行詰るべきものである』と云つて暗に公理樣の簡單所を暗示するが之れは前述の提言と同じ事を云つたもので矢張り間違である。本來としては、人類の『證明に行詰る處は始めからその質問の性質によつて決定してゐる。何も問詰めなくても要求せらるゝ證明によつては直ちに行詰まり、證明によつては少しも行詰らない。もしその際行詰る事がありとせばその刹那に於ける吾人の頭の働らき方の不足よりするのであつて、何も推論や認識の本質より來るのではない。問詰められる人が絕對證明でなければ證明でない樣な感じのする所へウカウカやつて來るか、或は來させられるからである。來たら普通證明でドシドシ逃げられるものである。

學者が一般に證明證明と云ふのは普通證明である。絶對證明は人間には殆んど不可能に近い。神様が形而上學なぞを豫想して宇宙を造へたのでないから、絶對證明が出來ないのは當然である。されば吾人は之れを問題とする事が出來ない。形而上學に斯くの如き證明が出來れば幸福だが、普通證明によらなくてはならぬから、その獲らるゝ眞理は蓋然眞理なるは餘儀なき次第である。學問と云ふものはそう云う果敢なきものである。普通證明は學問的證明で絶對證明は神的證明である。之處では之の二つの證明の研究は出來ないが、兎に角公理の證明に關して傳統學者が論點相違論に陷つてゐるのは御判りであらう。吾人は傳統が公理に要求して出來なかつた證明は同じく他のものに要求しても出來ない。又他のものに出來る證明は公理にも出來るのである。日常百般の事、凡べて公理の或る意味に於ける或る程度の眞實を證してゐる。然らば公理を他のものの證明に使つて他のものを公理の證明に使つてわるいと云ふのは片理屈である。之れは好く御注意を願う。

■此世には無條件に形而上學が肯定するに足る程然く簡單なものは實在しない。云代へれば形而上的に絶對簡單なものは實在しない。『一』と云ふ意識すらも之れを形而上的に眞理とするには大なる研究と批判とを俟たなくてはならぬ。若し此處に大なる直觀の英雄があつて『一』に對して沈潛何年かするならば、彼れは此人類の所有せる意識の中の最も至簡至單なる物に對して一冊の書籍を書くに相違ない。實に『一』すらも複雜である。不明瞭である。余の如き鈍物すらも此『一』なる意識の前に立つて人類が何百萬年の間、遺傳と遺傳と遺傳との大連續に依つて今日此『一』なる意識を築き來つた由來を顧みるなら實に此『一』なる意識は實在の謎である、此謎の中から限りなき實在の淵が覗いてゐると云う心地がする。自分が形而上的原理を築かむとするのだと考へる毎に此至簡なるものの前に立つても、薄氷を踏むが如き不安を感ずる。實に小個人が三千年の世界の全確信と爭ふは難くない。然し『一』、即ち人間の一意識、或は一直覺の統一性の深淵の前に立つて之れを形而上學として雷同的に奴隷的に無條件、無證明、無研究、無過程に信ずる事は誠に難い。

處が公理哲學は之れを強要する、更に同一律を盲目的に信ぜよと強ゆる、矛盾律を強ゆる。分量律を強ゆる、適有遍無律を強ゆる、自我の實在を強るのである。

私は原著の中で人間の一意識の複雜な事、一直覺、一意識的統覺の到底無條件で信ず可からざる事、此處には非常なる認識の陷穽のある事を說いて置いた。然し此概要化された短章の中でそう云う問題に不用意に入るのは非常に困難である。

『簡單なものが證明は容易である』と云ふ思想が公理哲學の第一ケ條であるが、之れが形而上的思

想でない。之れは例の安價なる經驗的思想である。西洋論理學は凡べて經驗的論理であるが故に、かくの如き妄見に陷るのである。

一體日常生活の日常證明に於ては慥かに複雜なものより簡單なものの方が證明しやすいと云ふ傾向がないでもないが、之れも一つの提言となし得るが如きものではない。之んな事を云ふと何處からでも破綻が出て來る。之んな考を直ちに形而上學の思想とするのは以つての外である。然し人間生活に於て何百萬年の間に發達し來つた遺傳によつて自然に人間に日常證明の行ひ易い場所と然らざるものとがある。そうしてその證明容易圈とでも云ふ可き一定の地域もある。それを去れば困難、近付けば容易になる。そうしてその容易圈は必ずしも簡單なものに屬せず、必ずしも複雜なものに偏倚もしない。それ故簡單なものが證明は容易と云ふが如き不用意な提言をしてはならない。之れに對して私は『所謂簡單、必ずしも證明容易ならず。所謂複雜、必ずしも證明困難ならず』と云ふ。但し之の證明は日常的證明を意味してゐる。然し日常の談理としてさへ之れが破れるなら形而上學に於ては尙更の事である。

一體形而上的第一證明に至つては所謂經驗的證明の難易を超越してゐる。何となれば之れは世界觀に携はれる問題の一切の連帶責任である。皆同一の連鎖である。簡單も複雜も皆結局ごうしても行き付く可き同一の困難に行當らずんば許されない。即ち何處から行つても循環論證の第一眞理に仕配されなくてはならぬ。之處が特別に第一眞理に到達すべき入口だと云ふ樣な機密な地點は存在しない。

それ故複雜なものを無理に公理的簡單へ還元しても只證明の論場を徘徊し、或は駛走する丈けでそう公理家の思ふ程の効果はない。丁度天へ昇らんとして地上を這廻るに等しい。形而上的第一眞理と云ふ大難題から見ればその困難は似た樣なものである。天へ昇る事の困難を知らぬから『高い山』と平地とごちらが天へ昇るに容易かと考へるのである。

かくて『簡單なものが證明し易い』の『證明し易い』は形而上學の中では、特に第一眞理に關しては問題にならぬ。又『簡單』と云ふ事についても他の處で說いてあるが形而上學で希望する簡單は『そのもの自身の實在的簡單』(假りにありとして)であつて、日常の思考に於ける簡單では餘り有難くもない。形而上學の困難は之の日常簡單を超越してゐるのである。所で公理の簡單は日常簡單であつて、それ以上の簡單ではない。實は形而上的に非常な複雜である。故に學者が公理の簡單をもつて形而上的希望に辷いてゐるが如く思ふのは簡單の本質を知らぬからである。こう考へるなら公理哲學が證明を無二無三に、簡單なものの處へ追込むで第一眞理を得むとした事が無意味な努力

であるのがわかる。（然も公理に迄問題を追込むのに色々の形而上的論理を犯してゐる）斯くて『經驗的簡單』が必然に持つてゐる處の究極點へ行當つてその論歩の死地に陥つたのは當然である。せめて之處で彼等は更に大なる直觀を揮つて、その『經驗的簡單』から『形而上的複雜』へ突入するなら豪いが悄然立戻つて妥協哲學を樹てたのは不見識と云はねばならぬ。

■更に公理觀念の大要素たる『自明』と云ふ妄想は西洋哲學の何處にも存在して居る。今日ベルグソン教授が直覺が理解の批判を俟たずして眞理たり得るが如き放言をなすのも此自明思想から來て居る『自明』なぞと云ふものは形而上學の中には存在しない。一切は他明である。そうして他物に依る批判の限度に正比例して明白の限度も增加する。それ故批判を俟たずんば何者も明白でない。何者も信ず可からざるものである。故に公理思想は立つを得ない。

自明主義とは或る意識に附帶した特殊の徵證感に欺かれた思想である。簡單の感じ（實は遺傳的習性に依つて可能なる無雜作的行爲より起る幻覺）のある意識の連絡は長い間に凡べて此の徵證感を附帶して居る。左れば眞理的徵證感の如きものは決して無批判に信ず可からざるものである。それは諸君が己れの名を書いてそれを目の疲れる迄見つめて居られるならば判る。忽ち徵證感は動搖する。そう云ふ便りのないもので、公理の自明なぞと云ふ徵證感も亦之れと同じいものである。太陽が大地を上ると云ふのは人類に共通の明白徵證をもつてゐる。然し此徵證は大いなる誤りである。又徵證感を喪失した變態心理を見ると好く判る。如何に徵證感が無雜作に獨斷的人類を裏切るかよ。

粗笨なる反省家は一寸明白なるものに突當ると之れ以上どうもしやうのないのに當惑するに相違ない。がそれだから之れが形而上的眞理だ、公理だ、とするのは餘りに早計過ぎる。之れは經驗的明白で哲學的明白は更に色々の方法に依つて之を精化し醇化したものでなくてはならぬ。

公理の自明と云ふが如き安價なる直覺に依賴して居る哲學は獨斷の哲學、妄想の哲學である。經驗語である。街頭漫語である。砂上偶語である。形而上學ではない。それが西洋哲學である。

フイヒテは『斯程迄明白な公理の證明を要求するが如き人間が此地の上に居るとは思はれぬ』と云つて居る。慥に當時の粗雜な經驗的論理の時代にはそうであろうが今日の時代は已でにそんな呑氣な時代ではない。百年前にはそうであつたが十年後には『經驗的明白なものを其の儘證明もせず形而上的眞理だなぞと斷定するものが此地の上に居やうとは思はれぬ』と何人も云ふ樣になるに相違ない。慥に公理は經驗的に明白である。故に經驗的日常の論難に於て何人も證明を要求しまい。

只それ丈けで（形而上的に證明する事を拒絶しながら）形而上的眞理也と僭稱するのは不當である。『斯程迄に明白』と云ふのはフィヒテの私的心證である。少くも西洋哲學者との私的心證であつて。其の心證には遺憾ながら東洋の一書生の心證は呼應し共鳴する事が出來ない。

我々は『斯程迄に明白な』ものと思ひ込むだものが限りなく裏切られて三千年の思想史を歩んで來たものである。彼等が公理に於てそう思ひ込んでまだ肝腦地に塗れる程に裏切られぬのは彼等の幸運であつて、『斯程迄に明白なるが故に云々』と云ふ公理の正しい事の御蔭ではない。

私は斯くの如く『簡單明白なものに限つて特に證明が附せられず、そして比較的簡單でなく明白でないものに限つて證明の附帶して居る現象、或は證明の出來るものは必ず不明瞭扱にして、彼等に證明の出來ないものは明瞭扱ひにする』此哲學に於ける奇妙な不都合、此皮肉な不公平を何人も未だ研究しないのを可笑しく思ふ。之れは公理思想を捨てゝ循環論證の眞理論を肯定すれば直ぐに判るのである。公理と雖も他の色々の複雜現象が證明出來る限度には證明出來るのである。即ち之等の現象を證明すると同樣に色々の證明法を使用しなくてはならぬ。處が他のものの證明に於ては循環に陷るのを逃げて逃げて何でも公理の處へ辿つて來た處、公理が簡單明白なのでもう循環よりの逃避が出來ない。外のものを『公理の處へ行けば循環の返濟が出來るから』と一時逃れを云つて來たお蔭で義理にも公理には一般に用いた證明法を行う事が出來なくなつた。即ち公理には他のものに與へた特權（即ち循環的證明法の假面なる）前提の自由延長的公理保證的證明法が與へられなかつた爲めに一時的に證明不可能になつたのである。丁度當銀行では拂へぬが親銀行なら拂へると手繰つて行つたがその日本銀行が支拂不能なので餘儀なく兌換拒絶で胡魔化すのが公理思想である。

一體『甲は非甲に非ず』を公理とする事を止めて他に別に公理があるものと假定すれば、此矛盾律を矢張り他の普通則を證明した樣な方法で證明出來るのだ。『公理は證明す可からず、す可からず』と呼號するが公理も前提自由延長法を行へば幾等でも證明出來る。若し公理の前提延長を拒絶すれば他の場合にもそれを拒絶す可きではないか？　そうして證明行爲を人類は放棄しなくてはならない。公理が自己證明力を剝奪されたのは他のものゝ犯罪を公理が背負はせられたからである。其の御蔭で證明引受所たる公理は自分を證明する事が出來ない代り、眞理の神樣で證明は不必要と云ふ事に奉られた。何の事はない全く八百長胡魔化しである。

此世には公理に劣らぬ明白を持つたものは實に澤山ある。只公理の如く思考の原則でないので公理的尊嚴をもつて居ない丈けだ。それで傳統があゝ云ふ在來の公理を立てた心理は非常な切端つまつたもので、恰も公理でなければ世界が救はれない樣に見へるが、實は公理に使つたり思考の原則

に使つたりして兩方に間に合せて居る處なぞは實に彼等の不眞面目な間に合せ彌縫主義が好く現はれて居る。公理から公理的待遇を奪へばそれが思考の原則である丈けの事で、外の點では他のものと何等の差別もないのである。公理のみが自明で、簡單で、證明不必要的である譯ではない。所謂公理のもてる屬性を持つて居るものは天下に澤山ある。

■西洋哲學に於ては『一切を疑る』と云ふ事が非常な重大な傳統になつて居る。哲學の一つの教條になつて居る。然し私の目から見れば餘り同情の出來ぬ思想である。若しあらゆるものに嚴肅なる證明を要求すれば、疑るとか疑らぬとか云ふ事は問題にならぬ。汎疑は只思索をする時の坐右の銘であり、心得草であり、思索家規範の第一箇條に過ぎぬ。哲學ではないのである。特に西洋哲學の如く公理の如き安價なる獨斷を立てる時に『一切を疑ふ』なぞと云ふ思想は全く無意味な愚劣なものになつてしまふのである。公理家は『一切を疑つたが其處に疑れぬものがあつた』と傲然として勝誇つて云ふ。そうして何を持出すかと思ふと公理を持出す。之れを世人は納得するが、余は『彼等が一切を疑つたが、其處に彼等の思索的微力をもつてしては疑ふ力の及ばない樣な魔力をもつた事實が現はれた』と解釋し度い。彼等が『どうしても疑へぬ』と云ふ事の妄想的獨斷なのは彼等が中世紀の基督教徒が其の教條的獨斷を『どうしても疑へぬ』と云つたのを笑つた論理を使へば直ぐに判る。『物が疑へぬ』のは疑ふ能力の貧弱な處から來て居る。最も高い思想家とは最も有効に疑る能力をもつて居る人の事で、疑る能力のある處に證明の希望があるが、疑る能力の欠如した人には證明の希望はなく、只獨斷のみが存在する。そうして私の見る所では公理思想家は疑る能力の非常に貧しい人々である。彼等は疑る意志は過分に持つて居る。然し疑る形而上的實力がないので公理の如き認識の妖坐を目して『自明だから疑へぬ』なぞと獨斷的判斷を下すのである。實は手におへないから疑へぬのである。疑る丈けの手段があれば何でも疑らずに居る人々ではないのである。

私は原著の中で公理が如何に徹底的に疑る可きかの方法を充分に示して居る。傳統の如く漫然懐疑的にヒステリー的に疑へと云ふのではない。之れは寧ろ思索者の覺悟で、哲學の中で說く可きものではない。哲學の中で說く可き『疑』は、意志や情緒や、態度や主義ではなくて、あらゆる認識に對して疑ふ可き方法を立てる事である。諸君が人間の認識の發生をよく研究して反省せられるなら公理なるものが其の眞僞は兎に角として、一反は充二分に合理的な疑ひの分析と試驗を八方から受けて、それに及第しなくてはならぬ、即ち證明を提供しなくてはならぬ事を御理解になるに相違ない。そうして人間が或るものを遺傳的に疑得ず、先天的に自明的に感ずる樣に構成せられた慢性的痳

痺的認識を公理として信ずる事の危險を驚かるゝに相違ない。そうすれば過去の哲學者が只漫然、萬象に對して疑の氣分を投げかけて之れを『疑つた』と號し、疑は哲學の第一歩だなぞと云つた事の淺薄なのがよく判る。

『疑へなかつたから眞理也』と云ふのは不見識な詞で哲學語でない。『眞理であるから疑へぬ』と云ふなら立派な學者の態度である。『疑、不可疑』は眞理の樹立には與らない。昔から其の當事者にとつて『不可疑』なものが後から後から虚僞になつて居る。『疑へぬ』と云ふのは眞理の場合の一種の心理的現象であるが認識者が間違つて居る時、淺薄な時にも發生するもので何の標準にもならぬ。『疑へぬなぞと云ふ詞は學者の最後に發すべき詞である。證明もせず頭から『疑へぬ』なぞと云ふ處に公理思想の大妄想がある。

■一意識とか一直觀なるものは自意識的な實驗心理的單位の見地からのみ自覺的判斷が付け加へられないのみで、其の直觀の内容には立派に判斷の素質が忍込んで居る。それは粗笨な云現しではあるが、直覺とか一意識とは只或る認識の一種の統覺に過ぎないとも見られる。人間の心は統覺と統覺の連續、判斷と判斷との連續を更に統覺しながら長い時間を進んで行くものである。それ故意識、的單位に於て一意識、一直觀だからとて判斷の素質がない、即ち形而上的に虚僞を含まぬと云ふのは大なる誤である。一切の一意識は皆認識的に不純なものと豫期してかゝる可きである。皆複合せる意識の代理的意識である。只意識的判斷を追加したものより虚僞が少ない場合が多いと云ふ位の事は云へやう。かう云ふものを樂天的に抱へ込むのは大なる不可である。

一意識は現在也と云ふ。然し此現在の間に光は何萬里を走る。然らば吾人の現在なるものが光線(に意識ありとして)の一刹那に比べて如何に長い時の連續であるかが判る。一意識は只反省現在に過ぎぬ。形而上的に盲信せられるが如き單純なる一刹那ではない。實に複雜なる刹那(よし微分的に考へずとも)の連續である。斯う云ふものを絶對單一だの、絶對直接だのと云ふ認定の材料として絶對に一個單一の直觀なぞを考へる事は出來ない。こんなものに安んずるものは皆日常哲學である。初等心理學である。直覺の信ず可からざる事は人間の『我』の直覺が一つの錯覺であるので判る。『直接』と云ふ感じは或る意識的事實に副現象として附屬して起る第二義の感覺的意識で、其の事實が長い年代の遺傳に依つて獲得した一つの粗末な副感に過ぎない。故に必らず其の事實の本質を形而上的眞理として命令的に吾人に信ぜしむるには足らぬ。參考になる丈けである。證明書にはならぬ。然も證明書は人違で付く場合もある。僞物もある。然らば直接感なぞは到底手依りになるもの

ではない。只經驗に於て有利なるに過ぎぬ。眞理の蓋然に富めるに過ぎぬ。處で此直接感は誰れが與へたか？　正直の權化たる神が與へたのではない。方便、妥協、胡麻化し、不誠實、虚僞それ自身なる『萬有大生命』が與へたのである。

■『直接』と云ふ事も經驗的な詞で形而上學に於ては直接なものは何一つない。皆非直接的なものである。或は語弊があるかも知れぬが一切が間接であるとも云へる。指で紙を觸れる。之れ間接である。直接と考へるのは形而上的間接を經驗的直接なる異名をもつて考へるのである。此位の事は少し心理的見地から分析しても判る。

公理は直接だと云ふ考へも亦同斷である。同一律でも矛盾律でも『自我』の實在律でも少し捕はれない頭で、心理學的に之等の認識を信ずるに至る過程を考へれば凡べて間接である事は好く判る。之れを直接であるなぞとは實に草昧未開人の談理である。直接だから無條件で信ぜよなぞと云ふが如きは斷じて哲學的議論ではない。

公理思想は此點に於ても許されない。

■公理思想の中には『萬人一致』なる考へがある。公理は萬人一致して信ずるものである、故に證明なしで信じ得べしと云ふのである。

公理思想の中でも最も安價なる思想である。私の原著の中では極力之れを打破してあるが、此處で論ずる價値のない思想である。それ程微弱な思想であるが、然し今日之の理由に依つて公理思想を萬人一致して信じて居るから少しく論じて見やう。

どの本にも萬人一致の語はある樣だが頗る不味い。彼等が萬人一致の語を用ゆる論理は斯うだ。『公理は萬人一致して信ずるが故に無條件に信ず可し』と。然らば何が故に萬人一致して信ずるか？そう聞いたら彼等に良心があれば當惑するに相違ない。實に萬人一致して信ずるが故に更に萬人一致して信ずると云ふ事になる。然し第一人目は萬人一致を理由にして信じたわけではあるまい。僕はその第一人目の人に聞くのだ。かう云ふ思想は第二人目の人にとつては結局第一人目の人が信ずるから俺も信ずると云ふ事になる。なんぼ何でも之れは酷い。此時若し彼等が行懸りを尊重するなら斯うとでも云ふだらう。『自明なるが故に』と。處で自明とは何か？無條件で判る事ではないか？そこでどうして無條件で判るか？萬人一致して判るからか？之んな事でも云はなくちやなるまい。然らば此處にも矢張り彼等の大嫌な循環論證の臭が濃厚に然も拙劣に腰折的に現はれて居るではない

か？こんな處で揚足をとれば切りも際限もない。

それは兎に角として萬人一致と云ふ事は輿論と云ふ事で、輿論の本質として問題が高尚なれば高尚なる程輿論は無意味になるものである。同一律や矛盾律を經驗的問題とするなら輿論の專制も惡くはない。然し之れを形而上學として純正哲學の最高の原理として肯定する時に直ちに萬人一致と云ふが如き輿論は誠に下らぬものになる。よしそれが民衆から選拔した學者間の輿論であつても駄目である。

それ故輿論は無力である。僅かに心證となるに過ぎない。只少數權力者の邪見に對してのみ權威がある。それ以上のものではない。歴史を見ても輿論は常に只一人の權威に依つて破られた。

輿論よりも其の時代の最高の權威をもつた唯一人者の詞の方が正しい。輿論の如きは云ふに足らない。そう云ふ人を見出す迄の輿論である。それ故輿論に追從するが如きは學者の最大なる恥辱である。如何なる場合にも學者は輿論より數段高い思想を吐かなくてはならぬ。然らずんば輿論に關與しないがよい。此事は此位にして置かう。

公理に於て萬人が一致するのは公理が眞理であるからと云ふよりは、寧ろ人類共通の認識機制の遺傳的缺陷に依つて導かれたる妄想的一致より來て居ると思はれる節がある。若しそうだとすれば萬人の一致こそ即ち虚僞の有力なる參考になると云ひ度い。若し萬人が斯くの如き低級なる一致に徘徊しなかつたなら眞理は尚更に長足の進歩をしたらう。

百歩を讓つて假りに斯う云ふ不思議なものがありとしても、彼等はそれならどれ丈けが證明不必要で、絶對簡單で、絶對明白で、絶對自明的で、絶對眞理的で、どれ丈けはそうでなく、そうして其れ等の絶對簡單、絶對明白、絶對自明、絶對眞理的なものと然らざるものとの間にはどれ丈けの明白截然たる區別があるかを提擧す可きに、そんな事は絶對に問題にしない。只彼等は二三或は三四の公理樣のものを列擧し來つて、其の儘無責任に逃避し去つて了つた。

私は未だ此の地上であれ程尊崇せられたる公理を利用して、其の上に立脚して、形而上學の眞理を開展した者を見た事がない。現代の公理主義は一見した處では、學者が思想の困難を胡麻化す爲めに、云ひ譯けの爲めに、二三の公理律を立てゝは見たが、さてそれをどうにも仕樣がなくて、其の儘未完了の立腐れにして置くが如き觀がある。其處にも好く公理哲學の虚僞が現はれて居る。

■デカルトの『我れ思ふ故に我れ有り』は近代哲學史の一區劃をなすの大事業で私も敬意を表して居る。然し今日學者が皆信仰して居るに拘はらず、私の循環論の見地から見れば全然哲學的價値なき

思想である。只哲學史的意味はある。歴史を中世から今日に引渡す過程としては非常な意味があるが、今日の哲學の問題としては全然公理思想と共に倒れ去る可きものだと思ふ。私は十年前に此事を極論しておいた。

■公理と云ふものに對して西洋哲學のもつて居る觀念には、未だ一般的、終極的、不許分析的、非縝繹的とか色々のものが附帶して居る。原著の中では之等を皆說破してあるが、本論文の中では巨細に說くのは徒らに煩瑣に涉るので避け度いと思ふ。

■西洋哲學の如く公理の一切の特徴を眞也と說かんとするには結局循環論證に依らなくては說くを得ない。西洋哲學はそれが出來ると云つて居るが凡べて荒誕なる論理的手品である。そう云う公理哲學も不都合な思想であるが、公理の公律として云現はされた色々の具體公理も循環論證的見地より見ては非常に不都合なものである。其の實質と其の型式と共に非常に不都合である。原著に於て私は矛盾律を例にして熱心に循環論證的見地から析破的批判を加へて置いたが、此處では餘白がないので紹介する事が出來ない。

彼等が公理として扱つて居る公律それ自身は眞理だと云ふかも知れない。例へば『全體は部分より大也』と云ふ事は或は眞理かも知れぬが、若しそれが眞理としてもそれは彼等の紛れ當りで其の爲めに公理思想が眞理だと云ふ事にはならぬ。公理思想が眞理だと云ふ事と公理として扱つてゐる個條が眞理だと云ふ事とは丸で違ふ。つまり私は彼等の形而上學の眞理を眞理とする方法が誤つて居る、あんな方法では決して日用學の公理とはなれても形而上學の眞理の源泉となつて其處から一切の眞理を生出す事は到底出來ないと斷言する。

■思想の出發點と云ふ事もひどく西洋哲學では八喧しく云ふが、循環論證の方法論は第一眞理から出發するなぞと云ふ誇大的理想を持つて居ない。此世の中で何が大事業とて人天の理想となる可き第一眞理を立てる程の大事業は少ない。之れが形而上學の理想である。それ故第一眞理は西洋哲學では出發點になつてゐるが、私にとつては一到着點になつて居る。私は傳統の如き安價なる遣方では到底眞理に到達出來ないと信じてゐる。實際第一眞理を出發の基礎に出來る樣な幸福な狀態に人間の形而上學は置かれてゐないのである。口縫一

度綻ぶれば忽ち循環論證に陷る人類が實在に眞理的借金なしに純一なる第一眞理を無條件無假定に立て得るものではない。第一眞理なぞが確定する時は人間の思辨の非常に發達した時である。認識論、方法論、眞理論、證明論が凡そ出來上らなくて第一眞理が出來上るものではない。之等のものが相互に扶け合つて循環し合つて始めて第一眞理が生れるのである。或は第一眞理が之等の各論の存立を助けもする。結局循環的努力に待つより外はない。

それ故傳統の出發論は哲學史上の立派な事蹟ではあるが、今日の哲學問題としては非常に不眞面目なものである。間に合せもの、彌縫的な思想である。

何か絶對眞理から出發しなければ手も足も出ないと考へたのは傳統の一個の偏癖である。若しそんな偏癖を固執するなら、其の第一眞理に迄到達するのによく更に其の前紀眞理なしで出發出來たものだと反問したい。所詮人間にとつては確實から出發するのは今日の問題ではなく、今日は不確實から出發して偉大なる第一眞理に到達すべきものである。そうして吾人の要求するものは公理の如き貧弱な二三の確實點ではなくて、

不確實から嫌でも應でも偉大なる確實に到達せねばならぬ樣な方法論である。

實に西洋哲學は此點に於て失敗して居る。云は〻傳統哲學は新らしく遣り直さなくてはならない。彼等の出發論が不眞面目なのは折角公理を造へては見たが、僅にユークリッド等が不徹底な不見識な方法で使つて見た丈けで、絶へて之れを生かして使つて居ないのでも判る。只世間の云譯の爲めに造へたのである。何の役にも立てず、實際に使用して居るのは色々の推論法を循環論證的に自由に使用して居るのである。即ち公理と云ふ欺瞞的な裝飾律を並べて、實の處では論理學の片隅で二三行の斷定で永遠の止めを差して置いたと妄想して居る循環論證の御蔭で生きて居るのである。之れは少し烟眼な人なら直ぐに御判りになる事である。今日の人類の思想が若し循環論證的運用に依つて動かなかつたら人間は手も足も出ず、公理の如きものを造へても尺寸の開展だになし得なかつたに相違ない。『公理を假りに眞理也と肯定して、それを材料として一つの循環論證に依らずに試みに開展して御覽なさい』と云つても傳統學者には何も出來ないに相違ない。彼等は昔しの人が空氣の中に生きて居ながら、いや眞空の中に生きて居ると云つたのと似て居る。誠に循環論證の中に

生れ、循環論證の中に生き、循環論證の中に亡びつゝある人類が循環論證の哲學を否定し、之れを異端邪說として排斥せんとするのは大いなる不覺と云はねばならぬ。

■私の樣な風に問題に入つて來ると恐らく何人も私の云ふ方が眞理だと思はれるだらう。而も尙且つ學者をして思切つて大膽に私に荷擔せずに障らぬ神を極め込ましむる所以のものは例の論理學書の中に二行か三行の鐵案がある。『即ち循環論證は謬論である』と。世界に此斷案を信ぜざる者は一人もない。實に之れが學者を魔物の如く睨め付けて、彼等をして私と此魔物との間の板挾みになつて發言する氣にならしめないのである。

之れが私の思想の第二段の勝利を解決する謎である。公理を破つた丈けではまだ充分ではない。慥に論理學書の中に引例してある循環論證は他人を强制するには足らぬが、それだからとて世界の學者が之れ丈けで循環論證の一切を誤りだとして殆んど循環論證に就いて思索しなかつたのは不可である。實に今迄循環論證に付いて思考を費した者は各人が殆んど二三行に過ぎまい。公理に付いては多くも二十頁かそこらであらう。然し之れも研究すれば研究する程切りも際限もない深さを持つている。私の研究丈けでも僅かに初步に過ぎない。まだ隨分ある。それ故世界の大學者も之等の問題に付いては實は門外漢だと云つてよろしい。斯くて彼等の循環論證型式に對する斷案は世界を壓伏する勢力はあつたが、大した透徹したものではなかつた。

私が循環論證なる型式に付いてもつて居る反對の斷案は斯うである。

在來論理學に現はれた循環論證の證明型式はそれ自身眞を證する力はない。然しそれ自身間違を證する理由にもならない。

處が在來の學者は循環論證を輕侮して居た。それで彼等は輕卒にも此單純な型式がそれ自身眞を證する力がないので、尙一步を進めて循環論證は何でも間違の證據であると合點した。それで特別に循環論證なる觀念は學者から嫌はれ、更に私の思想も斯う云ふ困難な偏見の爲めに十年後の今日迄まだ危險物視されて、誰れも觸つて呉れない。

處で循環論證にそれ自身間違なるを證する理由がないとすれば、寧ろ却つて循環論證の方法に依つて何とか眞理に到達する工夫がないかと考へるのは、私の如く人間の哲學が循環論證に依らずんばどうあつても動く事の出來ない宿命にあるのを自覺したものの當然に行き着く可き問題である。

そう云ふ大きな抱負で循環論證の證明型式を研究すると誠に其處に坦々たる大道がある。一行か

二行の冷拶をもつて長い年代の間閑却されたものは之れは循環論證が人間精神の中に現はれた小さい尖端に過ぎない。鍵は何時でも小さい。然し開かるゝものはいつでも大きい。

在來の所謂循環論證の型式は、之の天地大萬有微分流動の世界の循環論證を貧弱な一論理型式にしたものである。それ故眞の圓滿無碍の循環論證ではなくて、一個の不完全な循環論證である。かくの如きものは到底眞理を取入れる餘地はない。

斯う云ふ論證が眞理を證明する力のない事は論なき處である。過誤の理由にもならぬが證明の理由にもならない。

然らば私自身が學者の否定する在來の循環論證をその儘眞理也と主張しつゝあるものではない。そう考へるなら私と學者を壓伏して居る大魔物との間のヂレンマは無雜作に解決されたのではないか？本來私は此淺義の循環論證の底にある更により大いなる循環論證が私の眞理獲得の大手段になると云ふのである。それ故私の循環論證の眞理說と公理論とは全然たる矛盾の關係にあるが、論理學書の中の『循環論證誤謬說』とは全く論點相違の矛盾である。只表面の矛盾ではない。

但し之れ丈けは斷る。在來、論理學書の中の『循環論證誤謬說』に對する學者の感情は誤つてゐるが、あの說は可成り正しいものである。一體循環論證は概して運用論理であり、創造論理であつて、三段論法や何かの如く征伏論理ではない。征伏論理は思辨の武器で、運用論理はその使用法である。從つて猥りに人を說伏する理由に使用すべきものではない。若し人を說伏するに必要ならばそれ丈けの順序を持つて使用す可きで、只循環論證丈けで人を說伏せむとし、或はそれを理由とするのは大なる誤である。特に在來の單純な、全然眞理を取入れる餘地なきが如き循環論證によつて人を說かむとするはその目的を謬れるものである。所で在來の循環論證の似而非推論は之の誤を犯してゐる。故に之の意志の上から之れを謬論として排斥されるたのは極めて至當である。私も之の點に於て在來の論理家に一致する。然し運用論理として、第一眞理の創造の武器としては之れより外はない。一體人間の手は武器を使用する爲めの手だが、武器がなければ手を武器とし或は武器を創造する爲めに用いらる可きである。同じ理窟である。

循環論證は又萬有の循環的實在の說明論理としては必要なものである。實際萬有はかくの如き相互循環の關係に依つて立つているのである。左ればかくの如き關係を說明する論理とし、又かくの如き關係を他の思索が往來する論理即ち運用論理としては必要である。つまり特別なる運用に依つて眞理を析伏するには循環論證が正しくなるのである。故に在來經驗推論に用うる循環法を更に方

法論的に醇化して行けば眞理になるのである。在來の循環論證はあれ丈けではその不完全なるの理由に依つても誤謬とせられたのは餘儀ない次第である。

在來の學者が循環に陷つたものを盲目的に排斥したのは彼等が循環的似而非推論を排斥した時、之れ丈の自覺が明晰でない故に、かくの如き誤謬に陷つて長い年代の間覺めなかつたのである。

■處で私は斯くの如く循環論證なる論理型式を採用して如何なる眞理を創造出來るかと云ふに、之れは中々困難であるし、まだ本書の中では之處迄著作が進んで居ない。破邪に急がはしくて顯正の點に迄達して居ないが一口に云へば斯うなる。下述は諸君に信じて貰ふ爲めに出來る丈け無雜作に語つたもので實は困難は豫想以上である。

一體人間はどう藻掻いても循環論證の證明法を脱却する事の出來ない事は、丁度不孝者が幾等自分の父を否定しても結局彼れが自分の父の子である事を如何ともする事の出來ない如きものである。それで凡ての公理主義者が循環論證を用ゐないと號して實行しつゝある證明型式が實は例外なしに皆循環論證なのである。人間は本來、循環論證より外に思考す可き方法をもつて居ないからである。公理主義者が用いつゝある證明法は實は耳を覆ふて鈴を盜みつゝあるものである。彼等の證明法は公理なる詭辯に依つて循環論證を非循環論證也と僞りつゝあるに過ぎない。只私は彼等が耳を覆ふて事をなす時に吾が耳を風に開いて吾れは鈴を摑むもの也と宣言して事をなすに等しい。それ故循環論證の方法的眞理とはどんなに珍らしいものかと思はれては困る。大體に於て、人間が今日無意識に實行しつゝある證明法である。西洋哲學がなしつゝあるものと絶異なものではない。只公理と云ふものを排斥し、一切の曖昧の中から蓋然的價値ある論據を假定しつゝ多少の眞理を得ては、再び假定したる論據を檢討しながら、幾度びも幾度びも斯の如く循環を繰返して、此實在世界の中に漸次に眞理の蓋然性を昂めんとするものである。それ故循環論證の世界にあつては公理主義の如く一擧にして絶對眞理に到達するが如き爽快なる現象もない。又人間にかくの如く無法なる快擧が可能だとは信じない。哲學にあつては人間は循環論證に依つて只蓋然を無限に昂めて行くより外に方法はない。

■傳統には『確實な一點から出發しなけりや眞理に到達出來ない』と云ふ思想と、同時に『どしどし假定を立てゝ證明して見て、妥當なら其の假定を是認する』と云ふ方法とある。

どちらも非思辨的である。どちらも原著の中で慥り其理由を批判してあるが、どちらかと云へば

後者の方が循環論證に近い。或は粗雜なる循環論也と云つて云へない事はない。若し循環論證が不可と云ふなら傳統の科學が用い來つた假定主義は全く無力な筈であるが、可成り有効な功績を上げてゐるのは何か？之れは循環論證がこんな粗末な假定主義に於て其の功德を發揮して居るからである。一體人間のやりつゝある凡べての論推は假定主義とは云はぬが、強いて云へば一種の假定主義である。循環論證は『所謂假定』『傳統假定』は立てない。斯かる粗末な假定を排斥する。即ち私は所謂假定主義の反對者であるが、其代り結局循環論證的な嚴重な假定に依つて論推を進める。それは差閊へない。

■實に循環論證とは一種の眞理の借金主義で、人間は借金せずに斷定は出來ない。自分の肉體が萬有からの借物であり、人間の思考それ自身が借物である。自分の生れない前から出來上つて居る思考法を用いて眞理を斷定しやうとするのである。どうしても一種の眞理的借金に依つて斷定しなければならない。之れを嫌ふなら哲學を斷念しなくてはならぬ。本來借金は借りた以上は返却しなくてはならぬ。借金を返すのは不體裁であるが返さないのは更により以上に不體裁である。それで早く借金を返して晴天白日になるのが則ち循環論證の方法論である。借りる計りが循環論證ではない。即ち之の兩面がある。

故に循環論證の方法論とは眞理的假用、借用斷定を返却する手段を思辨に對して開いてやる方法である。

■若し傳統の征伏論理を循環論證の權利侵害を楯として差押へを食はせるなら、彼等は寸毫も其の武器を運用する事が出來ない筈である。彼等が今日論理書を組織して居るのは、內證無意識に循環論證を使用して居るからである。誰れもそれは循環論證だと云つて使用を禁止しないからだ。何となれば循環論證の一種の匿名たる

『公理への前提自由延長法』

に依つて循環論證の宣告を受けるのを食い止めて居るからである。即ち圓周を無限大にして直線だと號してゐる如きものである。若し無限大でもなく、直線でもなければ、必ず何處からでも循環論證に陷るものである。

■循環論證の本質に關しては未熟ながら可成り研究してあるが、此處では之れ以上の發表は不必要に思ふ。之れで充分御理解になるであらう。

■宇宙觀は決して公理的な階段に依つて組織さるべきものではない。循環的な相關的な組織に依つて立つ可きものである。本に書く時は便宜の順序もあらうが、實在に於てはそう云ふ首尾はない。最初を證するのに或る程度の終末を必要とする。又絶對の終末を知らずんば絶對の最初を證し得ない場合もあろう。兎に角絶對眞理を一つ一つに貯蓄して世界觀を濟し崩しにすると云ふが如き形而上學は今日に於ては望むべからざるものである。

世界觀の循環論證的組織

と云ふ事も原著の中では相當に人々に其前景を展望し且つ確信する事の出來る樣に說いて置いた。

■成る可く循環論證と云ふ見地を離れて、單に形而上的心理學の見地より綿密に觀察して見ても、私は現代の西洋論理學を信ぜざるものである。其の論理學は凡べて安價なる經驗的論理學で、形而上的論理學ではない。經驗的、實驗的論理學としては可成り肯定出來るが、形而上學としては非常に價値の少ないものである。彼等の公理思想が粗笨、雜駁、無反省、破綻百出的であるが如く、彼等の論理學も形而上的見地からはそうである。西洋人の論理は凡べて安價なる經驗的論法で、微細なる形而上的思辨の見地よりは極めて未熟である。原著の續卷として『循環論證の形而上的論理學』を私は豫想して居る。そうして私の形而上的論理がどんなものか其の一斑を彷彿せしめる爲めには第一卷に於て、證明、分析、綜合、歸納及續繹に關する在來の大なる謬見を打破した處を御覽になればよく判る。私の形而上的論理とはどんなものかと云ふ事は私の著述の隨所に現はれて居る。特に矛盾律の批判の中に現はれて居る。

西洋の一切の哲學思想は皆公理なる廢墟の上に立つて居るのである。其の公理が倒れるとすると其の基礎は根繼ぎをしなくてはならない。が家屋と違つて哲學は其の公理を建てた人々の造つたもの故、私の循環論證の眞理をもつて根繼ぎをする事は絶對に出來ない。其の上に私の循環論は單なる基礎に使用すべきものではない。又西洋の公理思想の遺口は彼等の一切の哲學の部面へ浸み込んで居る。そうして至る處に龜裂や困難が續出して居る。それは私が公理思想の要素たる色々の觀念に付いて駁擊を加へた處を見て貰へばよく御判りになるに相違ない。

之れをよく理解せらるる方々は中々私の仕事が西洋哲學の根據へ鏑矢を一本射込んだ位の問題でないのは御判りになるだらう。綿々として後から後から重大なる推論が現はれて來るのは火を見るよりも明らかである。勿論提說者が其の前途に豫想しつゝある前景の奥行と深さを其の儘讀者に認

めよと云ふのは無理である。がせめて私が重大なる事件を齎來したと云ふ位の事は認めて聲援して貰い度い。

然し今日之れ以上の事を紹介する事は出來ない。私の循環論證の眞理論が眞理也としてもどの位の開展の前途があるかは、私の口からは之れ以上に說かずに、將來私の書籍を讀む人の識見と直覺に俟つた方がよいだらうと思ふ。そうしないと私は却つて誤解を受けるに相違ない。

私としては『循環論證の眞理論』と云つたからとて循環論證なるものが何でも其の儘眞理であると號して居るのではない。人によつてはそんな風に思つてゐられるかもしれぬが、循環論證を方法として眞理に到達すると號する思想を斯く號けたのであると一先づ考へて頂きたい。在來の西洋哲學は循環論證を方法として使用するのを絕對に排斥し、之れに依つては眞理に到達せず、思索の邪道也と號して居たのに對して、私の方法論を斯くの如く命ずるのは誠に至當な事と思ふ。更に至當には循環論證的方法論と云つた方が誤解がないかとも思ふ。然し循環論證は單なる方法論に止つてはゐないが之れを今日の問題とする事は好まぬ。

此論文は私が私の眞理論を他人をして承服せしめるか、或は興味を得しむる爲めに出來る丈け簡潔に手輕に摘錄したもので斯うやつて書いて見ると何だか飽氣ない氣がするが、世の中の事は何でも簡短にすれば飽氣ない。どんな思想も冥會してくれぬ人に短く切り詰めて見せれば皆一寸したものにしか見へまい。然し本物に比べれば生きて居る獅子と紙の上の素描きの獅子位違ふ。私の著述の中には循環論證の眞理なる大傘の中に、在來の哲學の中の重大な概念に對する私の獨流獨個の新見解が乘せてある。殆んど千四百枚の中の九割迄は未だ何人も說かなかつたに相違ない處の思想、恐らく諸君にとつては珍らしいに相違ない處の見解も提供してある。實は私としても氣の引ける程世間の人と意見が相違して居る。多少は其の爲めに、私は今日迄長い間の沈默を獨愛する樣な結果になつたと思ふ。幾等語つても人が聞いてくれる見込みがなければ、誰れが好んで己れの口に風を入れるものぞ。それも修業了畢した人ならよいが、僕の如き若輩が修業の中途に於て濫りに贅辯を揮つて己れの大切な事業を攪亂させる事は出來ない。たとへ沈默してゐても人生の究極に於て人間に最も大なる奉公をなし得るのが最高の道である。然し今日自分の沈默狀態を維持する事の少しく好ましくない事情にあるので、奮つて舊稿を發表する事になつたが、餘りに大部なので出版成功の確信を書肆に與へる事が出來ない。餘儀なく世評喚起の順序として此の短文を發表したが、どうか世間の學者がせめて此短文なりとも讀んで之れだけで已でに價値なしと思はるゝの士はどうか私に其の人が許すだけの否定を與へて貰い度い。質問があればなる可く紙上に發表して貰い度い。

成る可く人々の御滿足の行く樣な返答を提供する事が出來るだらうと思ふ。

若し又本書が價値ありと思はるゝの士は多少の世論を喚起して貰い度い。そうすれば一舉にして本書は衝頭に躍り出すであらう。

循環論證の眞理說全義

（大正四年三月二十六―七日）

之れは大正四年に雜誌『新評論』に發表したもので、十二年春になつて漸く『循環論證の新眞理論』の概要を發表するを得た。本稿は『眞理論』第一卷の概要ではないから內容は『眞理論』第一卷とは大分違ふ事勿論である。それ故『概要』と之れとは重複した處も有るが、大體に於て兩者は別のもの故本論文集に輯錄する事にした。兎に角拾貳年前の舊稿であるから思想に關係のない文句で今日に宛て嵌らぬものもある。共積りで御覽を願ふ。（十五年一月）

■私が嘗つて『オイケン哲學の批難』の中で發表した二つの眞理、即ち

『人間の自我觀念は生物意志の錯覺』

『之の大現象界は循環論證の眞理に據つて立つて居る』

と云ふ新提唱の內、前者は極少數の共鳴者を見出したが、後者に至つては一向に同感者を得る事が出來なかつた樣である。實は最初は兩說共二三行の說明に依つてすら人々に了解される樣に思つ

て居た爲め、殆ど即興的に、極めて粗雜な說明をした上に、後者の說明の仕方は全く裏道から行つた爲め、あんな不出來なものになつて、世間にも大した反響のなかつたのが頗る遺憾である。そこで私の最愛の眞理を街頭に迷子にして置くわけにも行かぬし、私の『循環論證の新眞理』なる著述の發表は何時の事やら當にならぬので、其の荒筋を極めて簡單に端折つて發表する事にした。從つて之の小論文の一節は全著述の一卷、或は一章に、一句は一章或は一段に當る程になつて居る故、充分な聯想と推論をもつて讀んで頂き度い。

一體今度の之れは正面から正式に說明するのである。然るに『オイケン哲學の批難』の中に現はれた說明は先づデカルトの『我れ考ふ。故に我れ有り』の公理を破壞する事に依つて私の循環論證の提說の消極的說明を試み、それから極めて非科學的に無雜作に積極的說明を試みたが、それは要するに餘りに示唆的な、間道的な、非研究的說明であつたのを如何にも恥ぢて居る。そこで今度のは全く方針を代へ思索を改めて別方面から說明する事にした。

由來私は之の表象世界は無限の循環であり、其の認識と思索は絕大なる飜覆法(トートロジイ)であると思つて居る。方式科學すらも、幾何學すらも、結局大なる歸納と緣繹との循環論證に立つて居る事を確信して居る。たとえ公理と雖もそれは單に吾人に餘りに密接なるが故に明白であり、且つ證明が出來ないとされたので、決して公準的眞理であるから明白でもなく、又公理であるから證明す可からずと云ふのではないと思ふ。

之れが私の出發點である。私以外のあらゆる人々と相違して居る所は之處である。今迄の人々は皆科學が飜覆法に陷るのを酷く恐れて居た。或は循環論と云はれる事は虛僞と云はれる事になつて居た。それ故幾何學者は公理批判の處へ行くと誠に見苦しい樣子をして不格好な牽强付會に依つて之のスフインクスを片付けて了つた。實に凡べての人々が循環論證は虛僞と云ふ事を先天的に相續的に其の腦中に鑄付けて居る爲めに、凡てが之の先入感に依つて公理に對して來た。そうして各人が多少は其の良心に恥ぢ乍らも、兎に角在來の仕來りでもあるし、各人の識認する事でもあるの

で、皆付木船の様な不安な公理論に乗つて危い思想の海を棹して居たのである。斯くて只一人として循環論證と云ふ大幻滅を飛越さうとするものはなかつた。循環論證の幻滅の結果新らしい眞理の王國が獲得されると云ふ事を考へるものは一人もなかつたのである。

■最初に一ッ辭らねばならぬ事は私の循環論證とは

一、あらゆる事柄を形而上的に證明するには循環論證に依るより外はないと云ふ事であつて、

二、あらゆる存在は時空の中に於て遠近前後の區別、變遷流動の差異はあるとしても凡べては循環的繼續の流れの中の一事實に過ぎぬ

と云ふ考へと混同されては困る。勿論斯う問題を明白に表現すれば誰れも取違へはしないけれども、實は後者が一反別異な扮裝をして現はれて來ると往々にして前者の思索を混雜するからである。今回は私は後者には觸れずに、只前者に付いてのみ語る事にしたのである。然し乍ら私の循環論とは、實は後者を背景にして居るものであり、且つ後者が眞なるが故に前者の如き眞理が可能なのである。かくて私が大最後に宇宙は循環論證の眞理に依つて立つて居ると云ふ樣な時は勿論之の二つを綜合して云つて居るのである。

又之の現象界のあらゆるものの眞理性を證明するには所謂證明が絶對に必要である事を斷らねばならない。之の世には一つとして直接に明白なもの、或は絶對に證明しなくても無限に信用の出來るもの、其の實在性はすぐ見れば判るものは一つもない。

處で或る一事實にして苟くも眞實である以上は何等かの關係を必ず他のものに及ぼして居るに相違無い。そうして其の關係こそ其の事實の有力な券證である。つまりあらゆるものは其の證明的な存在券證を周圍との關係に於て持つて居ると云ふのである。

誠に私の證明と云ふのは斯う云ふ意味である。

つまり現象は必ず絶對の孤立ではない。無限の關係の中に連つて居るものである。故に『一ッの現象』そんなものは決してない。皆主觀が無限から引き千切つたものである。然らば若しそれが眞實ならば實在關係の中から之の引き千切つた切口が探せる筈である。即ち之の行爲を證明と云ふのである。云ひ代へればあらゆる現象を證明するとは、主觀が認定した現象と其の原本客觀の周圍から抽象した現象とが果して何の不都合なく其の關係作用を周圍へ循環させるか否かを見る事である。若ししないとすれば最初の認定は間違つて居るのである。それ故其の關係の中には、理解も直觀も感覺もあらゆるものが含まれて居ると云ふのである。

こう云う譯け故私の證明の意味は在來のものとは全く違ふ。

■偖て今迄の人々は證明なるものゝ意義を知らず、『公理の直觀はそれ自身明白だ。それ自身が證明だ』なぞと無法な事を云つて居た。

然し乍ら、私は『それ自身明白な事』なぞが之の認識世界にあらうとは夢にも思つて居ない。或は人々の意味する樣な、シエリングやベルグソンの云ふ樣な獨自に妥當性の證明を持つた直觀が有らうとは夢にも思はぬ。勿論ショーペンハウエルが直觀の本質を知らずに笑つたのと私の反直觀主義とを混同されては困る。私は直觀てふものはあると思ふ。理解なぞを振り捨てゝ偉大な實在の中へ直入して行く所の直觀は必ず有るとは思つて居るが直觀獨自に非循環論證的にそれ自身に妥當性を證明して居る獨斷的直觀の有る事を知らぬ。直觀とは本來無限の流動的な作用の一焦點に過ぎない。眞實在の中に於て無限の關係が輻輳する焦點である。即ち一ッの直觀作用、一ッの本能作用は實に無限無數の作用の輳合した所に現はれた一ッの白熱的關係結節だと思ふ。斯くて直觀は其行なはるゝや、閃くが如く一超して其對境に躍つて了ふ。光線は一瞬に何萬里を支配するが、然もそれは

無數の波動を經過する。同じく直觀は突嗟に成立するとは云へ光線の如く又無數の關係の結果に於て成立するのである。直觀が眞理である限り必ず斯う云う關係を提供するに相違ない。故に直觀の眞實性を證明するにはどうしてもそれ等無數の關係の綜合の大指標の主要なものを澤山獲得しなければならない。即ち其指標の首位にあるものは其直觀から自然に生ずる處の感覺である。之れが直觀證明の第一である。然し全部ではない。まだ澤山の證明が添はねば直觀に付いての證明は完成しない。處で前人は之の證明の第一をばそれが非概念的なるの故に證明ではない、明白な直觀だとしたのである。『之れは人間ではない。娘である』と云ふのによく似て居る。

たとへ『人ではない』と云つても『娘だ』と證明すれば知らず知らずの中に『人』だと云ふ事を證明した事にはなるが、直觀の場合には之の比喩が何處迄も當篏らぬ。即ち或る一直觀を證明するには無數の關係に飜譯しなくてはならぬ。單なる實感丈けでは不充分である。實感以外に有らゆる能力を循環的に糾合して之の關係を狩集めねばならない。然るに前人は『證明ぢやない、明白な事實だ』と云ふ位だから、實感が一つありさへすればもうそれで直觀の眞實性を獲得したと思つて居た。之處に大なる誤りがある。

それの實例は私が『オイケン哲學の批難』の中でも唱へた樣に人間が自我意識に誘はれて、自我

なる公理的直觀に無批判に降伏した爲め『錯覺自我』の眞相を看破する事が出來なかつた事實を御考へになればよく判る。

如何なる公理や直觀と雖も證明は絶對に必要である。

それが在來の所謂理論證明でないとするも、或は感覺的證明なりと雖も、兎に角私の意味する樣な證明は必要である。漫然證明が必要なのではない。若し公理が眞實ならば證明の無い筈はないからである。宗教的信仰の場合も又然りである。只證明のないものに無暗に證明を要求するのではない。凡べてのものに證明が付帶しているのだ。付帶していなければそれは間違であるか、或は學問としては未だ信ずべからざるものである。

私の證明の意味は凡て尤も正しい至當なものであらうと思ふ。在來の證明の意味が不正な基礎論の爲めに捻れて邪偏な觀念となつたが故に、永い間證明の必要不必要の爭をする計りでなく、遂に公理の證明不必要論が勝利を得たのである。然しよし私の樣な證明の定義を作らず、在來の如くに考へるとしても尙且つ『公理は證明不必要也』と云ふ考へは大非義であると思ふ。

斯くの如き非義には先づ下の如き妄想がある。即ち

一、公理的事實は絶對に他の概念と理解から分離し孤立して居る。或は無關係である。

二、公理が眞實なる事の實感は單一である。

三、公理の眞實の證明は只一つの實感で充分である。

少なくも之の三ツの命題が證明せられぬ間は、絶對に在來の公理の證明不必要論は（私の證明の定義を待たずして）存立する事の出來ないものである。又實際之れ等の命題は全く虛妄である事は明白な事實である。

■そこで愈々本論に入らう。

之の大現象界が原因結果の大循環關係なる事は已でに說いて置いた。之の現象界は先づ

伊、客觀的循環と

呂、主觀的循環と

に別れる。之れ等の分離は說明の便宜なる事は勿論である。前者は客觀の中に於ての循環である。之れは現象界の大事實で大體明白であるから之處では說明を略く事にする。勿論客觀は循環流動だとは云つても、それは決して今日の流動が直ちに何千年の上流へ立戻つて行くと云ふ樣な循環を云つたのではない。只時間的には無限に果しなく流下する循環である。即ち無限の循環的連續

——始めなく終りなき無限の連續である。勿論過去は無限の永劫に現在し乍ら又不變の本質は永劫に流轉して居ると云つた迄で、何も吾人の眼前で割間が五色の彩輪を色々に廻わして見せる樣に循環の曲藝を見せて呉れる譯ではない。だからとて宇宙を上記の如き意味に於て循環也と云ふても差閊へもなし、私の循環論を覆へしもしない。況んや之の大客觀の關係の中へ主觀の方式、或は範疇が加はつて始めて大な別個の循環が一つの加速度を持つて展開せらるゝに於てをやである。

上掲の呂は即ち主觀內の循環である。主觀內と云つても主觀丈けの循環ではない。即ち之れは具體と方式、客觀と主觀の循環であるから割合に關係は面倒である。搔摘まんで云へば

第一、主觀內の所謂方式は一面からは主觀外の客觀に依つて規定されて始めて生れる。そうして其の被規定關係を永久に續ける。

第二、且つ主觀の中に含まれて居る客觀性に規定されて生れる事同斷である。

第三、主觀が外部の客觀から得た規定は亦主觀自身の客觀性を支配し、又逆に主觀外の客觀をも規定する。斯くて之れ等の主觀性と客觀性との相互的循環規定は誠に際限がない。皆等しく大宇宙の宏大な循環の中に連つて了ふ。

第四、主觀內の方式は方式として又果てしなく思考の分化統合の連鎖に依つて循環しても行く。且つそれが循環しつゝある間も方式丈け獨自に循環するのではなくて一、二、三の大循環現象の中に連つて循環するのである。抑々主觀的方式なるものは先天的にあるものではない。皆大客觀實在のもてる性質の指標を客觀の持てる主觀性が抽象して遺傳的に發生論的に相傳へて造り上げた所のものである。則ち實在の皺襞であり、客觀流動の凝固に過ぎない。そうしてそう云ふものゝ團體が主觀である。結局主觀とは客觀の半面であり、客觀とは主觀の半面である。

第五、斯くて斯かる方式を可能ならしむる大客觀は何に依つて證明せらるゝかと云へば、又其の方式を內容とする主觀に依つて循環的に證明せらるゝのである。

偖て之れ等の問題を根本的に眞に思索的良心に恥ぢない樣に研究するのは非常な努力が要る。相當に研究しても隨分厄介な問題である。元々之の小論文は人々に同意して貰ふのが目的であり、人々をして循環論證の認識の傍迄行つて貰へばよいのであるから、之の點に於ては只大循環現象の特相を擧げるに止めたのであるが、然し循環論證の大疑點が之の中心に蟠つて居るから相當の說明をせねばならない。

其の大疑點は即ち公理である。そこで公理に關する在來の思想を覆へしさへすれば表象世界の循環に對する巨大なる障害が除かれる譯けである。問題の黑白は決定すると思ふ。

私は所謂公理なるものはなしと信ずる。

實在の微分流動の中に存在するものは無限の關係である。然るに公理なる怪想は

一、之の關係の事實を無視して（先にも云つた通り）『獨自に明白な直觀』と云ふ樣なものがあると思つた爲め、

一、餘りに明白過ぎて在來の理解的證明の出來なかつた爲め、

一、感覺的證明は證明にあらずと思つた爲め、

一、現象の中に澤山ある個物や統一性に誘惑された爲め、

一、主觀の統一癖の爲め、

一、吾人が『超越實在』なる怪物があると思つた爲め、（但し之の『實在』なる意識は僕の云ふ循環論證眞理的實在ではなくて、神や物如や意志が實在だなど云ふ意味の實在である）

一、『不變固執』てふ思想の爲め、

一、無限の循環流動の傾向を絶對一直線的なものに考へた爲め、

一、物には必ず絶對簡單と複雜との差別があると云ふ認識の假幻に誑かされた爲め、

一、反對的立場の考へられぬ實感の爲め等々

が色々集まつて斯かる現象が起つたのである。

成程私は認識を整理する爲めに公理に似た樣な大歸納大綜合大縞繹的中心を置く事は同意である。そうして之れを例うれば四方の村落との需要供給消費の經濟關係を整理する爲めに都市と云ふものが存在するが如きである。人々は決してこう云う經濟關係を無視して神話的に傳說的に無條件に神樣が天下り的に建設した樣な都が有るとは思はない。即ち都市が周圍の村落に對して其の供給吸收の作用を緩漫にすればする程、其の販路を狹くすればする程其の都市は小さくなつて行く。そうして遂には都市は小さい市場になり、結局村落の中に亡なはれて了ふ。所謂公理結節とは丁度認識社會の大な市場に當るのである。それ故市場が村落の根據でない程それ程公理も亦認識の根據でない。其の大部分は認識の大連絡の地方的結節物に過ぎない。公理の向ふにその周圍に尙大な原理の群れが浪打つて居る筈である。

又之れを別の語に例へれば

公理は認識の一銀行に過ぎない。在來の實在とは即ち中央銀行であらう。それ故地方銀行に當る樣な小公理もある事勿論である。之の比喩は說明しなくても御判りだろう。之の二つの比喩を諸君は何處迄も推挽して比較して見て頂き度い。

公理はカントの云ふ様な先天的大綜合判斷でもなく、無上命令でもなく、認識の根據でもなく、純なる『單一』でもなく、實在の行止りでもなく、絶對明白でもなく、絶對超越でもなく、獨自獨個でもなく、永遠の不動眞でも大實在でも何でもない。

凡ての定義が假裝せる公理であるが如く、凡ての公理は假面を被つた定理である。定理は又面帛せる公理であり、之れ等の凡ては循環流動の因果の一翼面に過ぎない。之れ等は程度の差で性質の差ではない。

斯くて其れ等の公理は一々の場合に於て必ず證明せられるものである。

それには三ッの手段がある。

A、或る公理其のものの固定凝結を循環流動の關係の流れの中に解體し、稀薄にし、即ち還元する事に依つて證明するのである。

B、公理がそれ自身に明白で證明が要らないと云ふ臆斷を破るには現在證明せむとする公理が必ず他の公理や定理を豫想し假定して居る事を證さなくてはならない。(即ちCの消極である)

C、定理と公理の或る者を前人は非循環的に證明すると號して奇怪な努力をしたがそれを一々破つて公理や定理を眞に循環論證に依つて證明する。(之れはBの積極である)

Aは絶倫の難事業である。之れは公理が發生論的に生成し來つた遺傳から切離して、其の原頭に溯つて公理の正體を暴露する事である。

私が『オイケン哲學の批難』の中で餘りに飛上つた誇負ではあるが自ら『公理の向側へ行く』事が出來ると云つたのは之の事である。私にもどの公理に對しても之れが出來るわけではないが、尤も至難な第一公理に對して之れを他日試みる積りである。然し已でに私は比較的にやさしい公理、云ひ代へればまだ公理作用の激しくない稀薄な公理に對しては之れを行つて見た。即ち『オイケン哲學の批難』の中で、人間の自我意識なる大公理を簡單ではあるが充分根本的に分析し破壞し解剖して見たので、一部の人々は公理批判の一端なるものが如何なるものか公理の向側へ行くと云う事が如何なるものかを充分に想像されたらうと思ふ。*

何れにしても第一のものの研究は一冊の書籍の中の店貸り位では迚も不可能であるので自分は之れは或る程度に止めて置く。且つ之れは完成しなくても循環論證の眞理論が不可能になる憂はないからである。其の上自分が一生の間に之の點に於て出來る處のものは極めて少ないものであらうと思ふ。

然し眞に最高の公理に到ると更に困難は大きいのである。斯くも長い年月の間人間の迷執になつ

*後段錯覺自我說の中の自我觀念の分析も之れに當る。

て居た位のものには何等か其處に強大なる妄想根據がなくてはならぬ筈である。例へば『全體は部分より大なり』等の公理に到つては之れを實在の中へ發生論を溯つて、即ち再び周圍に還元して批判を行ふには容易な事ではない。私が『自我』なる大觀念大公理を破るには幸ひ『錯覺自我』なる反定說が有つたからこそ出來たのであるが、そうでなければ中々それは困難であつた。

實に色々の大小公理を破つたり、分析したり或は眞正なる實在還元を行ふには、澤山の新しい原理が入用なのである。成程只斯う云つた丈けでは一寸想像の付かない人もあるかも知れぬが、之れは人間が一度はどうしても試みなければならない處の事である。若し之れが出來なければ吾人は『循環論證の眞理觀』を放棄する方が增しである。(之れ等の實例に付いては私の循環論原著を御覽になられ度い——追記)

Cに到つては最初に云つた私の說明の定義から必然的に生れるもので、命題が公理的であれば有る程感覺や實感に訴へる事は勿論である。そうして其の證明は理論上は無數無限にある筈である。之れは先づ

一、公理の客觀的實行上の妥當性に據るプラグマチックな功利的な證明法を用ふる事、

二、或は他の理論や原理を用ふる事、

三、或は說明原理を假定する事、(即ちユークリッド風にすれば、證明の前に無理に假定した公理を其の儘襲用して行うのであるが、循環論證ではそれが決して無理ではない)

四、圖解を補助にする事、但し之れは參考にしかならぬ場合が多い。

五、直觀、實感、感覺に訴ふる事、

六、其の反對の眞實が考へ得らるゝか否かを考へる事、(即ち矛盾律等を應用する)

其の他にも澤山あるがまだ悉皆的に考へて居ない。

斯くて『二點間を結ぶ最も短き線は只一ッに限る』なる公理(或は定理?)を證明する方法は非循環主義者の想像出來ない程澤山あるのである。

Aは即ち長い遺傳に依つて現はれた公理に時間的に反逆する事に依つて批判する方法なりとすれば、BCは空間的に公理の現在の妥當性を檢竅し裁斷する方法である。實に凡ての公理と云はれるものを澤山並べて、そうして公理なるものが人間の認識に發生し來れるものを年代的に列擧して、一々の公理を發生論的に說明し、そうして其の價値の眞實なものと虛妄なものに大な斷案を與へるには、どうしてもABCの證明方法が公理の過程主義的發生論的研究と相俟つて必要であるが、之處では循環論證に關する點丈けを暗示的に語つて置かう。

そこで便宜の爲め幾何學の公理を持つて來やう。例へば

『同一の量に等しき量は相等し』

『直線は二點間の最短距離なり』

『一點を過ぎて一つの直線に平行なる直線は唯一つなり』

或る學者は之れ等を皆公理とし、或學者は二、三のものを定理なりとした。

斯くてユークリッドの如きは後者に付いて滑稽極まる方法に依つて彼れの『所謂證明』なるものを試みた。

吾人は『餘りに簡單』とは『絶對に簡單』てふ事を意味せぬ事を知らねばならない。又『絶對に簡單』なる觀念は形而上的には何等の意味なき一つの主觀的假幻に過ぎない事を知らねばならない。斯かる事實は客觀的にも主觀的にも決して命題に絶對の公理性は與へないのである。丁度『餘りに近い、頗る近い、無上に近い』と云つても、それは必しも二ツの點の間の距離を否定しないと同斷である。如何に簡單なる方式認識でも、若し吾人の意識が其の向ふに行き得るならば必ずそれは其の儘大な複雜になつて了ふ。『全體は部分より大也』『一量に等しき二量は互ひに相等し』實に私には之れが無限に複雜である樣に見える。『有』なる最簡單な觀念に於ても又然りである。

そこで私は斷乎として云ふ。

『同一の量に等しき二量は相等し』なる公理命題の中には無數の假定が含まれて居る。前々から『凡ての結論は二ツの前提を假定する』と云はれて居るがそれは誤で、實は無數の前提を假定し、且つ其の前提は又無數の前提を假定して際限がないのである。上述の命題の如きは決して人々の云ふが如く純粹の幾何學の命題でも、將た又純粹の方式の問題でもなく、實に具體的命題であつて、無數の前提を豫想して居るのである。之れを一々數へ上ぐるのは餘りに煩はしいが、然し二三の證據を上ぐれば即ち

『同一の量に等しき』とか『相等しき量に等しき』とか云ふ斷定が已でに一つの明白な且つ甚大な假定ではないか？ 之れを三百代言の粕理窟なぞと云ふ非常識な人は哲學の基礎論を談ずる人々の中には一人も居まい。彼れ等は『同一の量に等しき二量は相等し』と云ふ事を證明する必要がないと號して、特に之れを公理として擧げては居るが、然しどうして『同一の量に相等しい云々』なる大複雜な假定が無條件で認容されるかを非循環論證的眞理主義者に訊して見度い。已でに之の公理すら一つの大な顚覆法（トートロジイ）である事は明白ではないか？ 誠に『同一の量に等しき二量は相等しい』なる事實が現前して居るからこそ『同一の量に相等しき云々』てふ假定が存立し得るのである からこそ『同一の量に

等しき二量は相等しい』なる事實が證せらるゝからこそ……斯くて果てしのない循環の中に凡ては逸して行くのでないか？

そこで私は

『凡ての公理は無數の公理を假定する』

と斷言するものである。其の他の凡ての公理に至つても比々として皆之れ然りである。そうして之れ等の公理が同一律や矛盾律なぞの公理を相互的に豫想して居る事なぞに到つては特に云ふ必要を認めない程明白な事實である。

若し第二第三に擧げた命題をも公理也とする人に對しては又以上の批難が充分の致命的權威をもつて適用さるゝのであるが

『いや、公理ではない。定理である。故に例の極少數の定義と公理とに依つて證明出來る』

と云ふ人々には又別の考察をしなければならない。

本來之の人達が之の簡單な半公理を證明せむとする其の御手際と云へば實に滑稽である。人々は御互ひに經驗がある事であらうが私は十三歳の時始めて田舍の中學で『幾何』と云ふ名前からして變な學問を教へられて、之の定理の證明やハテは其の他の色々の奇怪な證明、特に幾何學教科書の始めの方を滿している證明、一例を上げれば、何の關係もない樣な處に飛んでもない線（いつでもそうだとも云はぬが）を一本引いて、時にはその事を延長だなぞと云う、そうしてそれは其の儘にして置いて、ソロ〳〵と外の方から廻り道に贅い事をして學生等を其處へ連れて來てパタリと其の棒の長に仕かけて『之れが即ち證明である』と云ふ樣な不手際な事、或は又四邊形と四邊形とを重なり合せるユークリッド特有の奇妙な方法等を教へられて如何にも腑に落ちなかつた。恰もバカされる樣な心地がした。然しサッパリ判らぬ子供の事故、あれが矢ッ張り順當の事なので試驗に出たら暗記して書いてやれと思つて居た。私が循環論の自覺に到達し、且つそれで幾何學の批判を始める迄之の滑稽な不手際な科學の手品が飲み込めなかつた。然し實は之の不自然な事實こそは飽く迄循環論證の眞理の可能なのを證明して居るのである。然もナイーブに事實を取込む事の出來ない程實在の假幻なる公理に捕はれて居たピタゴラスやユークリッドは斯かる奇怪な迂愚な方法をもつて人を陷れるのは、實は豫め循環法を用いて居るのだと云ふ事を氣が付かなかつた。即ち循環論に依つて豫め充分な證明をして置いて、そうして改めて極端な大迂廻をして、即ち循環法を使用せずとの假幻を保たんが爲めにあんな證明の詐欺をしたのである。

ショーペンハウエルがユークリッドを攻撃して居るのは實に面白い。二人とも循環論證を夢にも知らずに暗中の模索をし乍ら考へて居る内に前者の方から後者の方へ突當つたのである。彼れは自分ではカントから貰つた明白な自覺を楯にユークリッドを攻撃して居る積で居るが、實は手探りで見當違な攻撃をして居る。成程ユークリッドが其の命題の或者が直觀的に明白である證據を捨てゝ骨を折つてそれに別に論理的根據を與へむとして非常な無理をした行爲は如何にも不適當ではあるが、然しそれは不手際乍らも直觀なる助け船を比較的用ゐずに（ユークリッド自身は絶對に直觀を借りぬと思つて居るが）仕了はせたのは事實で、循環論證の眞理から見れば大體に於ては甚だしい虚妄を働いたのではないと云へる。所がショーペンハウエルがそれを攻撃する武器はユークリッドが過つて居る丈けそれ丈け過つて居るから面白い。即ち彼れは直觀は先天固有の認識方式であるから何でも直觀で信用出來るものは廻り贅い理解の證明をしなくても安心して直觀の現前證據に依賴してよいと亂暴な事を云つた。所謂『偉大なカント』が保證して呉れる事であるから、一人として之れに疑をかけるものはなかつたが、然し之れはユークリッドよりも尚甚だしい過誤であると云はねばならぬ。ユークリッドは何でも出來る丈け證明（然し理解のみで）しなければ惡いと云ふ良心を持つて居たが、ショーペンハウエルにはそれがなかつた。そうしてユークリッドの仕方を『跛になる爲めに足を切る男』に比べたり何かして居るが、然しそう云ふショーペンハウエル其の人の方が遙かに間違つて居る樣に思はれる。實は循環論證に依れば、ユークリッドが無理槍に理解で證明せむとした色々の幾何命題は、直觀と理解と相俟つて循環的に證明せらる可きであつて、それ故『どうしても問題を證明しやう』とした點はユークリッドがショーペンハウエルより勝つて居るが、直觀に依らずに妙な理解に依つて、手を後手に縛られて足で繩拔けをやる樣な幾何學の輕業をやつたりしたのはユークリッドが惡い。之處は飽く迄も自然に素直に理解と直觀（ショーペンハウエルの推薦する）とで循環的に證明す可きであつた。然しショーペンハウエルの樣に『最も確かで而も決して說明の出來ぬ根據の原理』と云ふ怪物に依つて證明なるものを排斥するのは間違つて居る。又どんな單純らしい命題の中にも、理解が紛れ込むで居る循環的事實を知らずに無理に直觀計りに事實を片寄せたのも間違つて居る。

實に之の二人の思想の反馳して居る背後には循環論證と云ふ眞理が嚴存して居るのであつて、之の二人は之の眞實の反面に嚙り付いて眞違つた考へを追つたのである。そうして二人が循環を逃ゆやう〳〵とすればする程循環に陷つて行くから面白い。實在は一ヶ所でも間違へば無限の彼方に行つて衝突するものである。實在は人に金を貸して忘れる樣な男ぢやない。それ故之の命題が眞實な

らどんなに廻り道をしても理解(計りでは實は出來ぬが)で證明の出來ぬ筈はない。即ち東京から横濱へ行くのに實際地上が皆地續きであるなら、東京から水戸青森新潟下ノ關神戸と廻り道をしても必ず横濱へ行けるに相違ないとユークリッド家が思つたのは實は循環論證の證明にこそなれ他の眞理の證明にはならない。又ショーペンハウエルが直觀は理解の近路であると云つた事は東京から水戸青森と廻つて行けるなら必ずまつと近い處に直接の道が有る。そこをなぜ通つて悪いかと云ふのだ。之れも又循環論證を證明するとより外には考へられない。

■『凡ての定義は公理と定理を豫想し含蓄す』

と云ふ斷案も循環論證の眞理論から必ず生れる事である。ボアンカレーは平面なる定義の中に一ツの新公理が隠匿されて居るのを發見したと事々しく揚言したが凡べての定義から之の種のものを發見するのは難くない。直線の定義の中にすらも『二ツの點を結ぶ最も短き線は只一ッ也』なる定理が隠匿されて居るのがよく判る。點や線は二ツが相互に豫想し合ふ計りでなく、各自に或る大形而上原理が豫想されて居る。然し私は今は之れを語るまい。

■數に付いても同斷である。數と循環論證とは宏大なる關係がある。

數はライブニッツや新實在論主義者の云ふ如く純粋に論理的に理解も出來なければ分析判斷的に縯繹的に論證されるものでもなければ、又カントの様に先天綜合に依る直觀計りでも絶對に不可である。矢張り自然に流動の具體の中から素直に、循環的に之の兩志向を統一して出發しなければ不可である。之れは單なる折衷と云ふ様な曖昧なものではない。實に循環論證なる根義から之の兩志向の統一が可能である。それを嫌つて何でも理論でユークリッド風の思索で片を付けやうとするから近代の數學者が集まつて『數』に關して極めて不自然な説明法をしたのである。之處は飽く迄も理論と具體的直觀とを交在循環さして且つ發生心理的に數の本質を握ろうとせねば其の哲學的意義は得られないのである。只現前の方式のみで『先天的理論』と云ふ様な怪物に乗つて四苦八苦の無理をしても決して成功はしないのである。處が誰れでも數學者は之の無理な努力をしたが、其の中でもライブニッツが 2+2=4 の證明なぞは百世を笑殺するに足る證明である。之處では長いから書けないがそれはユークリッドの證明法を猶奇怪にしたもので、ライブニッツの様な偉大な數學者でも愚劣な傳統的觀念主義を脱しない爲めに今日から見ると色々滑稽な非常識な哲學を働らいた様に又之處でも只二千餘年の科學傳習を脱する事が出來ない爲めに、色々思索の喜劇を實行して居る

のである。

1＋1＝2が證明する事の出來ない公理だと云ふのは間違である。私が上の公理の場合に於て試みた樣な方法に依つて循環論證的に自由に證明は出來るのである。若し傳統の如く之れを證明す可からざる明白と云ふなら、2＋2＝4も亦證明す可からざる明白ではなからうか？2＋3＝5，5＋5＝10，10＋10＝20等も皆證明す可からざる明白公理の樣に思はれる。然し彼れ等は皆1＋1＝2のみを公理とし1＋2＝3なぞは證明す可き定理として居る。本來公理と定理の明確な差別のある筈はないのに何が故に之の二ツの間に公理と否との關門を立てるかと云へば誰れしも決して說明仕得なかつた筈である。之れは皆昔しから循環の强迫豫想に襲はれたが故に之の邊で斯くの如き曖昧な誤謬に沈湎して居たのである。實際過去の數學者や科學者が『數の哲理』を語つた其の反對說を揭げればそれでも私の循環論證的數學の哲理は出來上ると云つても大した間違ではない程に人々の證明の仕方は誤つて居たのである。

そこで私が如何なる數學の哲理を想像して居るかは下述の新幾何論の組織に依つて豫想して頂き度い。

一口に云へば私は客觀の微分流動の根據の中から自然に個物の生誕を說き、其處から循環論證的に理解と直觀とを驅使し乍ら數の發生を素直に說明して、數の客觀的不動の根據を思惟や方式なる主觀と離れて樹立すの事は誠に容易であると思ふ。

數なる問題を離れるに當つて注意す可きは嘗つて『數が實在也』なぞ云ふた思想のあつた爲めに只何となく之れ等が循環論證の眞理を破りはせぬかと云ふ妙な得知らぬ疑念を感ずるが、之れは全く根據のない怪想に過ぎない事を付け加へて置けばよろしい。數が如何なるものであるとも少なくも嘗つて考へられた如き作用をなすものである限り循環論を破るが如きものでは決してない。そう云ふ事は想像出來ぬと云へば足りると思ふ。

自分は公理とか『先天的に明白な直觀』なるものに全く簡單に循環論證の眞理觀の立場から否定を加へたが、カントの範疇に對しても之れ等を應用する事が出來る。ショーペンハウエルは時間と空間と物質とに付いて總計八十數件の先天的明白なものを擧示し、且つ『根據の原理』なるものを提供したが、之れ等も又循環論證の眞理に依つて其の虛妄を破壞する事は容易である。

論理學の範圍に於て、又或は三段論法なる法式に對して循環論證の立場から之れ等の傳習を破壞するのも又容易である。同一律や矛盾律に關しても亦同斷である。

それは自分が最初に試みたものと同工異曲であるから讀者御自身で試みて欲しい。

■それよりも私は全く目新しい水平を讀者に提供しやう。それは私の眞理觀に依つて、幾何學が何んな變化を受けるかの問題である。

全く間違つた根本から出發したユークリッド幾何學は、斯くの如き新しい循環論證的幾何學に代られなければならない。

即ち新幾何學では斯うなる。

(一)最初に循環論證の眞理を證明する。

(二)ユークリッド風の不都合な定義と公理とを置かない。

(三)其の過程の任意の中途に於て大な歸納と縯繹とに依つてユークリッド幾何學の定義や公理に相當する大原理を結論する。凡べてが循環論證であるから、一つの原理を證明するにも實に無數の證明の仕方がある。如何なる場合にも證明の仕方に困る事がない。第一定理を說明するのに、已でに第三定理により任意の第X番目の定理に依る事もないではない。

(四)然し事實を組織立たせる爲めに尤も大切な原理を稍始めに立て、それから自由に歸納と縯繹とに依つて無限に其の科學系統を進めて行く。

(五)根本原理を設定するが、それは飽く迄便利の爲めで、其の爲めに小さい定理かの如くに見ゆるものを、無暗にユークリッドの如く犧牲にしない。何となれば實在には便宜上大切な原理、小さい定理と云ふ樣なものはあつても、二ツが互ひに存在を爭ふ時には、其の二ツは一ツが頗る公理的であり、一ツは隱れて吾人の生活から遠い小さい定理だからとて其の存在を上下されない。之處では何んな小さい事實でも實在の循環關係の中にある以上は大な原理を覆へし得る權威がある。

(六)故に之の幾何學はユークリッドのそれに比べて飽く迄流動的非固定的である。飽く迄生成的である。何となれば絕間なく循環論證に依つて原理を無限に取入れ、定理を無限に進めて行くからである。それは實在の大無限の可能性に依存して居るからである。決して在來の幾何學の如く數個の固定公理の上に立つて貧弱な見え透いた思索をやつては居ない。

(七)之の幾何學は單なる縯繹の方式數學ではないから其の意味に於て所謂純なるものではない。常に方式と具體、云ひ代へれば歸納と縯繹との竇食であるから其の可能性は無限である。(私の思想の中には純なる先天方式のみに依つて作らるゝ科學なるものは存在しない。幾何學と雖も、斯くの如く具體的であり、經驗的であり、後天的である。數學と雖も、在來の『數』なる公理から出發した縯

繹ではない）

(八)ユークリッド幾何學は屬在的である。私のそれは一見しては共在的である。然し乍ら如何に共在的でも、それが最後に大循環の關係の中に入るなら其の組織は完全である。ユークリッドでもカントでもショーペンハウエルでも其の組織は屬在的であるが、肝腎の公理や根據の原理や範疇は共在的であり、積木の如くバラ〳〵な土臺であるが故に結局は支離滅裂である。

(九)ユークリッドの幾何學は簡單な公理から澤山の複雜な定理を導き出した樣に胡麻化して居るが、實はそれはユークリッド（計りではない。カントでも誰れでもそうだが）が手品を使つて內證で色々の非幾何學的な、即ち感覺の假定を澤山導き入れて循環論的にトリックを行つたからあんな大組織が出來上つたのだが、皆ユークリッドの如き非循環論證主義者が用ゐる權利のない材料を使用してあんな輪廓を誇つて居るのである。然るに之の新らしい幾何學に於ては一切が循環論證であるが故に公然自由に其の用材を用ゐて行く事が出來る。即ち方式を助くるに自由に感覺や影像が來る。或は直觀が助手になる。そうして無數の複雜から自由に簡單へ、又簡單から自由に複雜へ行く事になつて居る。誠に之處に偉大な生成を爲す處の方式科學の特相がある。眞に立派な科學者とは只單に概念圏に於て一般概念から特別概念に辿つたり、一方の概念で一方の概念を充分に支配したりする計りでなく、同時に無數の勝手な具體の中から概念の融通を見出して、尤も廣い遠い概念の範圏に走り得る人物を云ふのである。

(十)ユークリッドの意味する樣な意義に於ては、之の幾何學には首尾がない。勿論創始者の便宜に從つて色々の首尾の整理はする。然し其の根據は只循環論證なる獨自獨異な根據であつて、決して小さい地球の上に乘つて比較的に大な、土臺を据へて、之れが絶對の先天根據だなぞと號するユークリッドの流風とは全然相違する所のものである。抑々ユークリッド等は循環論法の恐怖の爲めに公理を假定してそれで其の不安を免れたと思つたのであるが、實は正しく循環論證を容認しさへすれば決して公理なぞを假定する必要はなかつたのである。『二點間の最短直線は只一ッである』そう公理を假定するのが惡ければ、『直線とは二點間を結ぶ最も短き線なり』と云ふ定義を假定するのも全く同罪である。それよりも『四邊形の內角は合せて四直角に等し』なぞと云ふ複雜な定理を公理にした方が遙かに無邪氣であらう。

循環論に於ては之のどれをも假定しない。只互ひと互ひとを相關せしむるに過ぎない。實にユークリッドの公理を全く遠く離して見ると東洋日本國の東京市が宇宙に逆さに吊してあるのを見る時の滑稽を連想する。滑稽ではあるがそれが本當の眞相なのである。

(十一)之の幾何學はユークリッドのそれの如く一般から特殊に辿るのみが能事でない。已でに明らかになつた公理に依つて色々の小さい特別な複雜を證明するのを能事とする。即ちユークリッドの過程を二倍にして之れは無數の大循環の特殊の中から一般を引出さうとする。それ故之の幾何學に於ては公理樣の原理が書籍の劈頭に現はれずに、或は中央に或は最後に現はれる。例へば『全體は其の一部より大也』と云ふ樣な簡單な命題を證明するにも、ユークリッドの樣な無雜作な事もせず、又盲目の跛者が走らうとする樣な不自然な證明法もせぬ代りに循環論證的に長々しい乍らも素直な正直な確固とした證明を大仕掛けに實行する。それ故ユークリッドの出發點は之の幾何學にあつては峠の頂の到着點になる。そうして尙其の向ふに果てしのない過程が續いて居る。又之の幾何學はユークリッドの樣に單純から複雜へ行き放しの證明ではなく、常に複雜から單純へ立戻りもする。云ひ代へれば凡べての定理が澤山の反射定理を持つて居るのである。其處が過程が二重にも三重にもなるのである。即ち之の幾何學は內容に於てユークリッドのそれを二倍にして二重にした樣な所がある。

(十二)公理と定義のみが直觀に基いて、他は凡べて理解に基くユークリッド的幾何學を絕對に排却して、之れは直觀と、感覺と、理解とを公平にそうして無限に循環的に角逐さして範圍を擴げて行く。

(十三)それ故ユークリッドの幾何學は與へられたる公理の敷衍幾何に過ぎない。然るに之れは實在の內容を飽く迄も追かけ、飽く迄も其の原本輪廓と競はむとする志向を持つて居る幾何學である。(人間のする事故大した事は出來ぬとするも)

(十四)ユークリッド幾何學には臆說があるが、之れはそう云ふ種類の臆說がない。其の代り如何なる眞理も宇宙の大循環が眞理である丈けの程度の眞實で、それ以上に眞實でもそれ以下に眞實でもない。之の幾何學の中に眞理が有つても、それは神樣の御詞程の絕對的眞理ではない。其の代り又過去のあらゆる臆說よりは比較を絕して眞實である。何となれば、之の眞理は宇宙の大循環流動の關係の中へ入れても何の矛盾もなく、他の關係と平衡の流動關係に入るからである。故に之の幾何學の眞實性は神樣の詞程の權威は持たぬにしても、少なくも在來の凡べての假定科學に對して『予は假定せず、臆說をなさず』と云ふ事が出來るのである。ボアンカレーはロシアのロバチエブスキーや、匈牙利の某ボリアイが、ユークリッドの公準を證明する事が出來なかつた爲めに『無公準幾何學』は永遠に現はれないと臆面もなく斷言して居るが、それは世間の狹い考への樣に思はれる。彼れが絕望したのは非循環論の世界に於て絕望したので、それ丈けなら無理もない事である。只ロバチエブスキーとボリアイの失敗は單に『出來ない樣な方法に依つてやつたから出來なかつた』ので、

出來る樣な手段をもつてすれば無雜作に出來ると思ふ。私は之れ等の人々の豫想とは正反對に、絶對に無公準無公理的幾何學の出現を理想として居るものである。勿論私の無公準と彼れ等の無公準とは非常に意味が異るであろうから、彼等の否定する實質を私がそのまゝ肯定すると考へられては困る。

以上は循環論證的幾何學とユークリッド幾何學の比較である。佛蘭西のボレルの數學や獨逸のベーレドセンとゲッチングの所謂『新式數學』なるものの組織は皆淺薄な動機に依つて作られたものであるが、それが皆本人等の夢にも知らぬ之の循環論證の新數學に多少酷似して來て居るから頗る面白い。又同じく獨逸のトロイラインとか云ふ學者もユークリッドの排列法を破つた新しい幾何學の組織を造へて自ら世界の中で尤も勝れて居ると傲語して居る相だが、要するに循環論的立場から見れば、昔のものと大同小異だらうと思ふ。兎に角循環論證の眞理の上に立つた數學程正當な數學組織は考へ得られない。

之の新眞理の上に立つた科學と在來の公理的方式科學の差異に付いては、他日詳說し度いと思ふ。然し乍ら其の大體の差違は以上の說明で思央ばに過ぎるものがあらうと思ふ。又循環論證の幾何學は幾何學として自然に本來的な組織がある。それは人間の認識の本質から來るもので私が將來研究せむとするもので、今私にも判つて居ない所が澤山ある。

在來の科學は公理と云ふ後暗い假定に立つて居る故に、哲學的數學だの幾何哲學なぞと云つて、之れ等の公理や數の本質を研究するものとしての哲學を其の幾何學や數學と對立さして來たが、之の循環論證的幾何學には斯かる分離分業は全く不必要になつて來た。實に彼れ自身が科學の版圖を擴げる計りでなく、哲學の領土に食込んで其の截然たる不自然な無意味な境界を撤回して了つた。

されば科學と並ぶ哲學は何んな職分であるか？

即ち哲學の觀念すら變らねばならぬと思ふ。

■然らば循環論證說は眞理也としたならば普通よく論理學に現はれて來ては直ちに人々に排まれる論法の『論據要請』は抑々如何？と云ふ問題が必然に讀者の胸に起つて來るに相違ない。之の矛盾の解決は誠に無雜作である。即ち私の循環論證と在來云來つた論據要請の觀念とは大變に違ふのである。手早く例へれば私のそれは無限無數の關係の循環であるが、故に比喩するにもそれは迚も一つの輪や何かでは現はせない。丁度『オイケン哲學の批難』の一六八頁に現はした畫圖を立體的に無限大に且つ微分的に考へたものが即ちそれであらう。然るに在來の論據要請なるものは『AがBならC

はDである。然るにCがDならばAはBである』と云ふ丈けのもので且つ之れが非循環論證主義者の意味する論據要請なるが故に、之れは自分の意味する様な無限無數の關係の中に妥當性を持つた循環論證ではない。寧ろ比喩に現はしたら丁度秤量の竿の兩端に吊した重さの如き關係であらう。即ち之れは片方が何か他のもので立證されなければ直ちに破壞される論證であるが故に、私はこれを嘗つて小循環論證とか僞循環と云つたが、實は之れは論據要請なる名をも止めて『對關論證』と名付けるのがよろしいと思ふ。對關論證は大循環論證になり得ざる所の所謂循環論證の必ず陷る所の論證で、斯くの如き對關論證は必ず虚僞なる事を自分は斷言するものである。

永たらしくなるのを避けて之れを又個條書にすると、之の問題の主要な點は下の如くである。

一、對關論證は詭辯家が理解の方式を色々に繼ぎ合はして造へたか、或は認識の錯誤に依つて出來たのだから關係は無限に連つて行く事が出來ず、何處かで虚僞を暴露する。それ故に他人と議論をする時君の議論は循環論だと云つてもそれは決して其の人を虚妄だと云ふ事には當らない。寧ろ其の人が其の論を『大循環論』である事を證據立てれば其の人は勝ちなのである。(古來の凡べての眞理は實にそうして勝つたのである) 故に他人の所論の妄を暴くには循環だとか對關だとかを調べる必要はなく、只其の論點の關係を何處迄も推論して行つて之の先在の宇宙の大循環の中へ引き繼いでそれで不都合が有るか無いかを見ればよいのである。それで不都合ならそれは明らかに對關論證であり、矛盾がなければそれは循環論證の大眞實である。

一、本來言語は簡單であるから單なる表現の上に於いては循環論證も對關論證も形式的に全く同一で共に論據要請になつて居る。

一、古人が『それは循環論法だ。誤りだ』と云つて凡べて一嘘に付して何んの矛盾も起らなかつた論證は、實は彼れ等が對關論法のみに出會つた時に『これは循環だ』と云つて拒んだのに過ぎないので、眞の大循環的眞理の處へ行くと循環論などと認定する處が皆公理なる偉大な偶像の處へ連れて行つて眞理なる切紙を貰つたのでそれで何千年の間何の不思議も起らなかつたのである。

■所謂先天論も後天論も充分に之の發生的見方の循環論に依つて說明が付く事と信じて居るが、之れは循環論の眞理を說く爲めには重要でないので略かう。

■時空と有觀念（特にヘーゲルの批評）に付いて根本的に私の立場から批評せねばならぬが、之れは循環論を完成する爲めには必要ではあるが、之れ亦循環論の眞を證する條件にはならぬから今說

く必要はない。

■私の循環論證の眞理論が形而上的にどれ丈けの妥當性があるかは大問題である。之れは形而上原理と向ひ合つて論ずる必要があるが、別に循環論が之の時空內の眞實を證明する事とは無關係であるので、今は肝要でない。

■私が『オイケン哲學の批難』の中でデカルトの提唱を循環論の立場から批評した事に付いて一言付け加へて置かう。

私のデカルトの提唱批判は私の『循環、錯覺』の二大原理とそれから或る形而上的原理の三ッが巴になつて搦み合つて居る大契機なのである。云ひ代へれば私がデカルトのあの提唱の批評をすれば、それ丈けで私は私の三大原理の消極說明をした事になる因緣が有るのである。其の樣な入り込んだ事情は何處から來るかと云ふにそれには由來がある。

一體思想はどうしても斯う云ふ本能的要求を持つて居る。

a、少なくも先づ一ッ獨自に慥で眞實で明白なものが要る。

b、そうしてそれは必ず凡べての關係に於てそれ等の根據になる樣な不動なものであらねばならぬ。

c、そうしてそれは形而上的妥當性が無くてはならぬ。

之の三ッを之んなに自意識的に區分して誰も考へた譯ではなかつたが、歷史が努力し來つたものは明らかに之の三要求である。只自覺が曖昧なりしが爲めに皆が之れについて暗中の模索をやつたのである。之の自覺が段々熱して來ると共に近世の曉明期の底に於て卓越した自覺をもつてデカルトが之の問題に明白に突き當つたのである。そうして彼れは

『我れ考ふ。故に我れ在り』

と歷史的に、世界的に叫んだのである。斯くて彼れは之の提說に於て隨分雜駁乍らaを證し、bを證し、cを證したのである。そうして世界は彼れを哲學の母也として賞讃した。少なくもデカルトの勝利は過れる勝利ではあつたが偉大な勝利であつた。

それ故私が之のデカルトの大提說を批判するには何うしても之のa、b、cを一々吟味しなければならないのである。

然るに私にも亦之のa、b、cを獲得せむとする內要求がある。そこで私はaを得んとしてデカル

トの如く自我に突當つた。そうして私は自我の正體は決して眞實ではなく生命意志の錯覺の上に築かれた自我觀念から生れた『錯覺自我』が自我なる存在の中核也と云ふ大幻滅に突當つた。即ち私は自我の存在に於てデカルトの如くaを獲得せんとして一敗地に塗れると共に人生觀の第一原理として錯覺我の眞理を獲得した。それ故私はデカルトの提唱のaの妥當性を批評する時に、直ちに私の錯覺我の眞理に依つて彼れを破つたのである。

又私はbを獲得せむとしてデカルトの如く無法な公理を獲ずして循環論證の眞理を得た。幸福な事には循環論證の眞理に依つて一擧にしてbと共にaの要求をも獲たのである。そこでデカルトの提唱のbに對する妥當性を破壞するのに私は私の持つて居る循環論證の眞理に依つたのである。

私はcの要求に於ては凡べての人と違つて或る形而上的原理を獲得した。勿論私はまた私の形而上的原理を說きはしないが、行き掛り上デカルトの提唱論の中に不完全乍ら其の片鱗を示してデカルトの提唱が持つて居るcの要求の妥當性をも破壞したのである。

かつ又私の循環論と錯覺自我論の二ツに依つて西洋哲學一般の『自我哲學』は完膚なく破壞し去る事も亦容易である。

實に斯くの如く錯雜した因緣が有るのである。

斯くの如く私が全く間道から私の循環論證の眞理論を證明したのは錯覺自我からデカルト論と連絡をつける爲めである。私の今度の說明法と『オイケン哲學の批難』の中に現はれた說明法とを表裏に合して、始めて循環論證說の完全に近い說明になるのである。或は之の中の片方でも充分な說明だと强いて云へぬ事もなからうが。

循環論證の立場より純粹經驗を否定す

（十二年五月）

■私は近頃『循環論證の眞理概要』なるものを發表した。私は『人間の論證は如何に避けむとしても結局循環論證を脱し得ざる事を信ずるものである。論證に使用した一切の前提、其他一切の論證材料を形而上學的に始末しやうとすると、更に無限に前提を延長して結局何處かで、最初の結論と交渉し、關係し、或は之れを前提の前提として豫想しなくてはならなくなる。然らば人間は始めから之の循環的關係を正面から承認して、之の中から眞理獲得の手段を講じなくてはならぬ』と云ふのが私の確信である。之れは西洋哲學の基礎論とは全く矛盾する考へで、その爲め、私は『概

要』に付帶して『西洋哲學の基礎は崩壞せざるや』と云ふ提問をした。そうして西洋哲學の基礎たる公理哲學の不可なる事を駁擊して之れを倒し、更に人間の哲學が前述の循環論證の方法論をもつて第一眞理に到達すべきものなる事を結論した。私書をもつて認めてくれる教授もあるが、なぜか公開的に之の重大問題を擧揚してくれる人がないので、尙ほ私自身が之れを學界に公認せしむる爲めに親しく努力しなければならない羽目にある。

私の彼の小册子に於て西洋哲學の基礎論は一網打盡的に打破された事になつてゐるが、然し文字が露骨でなかつた爲めに、私が意味してゐる通りに感じて貰へなかつた樣だ。或人は『西洋哲學の基礎論は公理哲學計りぢやあるまい。あれは餘りに概括に過ぎる』と云ふ意味にとられる樣な批評を私に提出された。之れは重大な批難で、私としては何うしても、もう一度私の循環論が西洋哲學の凡べての基礎論に致命的打擊を與ゆるものなる事をあれ以上に明白にしなくてはならなくなつた。

私の循環論證が眞理ならば西洋系統の哲學の凡べての基礎論は間違でなくてはならないので、私が寡聞でない限りは、皆例外なしに倒壞し去る可きものである。それは之等の哲學が凡べて皆非循環論證的思想であるからで、之れを列擧すると、

第一が公理哲學である。

第二が準公理哲學である。

第三が純粹經驗論である。

之の外に思辨によつて眞理に到達すると云ふ主義もあるが、今日一般には排斥されてゐるので、私が事々しく排斥する迄もない。

循環論證と云へば思惟主義でもなく、直覺主義でもない。之の二つを兼ねたものである。

公理論については已でに說いたから說かぬ。

基礎論と云へば哲學の土臺であるが、西洋でも大抵の人が之の基礎論については曖昧な態度をとつてゐる。大抵の人がこんな難澁な處は好い加減にして、まつと花やかな處で働いて、之の尤も肝腎な處では一寸御茶を濁して置くと云つた態度である。そうして極く簡單な貧弱な意見しか殘してゐない。何分にも眞面目なものがないので眞劍に駁擊するのに非常に骨が折れた。公理哲學と云つても彼等が公理に關して吐いた形而上的研究なるものは實に貧弱なるものである。その中でデカルトの基礎論は非常に嚴肅で偉大なものである。純粹經驗も又簡單ではあるが非常に眞面目で、又尤も新らしい丈けに多少進步したものである。之の二つは之の第二第三の部類の代表的のものと云つてよろしい。デカルトの『我思故我有』は一種の公理であつて私は準公理思想と見なしてゐる。そ

うして公理が倒れれば當然倒れるものとして置いたが、それでも『自我の公理』であるが故に、又特別の論據を作る必要もあつて、私は十年前に一面錯覺自己論なる見地からも之のデカルトの公理を打破して置いた。

色々の公理的原理論を吐く人もある樣だが矢張り皆準公理の中へ入る、

純粹經驗も亦公理思想の變形したもの故、私の發表した公理論丈けでも純粹經驗論に對する根本的否難とする事が出來るが、然しそれは著者がそう云ふ丈けで讀むでゐる人にそれ丈けに悟つて貰ふのは困難であつたかしれぬ。だから『公理的基礎論は倒れても純粹經驗論が殘つてゐるではないか』と云ふ樣な感想を凡べての人々に與へた樣であつた。それ故何うしても之れに對して尙ほ明白な態度を示さなくてはならなくなつた。

純粹經驗は外國でも唱へる人がある。然し出發論として說く人はない樣だがよくは知らぬ。日本では今日我が西田先生及野村隈畔氏が之れを鼓吹して居られた。隈畔氏には發表されると直ぐに私は批評の序に反對の旨を回く申送つて置いた。そして西田博士には之の春反對の旨を申入れて私の立場を明らかにして置いた。それから一月計りして反對說たる私の循環論概要を博士に送つて批判を求めたが遂に御一讀の光榮を仰ぐ事が出來ぬ由であつた。

純粹經驗論を今日博士が抱持せらるゝや否やは知らぬが、今日學界の主潮のよしであるから、私は之れを博士の思想としてではなく、極く一般の學界の公認信仰として研究して大方の御垂教を仰ぎたい。極く簡單ではあるが、その點は赦して頂きたい。

之の論文以外に私が過日發表した『循環論證の眞理概要』の八頁から三〇頁の邊の至る處に現はれてゐる公理批判がそのまゝ純粹經驗にあてはめる事が出來る。然し曖昧な表白であつたので更に明白にする義務があると思ふ。

*當卷では拾參頁から參拾八頁の邊に當る。

純粹經驗の問題は二つに分れる。

(イ)果して純粹經驗なる概念が存在し得るか？

(ロ)純粹經驗なるものを形而上學の出發點とする所謂純粹經驗的基礎論は正しいものか？

(イ)は私に大した關係もない樣だから避けて避けられぬ事もあるまい。私は餘り之れを批判して問題を混雜する事を好まぬ。純粹經驗主義者が(ロ)の主張を放棄して私の循環論を採用すれば、純粹經驗と云ふ怪物が存在してゐた所で、私の發表した主張には大した矛盾もなし、哲學の中でそう强く爭い立てる程の問題でもない樣だ。兎に角之の點は第二段の問題として殘して置く。

(ロ)が主要問題であるが純粹經驗家は如何にして同派の主張するが如き方

法によつて哲學を出發し得るか？私としては不可能だと思ふ。

私の循環論は何處からでも出發出來るから、當然循環論證の方法によりさへすれば所謂純粹經驗と號する點からも出發出來る。

純粹經驗の如く己でに一切の思惟一切の判斷を我れから放棄したなら今度出發に際してそれを取入れるのにどうするか？それを利用するのにどうするか？迚も純粹經驗一點張りでは永遠に眞理に轉化する事も出來ないに相違ない。

之處に純粹經驗の大々的困難がある。之れは純粹經驗の自滅的困難である。

哲學の眞理の出發點とするのに特に吾人は純粹經驗と號するが如き所迄行かなくてはならぬ所の强制的理由を知るに苦しむ。之れを卑俗な比喩で云へば丁度東京なり京都なりへ行くのに、出發點を決定するのだと云つて、裏手の井戸の中を掘つて掘り拔いて純粹經驗と云ふ大磐石へ行當つて、もう一歩も之れより向ふへ行けぬ所に出會して、之處が本當の出發點だと號するに似てゐる。所がそこから出發出來れば好いが、彼等は一切を排斥し一切を疑つて用いないと號した結果、何者も用ゆる事が出來ない。即ち己れの手足を縛り五官を潰して井戸の底から出發しやうとするが如きものである。若し本當の眞理論方法論さへあれば、門口から大威張りで出發したつてよさそうなものではないか？それにその純粹經驗なる點へ行き着くのに矢張り何處からか出發してゐるではないか？之の點をごう始末されるか？古草履と違つて只脱ぎ捨てにする事は出來ない。之れ丈けでも非常な大問題である。

純粹經驗は少しの假定も置かないと云ふが、禪的な『無無無無……』の連續ならば『假定なし』と云ふ事も出來る。然し其の時には同時に禪の如く眞理主張も放棄しなくてはならぬ。然し純粹經驗は學藝の原理であつて、禪ではないから、禪の如く眞理を蹂躙して眞理を獲得すると云ふが加き眞に偉大なる態度を所有する事は許されてゐない。それ故純粹經驗が何でもよいからその無爲、無能、渾沌裏から少しでも斷定的に動かうとした刹那に、もう一種の假定がそれに正比例して起り來るをどうして避けられるか？若し假定的のものを嫌ふなら、其處には實在もなく、直接もなく、純粹もなし、斷定もない筈ではないか？之等のものは凡べて棄絶してあるのではないか？若し之處で純粹經驗的方法論で何の眞理的困難なしに一毫の微と云へども動けたら天下の奇觀である。

要するに循環論證に依らずんば純粹經驗なるものは之處で何一つ爲し得ざる所のものである事を斷言する。

純粹經驗は一切の判斷を含まぬと云ふが、それなら純粹經驗たる事を自覺し主張する事も止めな

くてはならぬ。『之れは純粹經驗だ。何等の虛僞もない』と斷定する事は非常な眞理斷定である。即ち第一眞理で、かくの如き大眞理が、かくの如き方法によつて作らるべきものではない。それなら反對に純粹經驗そのものを純粹經驗的に扱ふと云ふのでは、それこそ何等哲學の問題として利用する事が出來ない。そうなるまいと思へば之處の謎は循環論證によつて解くより外はあるまい。が循環論で解くには純粹經驗的出發主義を放棄する事になる。

左れば純粹經驗主義者は之の一大肝要點が全く曖昧である。即ち

純粹經驗なる概念によつて意味せられ目的視された或る意識を出發點とするのか？或は純粹經驗なる概念を與へて斷定した斷定行爲を重しとするか？思ふに前者であらうが、前述の如く之の二つには大なるヂレンマがある。

もう一度之れを見直して見る。後者は斷定行爲であるから之れは大なる第一眞理であつて、之れ自身が純粹經驗家の主張そのものと忽ち杆格する。そうして之處には循環論證でなければ始末の付かぬものがある。

前者なら純粹經驗として拾ひ上げられたものは只『之れが純粹經驗だ』と云ふ斷定をも保留され、拒絕された處のものでなければならぬ。そうして思索者がせめて腹の中で純粹經驗だろうと以心傳心的に思つて我慢すべく餘儀なくされたもので、何等の哲學的問題を惹起する力のないもの、何等の出發力、自動力のないもの、何等の役に立たぬものではないか？之の二つのヂレンマは一體どうなるか？

純粹經驗主義は西洋の一切の基礎論の例に洩れず、矢張り『疑ふにも疑ひ樣のない直接の知識から出發せねばならぬ』と云ふ理想によつて純粹經驗に到達したのであるが、之れが自己矛盾である。始めの理想が間違つてゐる。そんな樂天的理想は人間界に存在しない。

それに純粹經驗主義自身が目的としたものと得られたものとは丸で違つてゐる。同派の理想としては『疑ひ樣のない直接の知識、即ち眞理』から出發しやうとしてゐるのであるが、得られたる純粹經驗なるものは眞理ではない。斷定ではない。それ故眞理的要素を全然拒絕せられたものではないか？それは何等かの困難の生ずるのを恐れてあらゆる意味に於ける斷定を拒絕したのが純粹經驗ではないか？それなら當初の目的とは違ふ。

知らず、當初の目的が誤か？目的は放棄されたのか？得られたものが誤か？

そうではない。得られたものが誤ではないとすれば、如何にして當初の目的を貫徹するか？未だ純粹經驗の出發論から只の一度も出發したる哲學を見た事がない。同派は出發すると號して、實は

之の約束を全く放棄して居るが、之れは純粋經驗主義の出發論の全然不可能なるを自白してゐるのではないか？

本來之の二つのヂレンマは千里の鴻溝を隔つものであるが、純粋經驗一派には之のヂレンマを糊塗する論理的トリックがある。そうして追隨者は皆之の罠に引かゝつてゐるのである。即ち純粋經驗と云ふ概念は何等の判斷を交へないから純一なものだと云つて、暗に一種の極く稀薄なる眞理（何時か知らぬ間に）にしてゐる。即ち最小限度の眞理である。成程純粋經驗が何等かの意味で眞理でさへあれば結構だが粋純經驗は本來眞理でもない。眞理たる事を全然頭から拒絶してゐるのである。それは何等の思想を交へず、分別を加へず、經驗そのまゝの只の流動であると云つてゐる。それなら之れはまだ眞理的要素を全然缺如してゐるものではないか？若し純粋經驗がそのまゝで『疑ひ度くも疑へぬもの』なら、同樣にあらゆる意味に於て『信じ度くも信じられぬ所のもの』でなくてはならぬ。そうして之れは吾人の要求する哲學の問題の圈外を逸しつゝあるを見る。どうしても之處からは哲學的問題を發生する事が出來ないではないか？どうして第一眞理に轉化し得るか？

西洋に於ても『眞理は思辨によつて得られる』と云ふ人もある。之れは基礎と云ふ程のものでもない。

西洋では基礎論となると忽ち思辨を排斥して直覺に嚙り付いた。そうして二千餘年の間之の魂の一番奥の『直覺』と云ふものを嚙つて嚙つて嚙り飽かして全く行詰つた最後のものが純粋經驗論である。之れは直接經驗論或は直接直感論とでも云直す事が出來るだらう。直覺を本當にギリ〳〵に切り込んだもので、三千年の西洋哲學がどうしても一度行き着かねばならなかつたものである。が公理思想から餘りひどく進歩したものでもない。が、公理より更に奥へもぐり込んだものと云はねばならぬ。その點は非常に偉大だ。私も之れを尊敬するが、その代り出發するのに公理より非常に困難になつたと云はねばならぬ。否、同主義によつては不可能になつた。

それ故に公理以上に行詰まり方を深酷に見せてゐる。本當に人間の魂のドン底の障害へ鼻を擦りつけたと云ふ趣きがある。純粋經驗家の失敗の仕方は實に偉大なる失敗で、哲學史上に於て一時期を認めて差支へない程の世界史的失敗である。之點に於て純粋經驗家の功勳も偉也と云へる。が結局失敗は失敗である。之の時に之等の人々は早く之れに見切りをつけなくてはならないのである。そうして之の行當りから卒然として振返つて見なくてはならぬ。

が振返つて見る事は即ち循環論證の批判ではないか？

形而上的思索、形而上學、循環論證

（大正十四年八月四日）

■形而上學と形而上的思索とは一般に混同せられて居るから、其の差別を述べたい。字面丈けで判る樣なものゝ、判つて居ない處もある。

茲では『形而上』と云ふ概念は以心傳心で判つて居るものとして說明しずに置く。

先づ形而上學は形而上的思索であるが、形而上的思索は形而上學ではない。

大抵の人は之れを同義語と思つて居るが、成程過去に於てはさう云ふ考へ方が正しかつた。が今日では形而上的思索は形而上學より夥しく廣い計りでなく、形而上學の企て及ばない權威を持つた思索の範圍が現れて來たので、どうしても之の二つの概念に就いて明白な意識がなくてはならない。

どうして我々がさう云ふ必要に迫らるゝかと云ふに東洋人の實在の思索の仕方が、丸で形而上學的でないので、西洋以上に之の必要を感ずるのである。

多少の例外はあるが兎に角西洋人の實在觀は大抵『形而上學』の一語に盡きて居る。彼等の形而上的思索にして若し形而上學に入らぬならば、其れは可成り人々から輕んぜられて來た思索であり、

まだ形而上學への道程にあるものと見なされて來たものである。

然るに東洋人の實在の考へ方、其の中核の思想は到底形而上學と見なす可く困難である。始めから形而上學を超越して居る。決して形而上學の道程にあるものでもなく、寧ろ形而上學なぞを對手にせず、已でに行く可き所へ行着いて居る。

一體人間は何でも思索の範圍を擴げると、必ず其れを學問化しなければ承知しない性質がある。斯くてあらゆるものを學問化しやうとする。當然我々は形而上的思索の範圍の中に、飽く迄學問化の境地を擴けやうとする。西洋人もさうやつて着々として、形而上學を形而上的思索の中に擴けて二つは只確實化と否との差、醇化と否との差に過ぎないと考へて居る。それ故此の二つの大概念が、同義語に用ひられるのである。

が此の學問化には限度のある事を知らなくてはならぬ。形而上學は形而上的思索の僅かに狹隘なる一部分である。人間が此の天地萬有の中に立つて、自由思索をする時に、其の境地は實に無限である。然し其の思索を科學化し、學術化し、學藝化する日になると非常な拘束と規定が與へられなければならぬ。それ丈けの規定化がなければ『机の上』へ持つて來る事が出來ないのである。そこに學問なるものが形而上的實在に對する妥當力の限定の原因が存在する。

學問とは何ぞや？

『机學問』と云ふ語のある通り、机の上の思索が學問である。此の定義は學問に對して私が尊敬と同時に、輕蔑を以つて與へた通俗定義である。或は云代へれば其の長所と短所とを包括した正語である。皮肉でも何でもない。『机學問』と云へば輕蔑語であるが、『机の上の思索』と云ふ詞はそれが實質的に持つて居る丈けの權威を尊敬し、實質的に持つて居る丈けの缺點を侮つた丈けの定義である。

然らば形而上學とは當然机の上に限定された形而上的思索である。故に形而上學は當然他の形而上的思索が必ずしも持つて居ない所の、特有の權威を持つて居ると共に、當然の短所を持つて居る。其れがどんなものかは云はなくても判つて居る。現代科學が常識に對して持つて居る權威と缺點を其の儘移して考へられる。

所で形而上學の權威については說く必要がない。今日の人々は形而上學の崇拜家であるからである。然し缺點に就いては少しく暗示を提供する必要がある。

過去に於て實在に關して地上で最も勝れた形而上的思索をやつたものは東洋人である。

それは老莊と禪家である、其の中で最も勝れた維摩經なぞの考へ方の深遠で偉大で幽玄で壯嚴な

事、之れに比べると西洋の如何なる大哲學者も丸で子供の様に淺薄で幼稚である。西洋人の實在は、例の机の上の實在であると云ふ觀がある。

讀者は形而上的思索と形而上學の手つ取り早い適例を見やうとせらるゝなら維摩經と獨逸の白痴威かしの傳統的形而上學とを比較して見らるゝがよい。尤も私は維摩經の思想が學問にならぬとは云はない。然し學問になる部分は維摩經の滓で本領と中核は學問にならぬと主張する。そうして此處に形而上學の缺點と短所とを深刻に見る事が出來る。

所で、人間は一切の收獲を能ふ限り學問化しなくてはならない。當然我々日本人も東洋人の形而上的思索を學問化する職務がある。即ち老莊や禪家の仕事を無理にでも机の上に引摺上げて世界的な新形而上學を作らなくてはならない。

がそれは可能か？

どうしてもそれが出來ない。無理にやつてやれぬ事はないが、それは只枝葉的な問題を學問化するに止つて、其の中樞中核の一番至純な所は絶對に出來ない。即ち判る。形而上的思索は學問とは別な重大な要素を持つて居ると。此の要素に名を付け度いが、例の東洋一流の

『……』

である。此の點線要素を頗る不味いが假りに、無理に、形而上的冥觀と名付けて見ると形而上的思索は形而上學と此の『形而上的冥觀』との二大要素を中心として居る事が判る。

成程形而上學も偉大ではあるが、何せよ、對手が

『永遠の實在』

であるから、中々醫學や物理學の様に唯我獨尊になれない。永遠の實在は中々形而上學の手には終へない代物なのである。それ故常に形而上的冥觀から時々輕蔑さる可き本質を持つて居るのである。

然し之れは形而上學の罪ではない。形而上學の本質が永遠の實在を大斷斷する立場に居ないからである。形而上學の天職は自から外にある。形而上學の目的は人間の形而上的思索を與ふ限り系統的證明學術たらしめむとするのがその第一目的だからである。されば形而上的冥觀に依つて形而上學を侮るのは、鐵砲が刀を侮る様なものである。兩者互ひに得意とする所が違ふ。只侮る可きは鐵砲で刀の用を盡し、刀で鐵砲の用を盡すと云ふ人を侮る可きである。即ち今日の形而上學者の如く、概念にコビリ付いて足一歩も天地實在に直接に觸れぬ人を侮る可しである。實在だ、形而上慾だ、と號して、カント、ヘーゲル、オイケン、ベルグソン、アインスタイン等々を出でぬ人々こそ侮る

可しである。其反對に形而上學を無暗に侮る人にも似た樣な人を見出す事が出來る。兎に角實在の獲得と云ふ特殊の目的の爲めには形而上的冥觀が先で形而上學は第二でなくてはならない。それは形而上學はいくら開展しても遂に究竟の形而上的冥觀には達し得ないからである。形而上學は學術の範圍を出る事を許されて居ないからである。

■之れで形而上的思索と形而上學の重大な區別は御判りになつたとして、偖て私の循環論證である。

私の循環論證說は生憎形而上的思索の一部分たる形而上的學問の學術原理である。決して天地萬有に單的に相對して、形而上的『……』行爲をなす時の原理ではなくて、實に嚴重に机の上に限定せられたる學藝の原理である。所で形而上學に限らず机の上の學問は凡べて證明を要求するものである。說明學記載學と雖も皆證明を豫想してゐる。斯くて證明とは學問の別名である、事程證明が學問の基礎である。

所で證明と云ふ事が、永遠の實在に對してどれ丈けの妥當性を持つて居るかと云ふ事は、學問なるものが、永遠の實在に對してどれ丈けの妥當性を持つて居るかと聞くに等しい。

つまり**私の循環論證說の實在的權威は『證明』『學問』なるものが實在に對して妥當なる丈けそれに正比例して妥當なのである。**

學問が實在に對して權威がある丈けに權威があり不妥當な丈けに不妥當である。西洋人の如く學問を以つて第一獨尊として居るものは、證明をもつて天上天下唯我獨尊とするかも知れぬが、我々は永遠の實在を學問と情死させる精神は持つて居ない。それ故私が循環論證なる學術原理を提供したからとて私が之れのみを提げて實在に相對して居ると思はないで頂き度い。

循環論證は僅かに私の證明學の第一原理であると云ふ事を銘記して頂き度い。私が循環論法を提げて意氣揚々として居る樣に御考へになつたらそれは只机の上丈けの事、書齋に於て丈けの事と御考へあり度い。所詮、永遠な實在に對して循環論證の如きは辯證的遊戲である。机上の閑葛藤である。循環論證と形而上的冥觀とは沒交涉である。此の事をこそ强記して頂かぬと飛んでもない間違ひに陷る。

人間は形而上學なぞ無くてもよい。形而上的體驗こそ無くてはならない。循環論證なぞ無くてもよい。形而上的な行爲が無くてはならぬ。

形而上的行爲とは何か？

日が出ると鳥が啼き出す。

之れが形而上的行爲だ。形而上的冥觀の領分である。がそれには矢つ張り山の樣な形而上學的大系も一旦は入用である。

人間の自我は錯覺

『錯覺自我說』第一卷概要

私は十年前學生時代に錯覺自我說を發表した。誠に粗末な亂暴な態度を以つてした爲に學界から默殺同樣の待遇を與へられた。然し錯覺自我說が眞理か否かと云ふ事は論議を通り越して居る。何となれば之れは東洋では印度のベダ以來說き古されてゐる『無我』の主張であるからである。只私のは之の『無我』『自分と言ふものは無いものだ』と言ふ考へを哲學的見地から究明したものである。私の知つてゐる限りでは之の無我を思想的に說いたものには經典では維摩經がある。それとて僅かなものである。即ち之處に引用する。

『其の身幻の如し。顚倒より起る。之の身夢の如し。虛妄の見たり。之の身影の如し。業緣より現ず。之の身響の如し。諸の諸緣に屬ず。之の身浮雲の如し。須臾に變滅す。之の身雷の如し。念々に住せず。之の身主なし。地の如しとなす。之の身我無し。火の如し。之の身壽なし。

風の如し。之の身人無し。水の如し。之の身實ならず。哭を家とす。之の身空たり。我々所を離る。之の身知無し。瓦礫の如し。之の身作無し。風力の轉ずる處也』(方便品)

『四大合ふが故に假りに身と名付く。四大主無し。身も亦我無し』(問疾品)

經典は大抵無我に觸れては居るが皆維摩經以上に透徹はして居ない。之れ以上の內容も無い。維摩と同時代の哲學者チャールバーカは『四大合して自我を生じ四大分離すれば自我も存續せず』と說いていた。之れは前揭以上に適確簡潔である。論部には何かあるかも知れぬが私は知らぬ。其外私の見たものでは只經驗的通俗な暗示的な詩や歌が多少あつた。が矢張り維摩經の上揭の句を出でなかつた。老莊は無我を主張し體驗はしていたが思想的錯覺自我說を握つては居なかつた。つまり無我の焦點が足らなかつたと云へる。賈誼の詩に斯う云うのが有る。

『陰陽萬物は合散消息す。安ぞ常則有らんや。千變萬化未だ始極有らず。忽然人と爲る。何ぞ控摶するに足らんや。異物と爲る。何ぞ患るに足らんや。小知自ら私す云云』(史記二十四傳)

現代ではラクシュミーナラスと言ふ人の佛教の眞諦(立花俊道氏譯)の中に隨分立派な哲學的研究が出て居る。西洋には殆どない樣だ。ヒュームとブラッドレーが可成無我に肉薄してゐる樣だが到達してゐない樣だ。斯ふ云ふ狀態だから無我の思想は殆んど學界の中には存在して居ないと云つてよい。それで西洋及西洋系の學者は倫理的見地以外には無我と云ふ思想を夢想だもしてゐない。*其の爲め私も學生時代に之等東洋の先人の思想を少しも知らなかつたので、隨分私の錯覺自我說に付いて思ひ上つた僭越な事を放言した樣である。

原著は千數百枚ある。差當り第一卷數百枚を發表したいと思ふて其概要を頒布し世評を喚起し度く思ふが、まだ先般概要を發表した『循環論證の新眞理論』第一卷すら發表出來ぬ始末である。

循環論の概要が、世界は循環論證だと言ふことを證する丈けに止まつてそれ以外の發表に及ばなかつたが如く、之の概要は又、人間の自我は錯覺だと言ふことを證明するだけに止まつたのは誠に餘儀ない。然も其の點だけでも頗る簡單故私の趣意を理解せらるゝには誠に困難だと思ふ。特に後半部は難解ではないかと恐れる。よく熟讀せられむことを希望する。

■錯覺自我說とは人間の自我なる意識は萬有者の持てる普遍的意識が個體に現れた個體意識の錯覺だと言ふ說である。

*オドニのピッ詩人の中間にはドイツ人の作土自分で云はれとて云ふ文句相云ふとあるだが云ふこクレムスなもドたる事て云錯覺が何つた自我獨自わんで居なたけ

それで本論中では人間の自我なる意識が錯覺として所生する過程を生命の原頭から說いてゐる。人間が今日持つてゐる自我を作るには單に自我なる意識の錯覺だけでは足らぬ。その前驅錯覺として澤山の錯覺が豫想される。之れ等の澤山の錯覺が相協力して今日の偉大な自我錯覺を生じたのである。それ故錯覺自我を解體するにはどうしても生命の原頭から累積し來つた澤山の他の錯覺を先づ解剖しなくてはならない。即ち人間を形而上原初の實在に還元するには之の大錯覺は勿論、他の澤山の錯覺を割つて行かなくては之の形而下の人間生活から形而上の實在生活へ還元することは出來ない。

實に人間生活なるものは一つの巨大なる迷妄生活である。之の迷妄は錯覺自我丈けではない。其れは只之の迷妄の中心たるに過ぎない。

■生命——殆ど惰性である。

惰性を運動外に齎らすのは如何にも諸君の意想外であらうが惰性は決して物體の空間運動にのみあるとは考へられない。實に運動的惰性は萬有の性質の一切に行涉つてゐる全惰性の一部的現はれに過ぎない。勿論生命の最原本質は惰性とは理論的には別問題でもあらうが、その執意、或は持續と方向とには當時の周圍の事情以外に惰性が重大な條件になつてゐる。そうして之の最原本質に偶因と惰性とが關係して始めて今日の定性をもつた生命が現はれたのである。今日我々が生命と號して取扱つてゐるものゝ中で本當の本質はその小さい何分の一かで、その他は環境が與へる惰性の假現である。それで生命に限らず、一切の物には定性なるものがあるが、

今日の科學の認めてゐる定性なるものは本原の大定性と偶因と強度の惰性とが加はつたものである、

と云ふ意味は惰性が外から來たと云ふ意味ではない。內具の惰性が外から來た事情と合して所謂性質、或は定性を作ると云ふ意味である。

之の本原の性質、或は惰性の本性、又之の二つのものの境界と云う樣なものは尙ほ神秘なるを免れないが、去りとて今日の定性なるものを先天的な動きなきものと考ふるは未だしと言はねばならぬ。自我を錯覺なりとして之れを破壞する思想は一面から見れば、自我なる大定性を惰性に還元する

思想とも見られる。

■生命は惰性に加ふるに加速度をもつて來る。惰性と加速度は生命機制の一大原動力となる。之時に始めて色々の障害となる大な反對運動を突破る力を獲得する。かくて幾度も幾度もかくの如き機制は破れたが、其の中に今日の如き大生命を實現すべき大原動力たる惰性を獲得するに到つた。然し又反對力の爲めに今日以上のものに達する事も出來なかつた。

■勿論遺傳は惰性によつてのみでは說明出來ぬ。然し遺傳は生物の獲得した惰性の一變形である。惰性の力が加はつてこそ生命の種が次の世代へ移轉し得る。

學者は日葵草が日に轉じ、火取虫が火に阿焦れる事の類のみをトロピズム、或は動向と名づけるが、之の人生の事、一つとしてトロピズムならざるはない。それは前段の主張からさうなる。實に全世界はトロピズムの流れである。只複雜なトロピズム丈けがその原初の露骨さを失つて來るのである。人間の思辨も亦一つのトロピズムの最も復合的なものである。自ら意識的だとか打算的だとか言ふ事はそれをトロピズムたらしめないだけの力がない。

■處で意志は之の惰性的動向機制の一つである。原本的な力に環境の影響と惰性的把持が加はり、加速度が加はつて現はれたトロピズムに過ぎない。正しい表現ではないが、

力＋慣性＝意志

と言ふ樣な等式は尤もよく意志の本質に對する直觀を與へる。

■原始的には意志は絕對に意慾でも希望でもなかつた。原初には必然的な力の偶然的發展であつた。其れが惰性に依つて遂に機制を生じ執意を生じた。がまだ『目的』と言ふものを持つて居なかつた。『目的』は之の盲目的執意を後から肯定して、事後設定をやつたものである。太陽は廻はる。花は咲く。然し其れを目的としてゐるのではない。若し太陽や花がそう云う運動を目的としてゐるとするならば、それは飽く迄吾人の解釋である。擬人法である。そうして人間生活の中の『目的』も亦之の擬人法を出でない。故に目的は意志に對しては附加物である。之れ即ち目的の錯覺である。之れを洞觀しないから在來の目的に關する論議は皆失敗した。自我も、人格も凡て之の錯覺を因由として所產する。

人間の生活は本來は無目的生命であつた。非合目的々生命であつた。何等の方針方向なるものゝない生命であつた。

■意志に二つある。
一、生命意志、
二、實行意志、
である。前者は生活力であり、生物意志であり、植物すらも之れをもつてゐる。後者は實行力である。私が意志と言つてゐるのは大抵は後者を指して居る。

■其れ故意志は決して已れが本來目的として欲しないものを目的としない。彼れが目的を立てる時には必ずや已でに彼れは大刧初からそれを目的とせねばならぬ樣に運命付けられてゐる。彼れの目的とは只だ彼に與へられた運命の追認的飜譯であり、自己欺瞞である。

■經驗的には意志は常に價値に依つて導かれる。故に價値は意志より原始的のものに見えるがそうでない。意志あつて始めて價値なるものは設定せられたのである。それは目的の本質から來てゐる、

■價値は機制に付帶した副感情である。副現象である。複雜な主觀が已れの中にある惰性必然の機制を感ずると、それを遂ぐる事に於て或る快感を感ずる。之の快感から誘はれて或る價値感を主觀は感ずる。そうして何か或る特殊な偉大な價値が實在するかの樣な錯覺を起す。故に價値は意志同樣に之の盲目必然の傀儡である。それ故價値は個人の實感に訴へただけでは何等の形而上的眞實を得らるゝものではない。

人生に於ける一切の價値の眞相は之れである。誠に一つの錯覺である。形而上的な原本的無價値の盲動に惰性が加はつて出來た動向に主觀的錯覺の加はつた空想が價値である。
人生が形而上的に巨大なる無意味だと云う事は之處から確證する。

徹底的な形而上的虛無思想は此處を通らねばならぬ。

■經驗的價値生活を追求した極、生命を失ふのは之の錯覺の餌に引き懸つて運命者に釣られる如きである。

■人格は常に潜在意識の尻馬に騎つて事後承諾を與へつゝ表面の意識の上に其れを提出し、それに人格的責任を與へて『吾れ欲す』と言ふが、實は吾れ欲するより先に萬有的なる非自我的なる潜在意識が欲するのである。人格なるものが人間の潜在意識や個性を離れて獨立的に肯定したり意慾したりすることは殆どない。それならその個性や潜性が責任者か？否、その前に大きな遺傳と惰性が働いてゐる。宇宙が働いている。

故に吾人は社會上の必要から措定的な第二義的な責任は肯定出來るが、一つの形而上的な第一義的な責任と言ふものを捕へることは出來ない。

■意志なる錯覺が錯覺自我を生む第一の素地である。意志なるものゝ思索的自覺は自我の自覺より後期だが、存在は錯覺自我より先である。更に之れに『自由』なる錯覺が加はつてそうして始めて錯覺自我なるものを出來するのである。

■私は必然主義者である。宇宙の一切の事は必らず必然的な前件を待つて可能である。それ故如何なる自由と云へども之の必然の埒内を出でない。故に私は必然的な自由のみを肯定する。が人類はかうゆふ風に自由を考へずに自由とは必然と對立出來る樣な眞に非必然的なものだと妄想した。

■先づ彼等は人間が選擇の形而上的自由を持つてゐると錯覺した。之れは經驗の範圍に限るなら眞理であるが、形而上的には迷妄である。彼等は人間が一つの刹那にAとBとを完全に行ふの自由をもつと主張するが、人間の自由なのは實現するものゝ形式の選擇が自由なるに過ぎぬ。それを具體化するときは自分の任意の刹那に實現することは出來ない。必ず實在が許容する偶然的な刹那の中で實現すべく餘儀なくされる。そうして實現した具體的なものそのものは結局運命が與へて呉れるもので、彼れの欲したものとは只概念的に同一なるに過ぎない。又凡ての刹那に意外の處から故障が來て其の自由と號するものを破碎するのである。手の中に握つてゐる蠅ですらもそれを殺して見ぬ内は、人はその蠅の生命を奪ふの自由を完全に持つてゐるとは言へぬ。

處で『選擇の形式を決定する自由』と言ふが其の選擇たるや實在が豫めその二つの大可能を提供したからこそ吾人は其の間に選擇の自由を設定したので、北極へ行つて嵐山の花見をしやうか、栂尾の紅葉狩にしやうかなぞと言ふ選擇力を吾人が持つて居ないのでも判る。

■二つの選擇可能性に於て何方が本當の必然であるかを吾人は豫知することが出來ず兩方が相等しき可能性をもつと誤解する處から之の『自由』の錯覺が生ずる。誠に客觀に脅かされざる眞正の獨立的自由なるものは實在しない。在來西洋及西洋系統の自由主義者の『絶對自由』の觀念は誤謬である。

■要するに自由なるものは實在の無制限に近き多樣の可能性から原因した錯覺である。左れば自由を必然的自由として肯定すれば彼れは威張つて『必然』の愛子として存在し得る。

又若し自由なるものは彼れの言ふ如く非必然的のものとするなら之の宇宙の必然系統は破壞される。そうして宇宙は一個の出鱈目となり却つて自由は萬有の氣紛れの犧牲に成つて彼れの自由を行ふことが出來なくなる。

自由其のものゝ自己信賴は萬有が必然的であるからこそ可能なのである。

故に在來の自由の觀念は觀念そのものゝ中に自己矛盾を起すものが隱れて居る。自由を可能ならしむるには是非必然的自由を肯定しなくてはならない。

自由の敵は『必然』ではなくて非必然、即ち形而上的自由であることが判る。

■目的論と『未來を考へる事』とに關する在來の意見には大なる關係がある。人は本來決して未來を思考する力をもつてゐない。それは『まだ存在しないものがどうして考へられるか』と言ふ高飛車な道理で片が付く。それならどうして吾人は未來を考へるかと言ふに未來なるものを現在で以つて比喩して考へるのである。それが未來と何の關係もないものだと言ふことは皮肉にも未來になつて見て當初考へていた所謂未來の一微粒分子だも實現しない時のあるのでわかる。或は豫見した通りのものが實現する事もあるが、それは旨く想像し當てる力を吾人がもつてるからで其れは經驗である。

■目的と言ふことにも之の論理が當てはまる。吾人が矢を番へて三十間先きの的を見て居るとする。之れは果して三十間先きの的それ自身を見てゐるのか？經驗的には然り。形而上的には然らず。實は吾人の神經中樞の現在を二十間先きの未來へ投射して想像して見て居るのである。的の場合には慥かに原因が三十間先きに實在してゐるから何の矛盾もないが實在しない場合もある。本來目で

『見る』と言ふことは實は當る可能性の强度な想像に過ぎない。故に稀れには當らぬこともある。幻影がさうだ。之の時に始めて『見る』と言ふ事の眞相が判る。吾人の理論の正しいのが判る。そこで目的へ矢を送るとする。經驗的には未來を確實に囚へて矢を送る樣だが決してさうではない。闇中の礫の如く未來と言ふ存在しないものゝ中へ射込むのである。未來は矢の進むと全々同一の速度で出生するのである。それならどうして當るか？それは實在には一樣性がある。光線には直線性がある。故に的が未來の過程に於て必らず矢を待つだらうと想像する一方向に矢を送るのである。之れは吾人の粗末な經驗には反するが少なくも理論に於てはさうである。それ故どんな名人の矢も形而上的には犬の聲を目あてに投げる闇礫と何の差もない。矢の當る刹那に實在する目的は決して矢の發する瞬間には實在しない。將來必らず或は多分實在するであらう筈の目的それ自身が彼れの矢を規定するのではない。その目的とは何等かの關係はあるがそれより十秒なり二十秒なり先きの前身なる目的と、更にそれと關係ある射手の心中の幻影とが規定するのである。當る時の目的は最初の規定目的の後身たるに過ぎぬ。只經驗的には全く同一として扱はれるからかゝる『目的』なる錯覺を將來したのである。

■若し人間が形而上的妥當性のある本當の目的を所有する力があるなら、彼れは完全に客觀を支配する力がなければならぬ。然らずんば眞に獨自の自由を以て客觀を目的化することが出來ない。然し之れは人間には迚も不可能である。今日人間が自由なのは只之の盲目的な必然に矛盾しない限りに於て自由なるに過ぎない。之れが所謂『意志の自由』なる幻想を與へるのである。人間が經驗的に自由感の起る時は人間が大生命の奴隷と成つてゐる時である。

■かくて目的觀的思想は觀念の上より見るも自己矛盾の思想である。只必然的目的觀のみが合理的なものとして存在し得る。有機體の所持せる目的は凡べて必然主義に矛盾するものではない。

■人間の自我の觀念を破るには意志と自由とに次いで更に個物個體なる考への錯覺を破らなくてはならぬ。

全宇宙は一切が微分流動の循環である。一切が一にして又多である。如何なる個物と言へども絶對の一であるものはない。それ故個物と言ふて何か獨自獨立的なものと考へるのは大なる誤である。個物は皆周圍と切り離し難き關係にある。又個物其のものが多數の個物的團體より成立してゐる。

然らば個物と言ふ觀念は極く經驗的な日常的な概念であつて形而上的妥當性はない。然るに自我の觀念は個物なるものを豫想してゐる。實に『人間は一個の個體在だ』と言ふ觀念がどれ程自我の觀念の發生を助長したか知れない。之の個物と言ふ觀念の處で人間の思想が斷然阻止されたなら今日の如き自我は發生しなかつたに相違ない。

■其れが實際個物であらうがなからうが個物として已れを誤解し得る限りはどんな團體からでも自我は生れ得る。一人の人間は非個物的な、或る多元的な存在（例へば細胞や元子）の團體である。之れ等の團體が或る共通の意識を成立させたものが主觀である。即ち一人の主觀は個體人間より以下の單位なる個體細胞の團體より組織された意識である。即ち超個物的意識である。丁度國家全體の精神が個人の團體より組織された超個人的意識であるが如きで、之れを等しく團體意識と言ふて差閊へない。

分子的個體がその全體を意識することを團體意識と考へるのが今日の社會學の通用法であるが私は之れを集團意識と呼ぶことにして居る。一寸注意すれば何の混雜もない。十年前『オイケン哲學の批難』に於て不用意に『團體意識』と言ふ語を用ひた爲め、社會學の用語に馴れた人々は私の用語に一寸戸惑ひせられた人もあつたらう。誤解のない樣に願ふ。

兎に角之の團體的意識が已れを團體だと知つて居れば自我なる錯覺を起さぬが已れを單一な個體だと信じ、且つそう信ずる中樞意識が只一つありさへすればどんな團體からでも錯覺自我は生れ得る。國家であらうが蟻の王國であらうが珊瑚礁であらうが何處でも構はぬ。何うせ自我は錯覺なのだから、其處に本當の自我などはなくてもよい。只自我だと思ひ違ひをする樣に出來てさへすればよいのだ。處が國家や蟻やは已でに其組成分子が自我的錯覺を皆持つてゐるので、到底其の上へ更に自我なる錯覺を築くことが出來ない。國家には內閣、集合動物の王國には幹部がある。そうして之等は皆已れ等を比喩的には已れだと言ふ位の程度には達したが、其上に本當に已れを自我だと確信し錯覺することは出來ない。それにはその團體全體の個物化が餘りに稀薄であり、また本當の中心意識がないからである。これさへあれば何處からでも之の團體の留守番として御屋意識として自我なる迷妄が戸惑ひ來ることが出來る。

■自我なる錯覺を發生するには何か之の人間なる個體機制をしてそう發展する樣に刺戟するものがなくてはならぬ。即ち自我を結論とする樣な特殊興味がなくてはならぬ。即ち

生存の闘爭、或は生存慾

である。之れが錯覺自我を發生する第一原因となる。そこで之の目的に適應する樣に個體が發展しなくてはならぬ。即ち個體機制は全く生存慾の象徴となる。然し生存慾の微弱なものは自我の錯覺を起す丈けに生命が緊張もせず、又自我を生ずるに適當な樣に意識の根據が發展しない。植物の如く地養と太陽の光のみに滿足するものには自我なる錯覺を起して己れの生存を保護する必要がないのだ同樣に之れは人間の中でも見られる。即ち山間の逸人は都會の爭闘人より自我感情が稀薄である。例へ個體が環境から如何に强度に遊離されても個體諸機關の團體的結合の上の意識が精密强度になり、自他の對立が明白になつてきてもまだ必らずしも『自我』が生れて來るとは限らぬ。これだけでは『自我』が生れる必要はないのである。

■人間の自我は個物の自己保存の方便として發明せられた一便利現象とも見られる。但し之れは單なる見方に過ぎない。方便と言ふ樣な擬人的な解釋は如何にも目的觀的な傳習的見方である。

■個物の形式はその內部衝動の種類に依つて決定する。最も大なる衝動がその主型式となる。

人間に於ても亦さうである。生存慾より生殖慾が旺盛な場合には人間はもう少し別な型式を持つたに相違ない。今日より尙ほ更に異性表徴の盛觀をもつた人間を生じたに相違ない。

■が個物個體なるものは決して本當の個體でないから本當の統一はない。一つの個體は無數の執意無數の惰性の中心に過ぎない。只その中の一つのものが偶然の事情で最も强い型式を獲得したので、他のものは亡びたのでなく、皆其の下に雌伏したのに過ぎぬ。それ故一朝事情が變ずれば忽ち雌伏したものは雄飛し崛起して第一のものを覆す。そうしてそれが調整する餘地がなければその時に(概して)個物は破壞される。個人は滅亡する。或は精神の破產となる。若し人間が眞に永遠不滅な絕對統一的な强健なる自我を持つて居るならこんなことは無い筈である。が自我は只個人の存在の一追加物に過ぎない。個人が一時的事情に依つて自我的傾向を帶びたのである。結局人間の自我は眞自我でなく、單に自我的近似の傾向が生じたのみで、只だ其事情に誘はれ拐わかされて錯覺自我なる迷想意識がその個人の上へ附加されたのである。それ故自我が個人の上にもつてゐる根據は極めて微弱薄弱なものであるから個物の底に雌伏してゐる種々の先天惰性たる實在が好機會さへあれば之の『個物を錯覺に依つて纂奪した自我』を顚覆し蹂躪しやうとするのに何の不思議もない。彼等

にとつては之れが彼等の權利であり眞理である。只僕等が世俗的見地からさう言ふ個人を見て『不健全な纖弱な個人だ』と言ひ得る位が關の山である。

■故に個物、生物個體、之等のものは本來一個とか二個とか一人とか二人とか言ふ數で數へらるゝ存在ではない。數を超越した存在である。一體之の萬有は一切が微分流動であるから海に立つて水を數へ、空に立つて風を數へることの出來ぬが如く、形而上的には星を數へ魚を數へることが出來ない。只經驗的に方便的に或る措定と假定の上に立つて數へる丈けである。形而上的には一人の個人は一人でも二人でもなく今や水の如く遍融無碍の流動在である。只その流動が長い間の惰性によつて一點を中心として緊縮せられたに過ぎぬ。死に依らずんば之等何千萬年の惰性を打碎して本然の微分流動に放化し散却することが出來ぬ。が一度心眼を開いて默想するならば之の縱鼻横目の活人そのまゝの彼れを微分流動の中に放つて考へることが出來る。要するに一の個人は只彼れを中心として全宇宙の流動循環が浪打ち來るその一切の力の尖端に於ける全宇宙の一表現一假現に過ぎない。それ故

個人はそのまゝで全宇宙である。

印度思想の如く我れから努力して萬有と一體にならずとも彼れ自身が當即座下そのまゝで全宇宙である。只自分を五尺立方の空間の中に區切つて考へる迷想的遣方を止めさへすれば彼れ自身が萬有其れ自身の中心中樞、エッセンス、權化であると言ふことが判る。『個人は小さい』と言ふが如きは極めて形而下的經驗的意見なのが判る。が之處迄考へて來るには先づ自我の錯覺を破らなくてはならぬ。

『自我か或は全宇宙か？』

吾人は之の對立の中に立つ。之れが人間のもつてゐる最大の選擇で自我に固執すれば萬有を得ず萬有に生きんとすれば自我に生きられない。

■更に錯覺自我を生ずるには中心意識、中樞感なるものがなくてはならぬ。之れがあれば忽ち錯覺自我なる迷妄を生じて之の自我を懷中に入れた自動的泥人形がムクムク躍り出して釋迦になつたり、キリストになつたり、ナポレオン、クレオパトラになつたりする。若し之れがなくんば如何に自意識があつても、自他の區別があつても、肝腎の中樞意識が混亂して結局自我を生ずることが出來ず稀薄な自我樣の團體的複數的意識が生ずるに過ぎぬ。

處で動物には單一個の腦髓を與へられた。之れが中樞感を作るに非常に好都合であつた。自我の單一感は器關の單一に依らなくては不便である。

然し之の中心感情は只粗雜な人間の直感をして只そう感ぜしむる丈けのもので、形而上的にそう言ふ絶對中心を求め得らるべきものではない。個物のない處に絶對中心のある筈がない。又その反對に絶對中心のない處に個物のある筈がない。人間の中に存する中心は（幾何學的な中心でない限りは）それは全體との相互維持に依つて存する處の大肝要所に過ぎない。他の何處よりも全體に最も遺漏なく關係する個所に過ぎない。それ故中心を可能ならしむるものは全體の力である。然し之の中心感が自由意志の上に重なる時にそれとは丸で違つた權威と自惚れをもつてくる。今迄は中樞意識は只人間の意識の中樞市場であり只認識と意識とが集散離合する丈けの處であつたのが、今やそうではなくて、輳合し來つた一切のものは此の命令的な支配的な人格中樞の無限大な自由の底無しの淵に藏せられ、又必要に從つて勝手氣儘に外間に取り出され得るものと考へられた。即ち之の中心所で宇宙の一切の必然系統はその系統を失つてしまうと言ふのが自由主義者の意見である。自我の實在を信ずるものも同樣の意見である。

■自他の區別も自我を導く有力な原因である。そうして之の區別も形而上的妥當性は誠に少ない。本來『此方對先方』と言ふ觀念が自他の區別の先驅となる。之の觀念の要素となる事柄は

(伊)兩見地の對立、

(呂)少なくもその觀察者が一見地の方向にあること

である。即ちその觀察者が一方の見地そのものになつて居る場合である。之の時は之方と言ふ觀念は『自分達の方』と言ふ觀念にすぐに變ずる。此方、先方と言ふ觀念は方向の觀念として固定的に考へぬ以上は不當な觀察ではない。又自我や自他の觀念を必らず豫想してゐるものでもない。只自我が現はれて方向と結び付いた時に自他の區別を生ずるのである。

■そこで愈々自我の觀念分析に依つて人間の自我の存在の不可能を說かなくてはならぬ。之の觀念を研究して其の形而上的妥當性のない事を究めればそれで錯覺自我說の目的は達する。少し困難であるから御熟讀を願ふ。そうすれば

『之處に之れを書いてゐる古谷榮一、之れを讀んでゐる某々君は

實は古谷榮一でも某々君でも何でもない、丸で別な萬有的な非自我的な實在、只風の如く、水の如き範圍のない實體の惰性的集團に過ぎない』

と云ふ事が明白に御判りになる。

■先づ自我と云ふ觀念の文法的見地より見た特徴を形而上的に研究して見やう。そこでその文法的特徴は

(い)單數なる事と、

(ろ)一人稱なる事と

である。之處では複數自我なる『我々』は今問題にされて居ない。何となれば『我々』と云ふ觀念は自我と云ふ實在を意味した觀念とは大分違ふ。前者は實生活の社會語で後者は自分を實在として考へた語である。

若し一人稱が純粹に文法的の一人稱であるならば決して惡い事ではない。細胞の集團が他の一集團と區別する爲め、或は其の先方の一集團に相對して『此方の一集團』と云ふ意味で一人稱を號するのは一と先づ差閊へがない。然し一般に行はれて居る樣な倫理的な一人稱たる事は不可である。自我の眞の意味はその文法的特徴にあるのでなく、之の語に依つて意味せられた觀念にあるのである。其の觀念の不當な事は錯覺自我の論推的批評に讓ろう。

■即ち(い)に付いて論ずる。

私は只議論の簡單の爲めに『細胞の集團』の語は常に用いて居るが、それは自我の單一性を激しく反證する爲めに用いる迄で、本來、個體なるものは一でも複でもなく數を超越せる『非一非多在』である。個體を一個體の見地より見れば勿論單一でもあらうが、自我が自から自我として單一也と云ふのはそう云つた小さい一時的な見方から云ふ果敢なき主張ではなく形而上的な絶對主張である。故に私が非一體を主張するのも同樣の形而上的見地よりするに非ずんば其の自我主張の反證とするには足らぬ。私が自我と號する個物を形而上的見地より見る時に先づ其れが非一體なる事は無雜作に看取される。少なくも眞先きに『個物自我』は細胞の集團の上にのみ可能なのが分る。細胞集團

が自我と號する位なら其れに劣らざる權利を持つて細胞の一個々々が大自我と號する權利のある事を看取する。

然らば個物自我が自からを自我也と單數を以つて號するのは失當だと云はねばならない。誠に彼れは自我と號すべく餘りに團體的な性質者である。自から自我と號し乍ら吾人は何處にも彼れの絶對單一な眞乎の正體を掴む事が出來ない。何處に行つても責任のある『渠れ』を見出す事が出來ない。眞に自我の中核を捜す事が出來ない。自から自我也と號しつゝあるものは無數の集團者であり、然も其れは實際に於ては走馬燈の如く變化しつゝある處のものである。彼等は自我と號して人生の責任を負ひつゝ、實は仲間を組んでまやかし物を賣り付けて直ぐ次ぎの瞬間には皆勝手に分れて了ふ商人である。然も商品には惡かつたらいつでも御取換へすると書いてある。彼等は之の商人より性が惡い。之の商人は無責任だが捕へて成敗が出來る。然し之の自我の眞正な形而上的責任者は永遠に捕へられない。其の單一なる筈の細胞自身が又常に變轉極り無き流動者である。一所不住者である。然し流動者としても觀念的に瞬間的には其の位置をもつて居るかと云ふに彼れには其れもない。一空間點に於ける細胞には形而上的見地より見て範圍がない。時の流れより早く物の流轉を突止める魔法槍があつて其の流動を捕へても、どこからどこ迄が細胞者であるか其の範圍が判らない。それ故人間社會に於ては之の刹那自我の次ぎの瞬間、或は次期の後繼者をもつて責任者と無理に號して居る。

之の範圍の不明なのは一つの細胞が形而上的には全宇宙と渾然相通融和して居るからである。即ち形而上的に數へらるゝ樣な『多』の形式に於て細胞が集まつて居ないからである。細胞の集團は形而上的には數の性質を超越してゐる。それ故私は上に『非一非多』在なる可笑しな觀念を用ゐたが、之の新觀念を用ゐるより外に道はないのである。私も何か適當な觀念を用いたいがどうも見當らないので一と多の觀念を借りて其の兩否定に依つて無理に現はす事にした。十二支に狐の日がないので御稲荷樣が午の日を借りて御祭りをするよりは妥當だらうか？誰れか適當な語を教へて貰いたい。

西洋哲學者は在來宇宙は一か？多か？と云ふ事に付いて色々の論議をしたがどれも立派なものは見かけなかつた。其れは『非一非多』の觀念を設定しないからである。

眞の實在の微分流動は一と多とを超越して居る。私が團體意識なぞと云つても實は本來『多』を超越して云つてゐるのであるから錯覺自我說に大必要な之の新觀念も形而上的妥當性のある觀念ではない。之の點は御留意を願ふ。

■そこで(ろ)に移る。『オイケン哲學の批難』にも說けるが如くデカルトは『我れ考ふ』と云ふ代りに一と先づ『一人稱考ふ』と云ふ可きであつた。即ち先方に對して此方を設定して先方を二人稱、或は三人稱とし、此方を一人稱とするならば其れは一先づ差閊へない。

が之の一人稱なるものを文法の便宜を離れて哲學的に考へると之れは數の問題を超越して居ると考ふ可きである。本來一人稱の精神には複數單數の區別を要しない筈である。只先方に對する此方であるからである。そう云ふ意味に於て私は一人稱の根據となるものに特に

指自稱

と云ふ觀念を設定する。之の二つは丸で違ふからその積で御注意を願ふ。そこで當然二人稱の根據となるものを

指對稱、

三人稱を

指他稱

と云ふ。之れ等を總括して

指稱

と云ふ。慣用法の人稱は斯かる哲學的自覺なく、只自我の妄想から割出したので、澤山の誤が有るから特に之の重要な新觀念を設定する。文法家から見ても一人稱の眞骨頭に觸れるには之れ等の措定が非常に必要である。又學者が人稱を哲學的に考慮するには是非私の樣な特別な見方が入用である。一人稱二人稱なぞと云ふ觀念に囚はれて居ると何も判らぬに相違ない。然し指對稱指他稱は指自稱が一人稱から相違する程には二人稱三人稱から違はない。以下追々に判る。

之の指自稱の意味が重大である。指自稱と云つたからとて一人稱の樣に自分が自分を指示すると考へるわけではない。非常に違ふ。(之れは後段に說いてある)指示するものは別にある。

即ち指示意識が指示するのであるから本來は指自稱と云へども或る他のものが他のものを指示するわけである。指示するものと指示せらるゝものとを同一に擬人化する時はその行爲を指自稱と云へども形而上的には之れも指他稱である。實に一切の指稱が其の指示意識の本質上指他稱になるのである。

詞の嚴肅を缺くが、手早く云へば吾人の文法上の人稱は形而上的には皆殘らず三人稱である。一切が客稱である。目的稱である。一人稱も之の大則を免れない。之れは後段形而上的一人稱たる自如稱を參照なさればよく御判りになる。

之の點は更に嚴重に意識して貰ひたい。即ち

指自稱なるものは指示意識が或るものを客觀的に指稱する事實に反射的方向的意識が加はつて生じたものである。それ故、上述の意味で考へるなら指自稱と云ふ名は寸毫も一人稱の如く不都合な意味は持つてゐない。只一人稱或は自我稱を誘はんとする丈けの事である。然し指自稱があるから一人稱や自我稱が出來たのでなく、之の形而上的な指示意識が（自我稱や一人稱を物象の指稱と云ふ哲學的事實と交渉せしめむが爲めに）形而下的客稱を變じて指自稱を設定したのである。

故に私とか自分とか云ふ人格稱自我稱よりは自分を眞に客觀的に扱つて『某氏』なら某と自から號する事は非常に面白い事である。何もこんな小さい事に迄形而上的に徹底しなくてもよい。喜んで傳習に從ふもよいが、さりとて決して無意味な事として排斥す可き事ではない。

が排斥す可き場合がある。自分が自我として、倫理的存在として全責任を持つて語る時は斯くの如き客稱は不可である。絶對の自我として語るには飽く迄一人稱を用ゐねばならない。其處には色々な形而上的不都合はある。然し其れは『錯覺自我』より來る必然の不都合であつて已でに錯覺自我を肯定する以上は之の色々の自我稱の不都合を肯定しなくてはならない。若しそれを肯定し毒呑せぬ以上は『錯覺自我』を否定し己れの人格的存在を否定しなくてはならない。自我を肯定する事は大なる虛僞を肯定してその上に生きる事である。自我稱の澤山の虛僞を肯定せずんば吾人の人生は可能でない。但し之の點は尙後段に讓る。

吾人の心の中に人稱の生じ來つた心理的發生の見地より見れば或は自我の發生と前後して人稱は發生したかも知れぬ。然し論理的には本來個人や自我と自他の區別とは飽く迄別なものであるから、必然に人稱を自我から區別しなくてはならない。そこで人稱をば『純粹に此方と先方と云ふ區別を云現はしたもの』から由來せしめねばならない。それ故それは只の方向であるが故に、一人稱とか二人稱とか云ふ傳習的な名前では云現はされないのである。即ち上述の如き四つの指稱の新措定が入用なのである。

そこで私の意味する指自稱は單なる方向に存する尤も稀薄な抽象的實在を云現はすもの故、現はさるものは文法的主格たり得ても形而上的には無主格的存在である。人稱的存在ではない。實に

非一在であり、又非多在である。

斯く云來ると『我れ考ふ』と云ふ自我在の肯定は不當だが『一人稱考ふ』も不當で、實は之處迄來た以上は『指自稱考ふ』とでも云はねばならなかつたのである。處女作の中では之れを飛越して『一人稱考ふ』と云ふ形式を扱つてゐるが彼の過程の間へ之の指自稱的問題が挿入さる可きであつたのである。文法の場合は一人稱二人稱で澤山であるがデカルトの提唱の如き問題が起る場合には文法的一人稱では忽ち大問題が惹起される。斯かる場合にはどうしても人稱より先きに之の指自稱を措定して考へなくてはならない。指自稱は單なる意思の表白者が自我の實在の表示丈けの役目を爲すに過ぎぬが、既に空想でない以上は、實質のある以上は其れは具體在に關してでなくてはならない。具體在なら直ちに其れの形而上的性質がなくてはならぬ。其の性質を規定しなければ決して『我考ふ』へ下れない。そこで第一次のものを最少限度に考へて非一非多在の指自稱とする。所が非一非多は即ち宇宙である。非一非多在は數を超越して居るから一點に依つて識認されても全宇宙を包含し全世界に關係するの結果となる。中々思ふ樣にはならない。

尙又一方から考へて見る。之の場合如何にして『我考ふ』が付き來るかと云ふに其れは我々がユークリッドの用意を無視して『指自稱考ふ』と云つたからで、即ち指自稱は指對稱に對する位置を示すのを主とするが指稱の惡緣から指稱位置をして『考ふ』と云はしめるから、位置をして『考ふ』云と云ふ以上は之の場合『位置ある者』としてどうしても之の位置に物性を與へなくてはならぬ。

非一非多は本來彼此無差別である。其の中に指自、指對、指他の三稱を置くは只其の渾然たる中に其の相互の位置を連關して對立さるゝもので、之の矛盾は本來位置ありて大きさなき假定的指稱に具體的性質を與ゆ可からざるに假りに與へて『我考ふ』を無理に引出さんとした爲めに起つた矛盾である。丁度東と西との關係である。若し東の一點に假りに具體的な土地を與へる以上其の土地は『無限の大きさ』を以つて西と合致せずんば止まない。之れユークリッドが『點は位置有りて大きさ無し』と云つた用意の有る所以である。

左れば指自稱の特性は余儀なく、

(A)他稱に對する位置の表白、

(B)實存者の表白、

(C)其の反射的表白、

之の三つの物を結付けた上に存在する事になる。之の(B)が人間の色々の誤解の爲めに變化する事に依つて『我れ考ふ』が出て來るのである。

實に人稱の眞の型は之の指自稱である。之の指自稱の背後には尙未だ倫理的人格がない。之の點は眞の文法的人稱思想が本來自覺す可くして、未だ爲し得ざりしものである。

■指自稱には數を加へる余地がない。何となればそれが指自稱なるの理由によりてゞある。例へば之處にABCの指自稱があるとする。即ち『指自稱A考ふ』『B考ふ』『C考ふ』の三句になるが三つを合したのでは指自稱の複數にはならぬ。之の三つの中の一つが他の二つを代表して之の三つの事實を云ふ時始めて複數となる。即ち人間の社交に於て『我等』と號するものに對應する。が『我等』の場合が果して複數か否かは論議のある處であるが、假りに斯くの如きものを一人稱の複數と制定すると强制した處で其の制定は無論議で指自稱に强制されぬ事情がある。

指自稱は本來方向を示すのが目的である。然し方向は絶對に單一ならずんば思想と言語の大混亂を起すのである。AがBCを代表する時は指稱を口から發するものはAであるが指自稱の方向は最初三個の孤立せる指自稱を合した單一な方向である。即ち指示する方向は依然として單一なのである。決して複數ではない。只之れが不用意に觀察するものの俗眼を瞞着して複數に見えるのはABCと云ふ形態が人を欺すのである。ABCがAの口を借りて一指自稱となつた時は彼等は各自獨立の指自稱として存在して居ないのである。即ち外部に對して複數としての事實を亡つたのである。只代言された外的關係を離して內部から云へば依然としてABCなる三個複數の指自稱の集團なのである。之れがAによつて代言されるや已でに問題は轉換し、新に單一な指自稱が設定された事になるのである。之の問題の轉換に心付かねばならぬ。

此方面からも說かれる。已でに單一各個の指自稱が數を超越した非一非多在だと云つた。それならABCが合してAが代言した場合の指自稱も同樣に數を超越しなくてはならぬ道理である。(決して文法上の傳習を顧慮する必要はない。只尤も合理的な經過の命ずるが儘に突進するに限る。彼れ等傳統の遺り散らした處のものは、皆單純な習慣に依つて好い加減に作り上げたものであるから之れ等に繫縛されてはならぬ) 若し三指自稱ABCに付いては代言されたものを其の發生の由來より見て複數と云ふ位ならAも又如何なる發生の由來をもつて複數となるか判らぬ。『考ふ』と云ふ客語の場合には其れが出來ぬが他に其れが可能なる色々な客語がある。

之處に注意が要る。即ちABCの客語を一括してAが代言する場合に、

一、代言せられた語の持てる指自稱と、二、代言した機關と
を混同してはならない。在來は之れを混同して居る。吾人は其の發せられた觀念其のものに付いて
確實に見地を定めてから思索しなくてはならぬ。代言しない場合には之の混同は一先づ起らぬと見
られる。然しAがBCを代言した場合には之の混同が起る。指自稱に於ては話者が一人だから單數な
のでは決してなく、方向が單一だから單數なのである。在來、『我れ』と云ふ一人稱は私が一人だか
ら單數、我々は多人數だから複數と云はれて居たが之れは例の文法的習慣である。嚴重な思索から
見れば之れは無用事である。只實際上の便利に過ぎない。故にABCの場合にABCを代言したと云
ふ事は我々に取つては決して肝要な事件ではない。吾人はそれに考慮を拂ふ必要はない。只Aが何
を觀念し何を表白したかゞ問題であり、其れに依つてのみ指自稱の意味が決定するのである。
それで指自稱は飽く迄單一である。それ故指自稱は單一なるものとして表示さる可きものである。
然し指自稱は他人に理解せしむるのが目的であるから其の一指自稱が一體どれ丈けのものを意味し
て居るかを其の指自稱の形によりて表白する事は便宜であり親切であるがそれは單なる變則である
事を知らねばならぬ。『我々』と云つて複數を表示するのは『我れ』なる一人稱を作つた以上、必然の
結果であるが、若し『我れ』なる人格的一人稱でなく之れが單なる指自稱であると假定するならば
『我々』は變則であると云はねばならぬ。只『我れ』が立場を下つて吳れたものと考へねばならぬ。實は
指自稱を主眼とするなら所謂複數の場合にも『我れ』と云い度い所である。只其の『我れ』が多人數
なる事を別の機會に只一度斷る丈けで澤山である。そう一人稱の度毎に複數を表白する法はない。
斯くの如き失當が起つたのは指自稱が一人稱に墮落し、人格稱自我稱に墮落したからである。
或讀者は反駁するだらう。一應尤もである。『我々は斯く考へる』と云ふ樣な場合は嚴肅な指日
稱に從つて不都合はない。然しそれ計りではなく、多人數に付いて各個各樣の客語、或は同一の客
語としてもそれが分離的に並立的に用いねばならぬ時は如何？不都合なきかと。然り。一見しては
多大な不都合がある。然し私の指自稱は純粹の指自稱なる事を考へて頂き度い。文法による一人稱
は上の如き不純があると共に例の不思議な自我稱を持つてゐる。本來指自稱は實に指對稱に相對し
たものである。そうしてのみ存立する。處が一人稱はそれに反して、二人稱にのみ對したものでな
く獨立的な自我稱になつてゐる。されば指自稱が指對稱に對して此方として凡そ反對的に指稱する
に止まらず、一人稱はそれ等の關係を離れて更に或主觀が己れ自身の實在を內省的に正反射的に指
すものとしての稱名を持つて居る。然るに指自稱は寸毫も一人稱の持てる個人的要素自我的要素を
もつていないのである。

一體私が新造した三つの指稱の場合には三つは皆對關して居る。そうして指稱する見地者は之の三關係から超越した注意意識である。指自稱と云へども何も自我稱でないから自分自身を稱して居るのでなく、注意意識が或る手前の局處を大局から指稱して居るのである。只之の注意意識が常に先方に對しては指稱するものの傍らに有るが故に指自稱の名を起したのである。それに之の意識が指稱の對象となる事は絶對にないので、かう云ふ見方は差閊へあるまい。又强て自己反射的對象として考へる場合は必ず一轉して後段自如稱の場合と成る。

私は處女作の中で自意識と注意意識と自我意識とを斷別して置いたが傳統には之れが無いので彼等は常に自意識と注意意識と自我意識とを混同してゐる。その爲め此處でも指自稱と指稱と自我稱とを混合して『我れ』とは『汝』に對する計りでなく、或は指示意識が指對稱に對した指自稱を意味する計りでなく、自我が自我自身に對するものである事になつた。只我の實在的性質の判らぬ以上、經驗的文法の根本的理論が之れ等澤山の思索の混亂に陷るのは已むを得ない。

そこで讀者の反駁に對して答へやう。

ＡＢＣの中、Ａは白く、Ｂは赤く、Ｃは青き事を、Ａが代表的に『我れ』はと云ふ單數指自稱に依つて云はむとすると考へる。即ち相當の不都合が起る。問者の趣旨誠に此點にあるに相違ない。即ち『ＡＢＣが單一な意志を持つとか或は同一の客語的行動をしてゐる場合には誠に重實であるがそう計りには行かぬ』と。

然し之の場合、よく熟考すると其の不都合は僅微な不都合に過ぎぬ。之れは例に據るのが一番早い。則ち『我れは色々の色調を持つ。或者は白く、或者は赤く、云々』と單數一人稱に云現して濟む。已でに他の場合に之の『我れ』がＡＢＣに依つて成る指自稱なる事が判つて居れば之れで何の不都合もない。文字の傳習的感情に少しも反して居ない。又吾人は一人稱の單數の場合に斯かる枚擧的說明を必要とする時はいつでもそうするのである。實際形而上的には一人稱の單數が或る無數の集合物である以上は外見如何に人々の注意と反省を暗ましてもＡＢＣの場合の指自稱が陷る矛盾には必ず陷るのである。只ＡＢＣの場合にのみそれが人々の傳習感情を刺戟するのはそれは人々の妄想と習慣の爲めに過ぎない。況して指自稱は一人稱個人稱ではなく、その中にどれ丈けの多數の複數を收容しても差閊へないと云ふ事を考へれば論者の反駁の無意味なのが判ろう。

以上は不完全乍ら文法に於ける人稱の形而上的特徴の研究で要點丈けは盡したかと思ふ。之れは後段の如稱論と相對し相關して居るものである。互に對照して研究して貰へば更によく御判りにな

ると思ふ。如稱、自如稱の本質を知らなければ指自稱の特徴たる指示意識は或るものの外側に有つて或るものを指示すると云ふ私の意見は一寸判らなくなる。それ故私は判らぬのを承知で説明せずに置いた。文字の上から云ふと『或るものが或るもの自身を指して、先方のものに對して之方と指稱したものが指自稱である』と一寸云ひたい所である。が事實は決してそうではないが、今は之れ丈けに止めて次へ移つて行く。

■自我は觀念である。之れは誰れでも云ふ。然しその人が自我の否定家でない限りは自我が單に觀念に過ぎぬと云ふ事には實生活上非常な語弊がある。觀念だと云ふ事は知つて居てもそれは或る重大な豫想の上に立つた觀念だと云ふ事を知らねばならぬ。丁度自分のものと云ふ觀念が實際自分のものであるものゝ上に設定せられた様に大抵の人間は自我なる觀念は實際自我で有ると想像せらるゝものゝ上に設定せられたと考へて居るのである。

之れは一寸した事であるが大要點である。そこで始めて之の自我觀念が生きた動機となつて來る。即ち之の靈や肉が即時に自分だと云ふ風に考へられるのである。斯うなると靈肉と自我觀念との間に間隙がなくなる。

自我の觀念は如何なるものか？

先づ其の前に如何なる條件を具備しなくては吾人は自我と云はぬかと考へる。何となれば條件が必しも觀念の要素にならぬからである。先づ靈的でなくては吾人は自我と云はないのである。如何にそれが自我の條件を滿たす所のものであつても非靈物では自我とは云はぬのである。或は少くとも人間の靈と類似した意識様のものを持つて己れの自我たる事を有意識的に無意識的に主張する處のものでなくてはならない。例へ石や木片に色々の自我的條件があつても靈のない以上彼等自身が自我を主張する事も出來ず意識する事も出來ない。ヒュームが由々敷くも言へるが如く『自我の意識のない處には自我は存在しない』のである。

然し之れは自我の觀念の內素ではない。我々は自分自身が靈であるかないかなぞ疑つた事はないので決して自我なる觀念の中へ己れが靈たる事を素入して居ない。それ故之れは自我なる觀念の內素でなくて寧ろ其の對象たるべきものの條件であると云つてよろしい。

然し以下の條件は凡べて內素となりつゝある。それ故內素の研究に入つて行かう。

之の觀念の第一の內素は

自我なる觀念の意味する對象それ自身であると云ふ觀念である。此處に居る之れは俺だと云ふ時

は（一寸說明が難澁であるが）之れは『俺其のもの』で、は外のものでは決してないと云ふ强い排他的な自熱的指稱の意味を持つて居る。例へば數尺の身體の範圍內にある一切それ自身だと云ふ氣持である。

然も其れは他の者が其の數尺內の一切を指稱して居るのでなくて、實に指稱されて居るもの其のものが指稱して居るのだ、即ち指自稱して居るのだと云ふ確信の上に立つて居る。

そこで尙一步進める必要が起つて來た。即ち之の指自稱は勿論指稱を兼ねて居るが、更に吾人は之の指自稱に於て

如稱

なる要素を見出す。如稱とは『ものそのもの』を意味する事である。例へば指自稱が此方なる方向のみを指すに滿足せずして、其の方向に當るものゝ當體其のものを自から意味した時は今度は之れは

指自如稱、即ち自如稱

となるのである。具體的に云へば一塊の石に特種の魂があると假定して、彼れが自から經驗的に或る存在自身であると云ふが如き場合である。所が之れは人間の場合には之の自如稱に特殊の觀念が付屬して單なる自如稱に止まらなくなる。即ち一轉して此處に

我稱

なるものを持つて來る。即ち之れは自如稱が自我的感情を伴ふ場合である。されば之れは自如稱を兼ねて居る。即ち指自稱、如稱を兼ねて居る、『俺だッ！』と云ふ觀念は確に自如稱と我稱の間を往來して居る。然し明白なる自我を持つて居る主觀の『俺だ！』は立派な我稱である。そこで自我觀念の第一內素は自如稱と我稱とを兼ねて居る事になる。然し觀念の內素としてはそんな事を明白に意識して居ない事勿論である。

此處で斷る必要がある。自如稱は實に我稱と伴つて居るから『俺』と云ふのであるが、自如稱としての『俺』なる用語には論理上全然我稱的意味はない。それ故『俺』と云ふ詞を用ぶるのは誤解を起し易い。之れは一寸した一轉で忽ち本當の『俺』になる事は勿論であるが、自如稱は飽く迄自如稱に止まつて居る。其れは只『之の物其のもので外のものではない』と云ふ事を他に依つて保證せらるる代りに假りに其の對象に其力があつてそうして其の對象自身が保證したものと想像した空想概念であつて、且つ大分擬人的なのは事實だが、其れは何も自己的でも人我的でも何でもない。偶々、人間自我の方で其れに似て居るに過ぎない。吳々も自如稱と我稱との區別は銘記せられたい。

第二の內素は自我が絶對單一だと云ふ考へである。空間的に且つ自我的意味に於て絶對單一だと云ふ意味である。

第二のものは第一のものと必ずしも同格的に對聯して居るものではない。一體觀念の性質上その內素が同格內素の場合と異格內素の場合と色々ある。觀念と云ふものはそういふ自由なものあである。學者が概念分析に於て常に見出す樣な同格要素のみではない。其れは觀念の內素が實用物であり、拵へ物でなく、批判の後に出來たものでなく、只實生活に間に合へばよいとして作られた出鱈目ものだからである。それ故觀念の內素の枚擧は何時でもそれが不整頓亂雜に陷るのは當然である。整頓して居るのは概して間違である。

そこで之れは自我と非自我との間には明瞭な絶對境界があると云ふ觀念をも含んで居る。若し之れなくんば自我の存在は忽ち威嚇せらるゝのである。之れに依れば自我は自我以外のものとは絶對に別のものである。交渉もするが其れは自我と非自我として交渉するので、何等自我の存在を形而上的に脅やかす樣な意味で交渉して居るのでない。自我の本質を變化するが如き意味に於てするのでない。即ち自我は絶對獨立頂天立地單純一箇の存在である。成程、我々が夫れを意識する時、其都度吾人は何時でも斯う云ふ觀念を意識するとは云はぬ。或人にあつては之れは問題にならぬ程明瞭な問題である故、特に之れを强調する必要のない場合もある。それ故その時々の目的に從つて自我の觀念の中へ斯ういふ觀念を入れぬ場合もないとは云へぬが、大體論の上からは吾人は自我と云つて居る時確に暗默の間に斯ういふ觀念を了解して居るのである。

少くとも自我の觀念を合理的ならしむるには斯う云ふ內素がなければならぬ。如何なる人間も自から自我を主張した者は必ず自我が非自我と絶對的に遊離して居る事を確信して居たのである。只動物の如く自我觀念の明瞭でないものゝみは斯ういふ意識はなかつた。又彼れ等の自我は實は眞の自我とは云へないのである。生物意志が盲目的に働いた爲め自我に類似した現象を誘つたのに過ぎない。其の自我に類似した働きの中から眞の自我が生れるのである。但し此の論理は私の錯覺自我論をスツカリ飲込まれぬ御方には御判りにならぬであらう。

第四には自我は自主的自發的自由的であると云ふ觀念である。前に自由論を御讀みになつた方はよく御判りであらう。個物に自主自由があるからこそ自我なる錯覺が生れたので、當然自我の觀念の中へ自由なる觀念が入つて來るのである。然し之の自由、自主、自發の眞の觀念は何人も其の自我に依つて違ふ。決して一定して居ない。それ故此處で其の事實上の意味を明確に決定する事は不可能である。本來觀念なるものが一定不變の內容を持つて居るものでなく、各人に依つて異るので

其の內素も亦十人十色である。其の上是等の內容は皆誤謬觀念である故到る處で其の實際との矛盾を暴露して來る。其の人に依つて抱いて居る具體的の自由自主自發の意味を檢べて見ると忽ち色々の難題に逢着する。皆觀念の本質から出て來るのである。

第五は絕對ではない。或人には有り、或人には動搖して居る。或人には無い。即ち自我は不滅不遷であると云ふ觀念である。實際自我の絕對同一性を主張する以上は自我の不滅に達しなくてはならぬ。或は五十年六十年の間丈は絕對同一を維持してそれからは亡びるのだと考へるのは如何にも勝手な理窟である。然し實際或人は『自我は亡びるのだ。只現在のみ實在して居るのだ』と思込んで居るのである。處が自我の存在に關してそう云ふ事實から起る大膽な論理的歸結に付いて考へたものは餘りない樣だ。兎に角一定の期間、即ち人壽の間丈け不滅であると云ふ考へは何人の自我の觀念の中にも宿つて居る。或は出沒して居る。

自我の觀念は一體何かと反省する時、若し其の人が自分の觀念を正確に捕へて描く人なら必ず此れ丈けの『意識の頭』を捕へるに相違ない。が觀念は常に其の瞬間々々の實用を果たすもので、何時でも之れ丈けの觀念の數內素が揃つて反省の簡閑點呼に出頭する譯ではない。實は平素は常に第一の指我稱的觀念のみが主として働いて居る樣に私は反省して居る。私は之の日常に働くものを

觀念の指稱的內素

と號ける。そうして前述のものを觀念の

一般內素（或は分析內素）

と號ける。前者の方が內素が遙に少ない。**如何なる觀念も此二樣に使分けられる。**前者は餘り學問の對象にはならぬ。飛行機を見て飛行機！盜賊を見て盜賊！と怒鳴る時の觀念故當然である。之の時學者は之の指稱內素を捕へて直ぐに概念分析を始めるが非常に愚劣な事である。火事を見て火事だ！と叫ぶ時決して學者の分析する樣な概念內容を意味しては居ないのである。

實に觀念の內容の複雜神秘は中々筆端の及ぶ處でない。その不規則、無秩序、無反省、不合理は概念の分析より外知らぬ人々の意想外なものがある。それは**觀念**とは『**氣持ち**』を**符牒に使用したものである。觀念の分析とは氣持の分析である。**之れ丈けの自覺がない爲めに在來の學者の概念分析や定義の樹立、或は分析が無意味に果つたのである。彼等は概念を分析するとは云つてるが實は觀念を分析したかつたのである。處で實際扱つていたものは概念の應用せらるゝ對象對境の要素の分解

をやつていたのである。

私は指稱內素と一般內素とを區別したが元々觀念は氣持であるから指稱している積でその中一般內素がいくらでも混入するのである。決して之の働きに於て確實な境界はないのである。又條件と內素との間に絕對の區別もない。常に其の觀念を脅す樣な條件は忽ち觀念の內素となる。そうして如何に重大な條件であつても少しも觀念を脅やかす力のないものは內素とならぬ。吾人は米や水を尊重するが空氣を決して尊重しない。處が空氣の方が遙に米や水よりも吾人の生存の爲めには必要なのである。同樣に自我と云ふ觀念を成立せしむるには靈魂は必要ではあるが觀念の意味の中には靈魂と云ふ意識は非常に閑却されて居るのである。云はなくても判ると云ふ譯かも知れぬ。若し意味しなくては判らぬなら、其の必要の限度に正比例して觀念の內素としての色彩が濃くなるのである。私は之れを

觀念內素の比例性

と號けやう。之れ等の研究については循環論證の新眞理第一卷分析に關する新說を御參照ありたい。

自我は果して靈魂であるか？之れは先づ他の觀念を批判すれば自然に判るのである。今の問題ではない。

■愈々私は我稱としての自我を觀察しやう。即ち錯覺自我の打破に入るのである。假りに自我を指自稱だと考へて見る。之の場合には單にそれは方向の問題で頗る單純であり人生觀上の問題を惹起しない。單に此方と先方との指稱であつて形而上的矛盾は此方と先方との間に明確な差別の立たぬ點にある。然し程度問題なる事を識認した上に其の兩端を主張するなら大した不都合は起らない。

本來人間は全宇宙と實在的に何の差別も境界もないものである。宇宙の中の物質を喫つて己れの肉を作つて居る處を見ても人間が本質的に宇宙と差別のないのが判る。人間は食らいつゝあるものの吸ひつゝあるものから出來て居るのである。人間と地球とは何の差別の立たぬ迄に結び付けられて居る。人間は地球の上に菌の如く生えて居る動物であると云ふも過言でない。左れば之の人間が方向としての指自稱を行ふはよいが指自稱の行はるゝ範圍を確定する事は絕對に不可能である。

處が自如稱となると問題は違つて來る。果して吾人の自如稱は形而上的妥當性が有るであらうか？それには先づ如稱に付いて少しく研究しよう。

如稱と物如とは關係はない。又此處で物如の批判も場所ではない。私は所謂物如があるとは思つて居ない。然しカントの物如を離れ、又物質的考へ方を離れて吾人眼前の表象を見るに必ず之の表象は何等かである。此世の中に何等かでないものは決してない。之れは勿論物質でなく、靈でなく、靈質でなく、物如でなく、物でなく、抽象的でなく、具體的ではないが兎に角何等かである。私は之の摩訶不可思議な『何等』かを何うしても吾人の思惟の重大な定理として肯定して居る。私は之れを

何如

と命名して居る。即ち一種の『もの』たる事は否み難いが、然し『もの』には嫌な歴史があるので、それに捲添を食ふのを恐れて、私は新らしい概念を設定した。

森羅萬象一つとして何如ならざるはない。宇宙は此の何如に依つて作られて居る。或人は云ふかも知れぬ。『何如とは何か判らぬものではないか』と。然し絶對に分らぬものは吾人に取つて無であるが『何如』は立派に判つて居る。其れが何等かであると云ふ重大な性質を具有して存在して居るのである。之の點は明白である。そうして其の性質の澤山が吾人に暴露されて居るのである。其の暴露された性質の一つ一つを取つて批判をして斷定をすると哀れな人間は忽ち重大な混亂に陷つて何事をも云ふ事の出來ぬ樣になるが、然し之れ丈けの事は云へる。

『之の全宇宙は一つの大何如であつて吾人が現在經驗しつつある處のものと矛盾せざる性質を持つて居るものである』と。

之れは陳腐であるが私が永い間に確信し得た眞理である。吾人の信じて居る事と將來どんな反對な事や矛盾した事が現はれるか知れない。然し吾人の小我を捨てゝ吾人も亦大萬有の一部たる萬有者として宇宙の業に加はつて居るのである。されば吾人が或事を經驗して居ると云ふ樣な小見地を去つて、只宇宙自からが自から經驗して居るのだと考へるが良い。そうして間違も眞理も皆之れ宇宙の責任に歸するがよろしい。左れば

吾人が現在經驗しつゝあるものゝ中、間違も眞理も皆之れ大何如宇宙の仕業である。それ故如何なる間違も宇宙には必ず其の間違を可能ならしめた性質が有るのである。即ち宇宙は現在の誤りを可能ならしむる性質に矛盾しない處の性質を持つて居るのである。

私の云ふ性質とはそういふ大きい見地より云つて居るのである。個人の小管見から下したその時の局部的な便宜的な小判斷ではないのである。

實に斯くの如く之の經驗を最も大きく取るなら私の之の定理は絶對の眞理として通用するのであ

る。即ち間違も眞理も皆此の何如の相である。局部的な眞理のみを宇宙の相とするから忽ち吾人は混亂に陷るのである。實に宇宙は現在の眞僞の兩相を可能ならしむる底の大何如を持つて居るのである。然らば吾人は宇宙の相に就いて實に多量のものを知つて居る。上述の見地から慥に宇宙は吾人の目で見、聞いて居るが如きものである。只それを小さい管見で小さく狹く解釋するからこそ夫れに矛盾するものを發見するのである。柳は慥に綠である。花は紅である。人は語り且つ動く。私は理論を語り、物を食ふ。之れを小さく解けば忽ち大混亂大錯誤に陷るが尤も大きく尤も廣く尤も深く解くなら、何等の混亂に陷る事なく絶對の眞理を掴み得る。眞理は昔より難しとする。其れは吾人が物象を小さく解いたからである。尤も大きく解くなら眞理は遠慮なく躊躇なく吾人に其心を委せるのである。

實に何如なるものは小さく掴む事は絶對に不可能である。心で大きく大きく掴まふとすれば直ぐに掴める。丁度室の中の蠅だ。指の先きで掴まふとすれば難い。然し敢て追はず、狩らず、默つて室の戸を閉めれば自然に彼れは人の囚はれでないか？眞理に對しては之の宇宙の戸をたてるにある。慥に吾人は生活人として所謂小さい眞理を得たいのだ。私が今提供した樣な眞理は餘り役には立たない。然し生死岸頭に立つて大何如を觀ぜんとするには、先づ此處を掴むに限る。

『何如其のもの』と云ふ概念も亦そうである。吾人は論理的には必ずそう云ふものゝ有る事を想像する。以心傳心で直ぐ判る。少なくも斯くの如き何如のある事は信じられるが偖て其れを見る事は出來ぬ。然し見る事も掴む事も出來なくても論理的に有るものは矢張り見たと同樣に有るのだ。論理は魂の肉眼である。

正しい論理が斷定するものは凡べて存在するものである。敢へて經驗的證明の有無を問はない。

■兎に角人間は何如そのもの、物其のものを掴む事も指差す事も出來ぬ故、人間には眞の如稱を行ふ事は不可能である。がそれでも

擬如稱

を行ふ事が出來る。眞の如稱は神的力に依らずんば出來ない。故に眞の如稱は空想的概念である。石なら石を稱して『之の石そのもの』と經驗的に吾人が云ふのは擬如稱である。想像の中にのみ存する眞の如稱を摸したものである。然し發生的には實は之の擬如稱から如稱の存在が假定されたと云

ふのが正しい。

カントの物如には物の實在と云ふ意味がある。又物の眞如なぞと云ふ意味もあるが、私の之の如稱の『如』は所謂實在と云ふ樣な意味とは先づ關係はない事にして頂きたい。

果して吾人の自如稱は形而上的妥當性が有るであらうか？一體人間が之の宇宙の中で自から已れ自身を如稱し得るだらうか？と尙深く考へて見る。

『何如其れ自身』と云ふものは論理的には有ると考へざるを得ない。處で假空的に其の『何如其れ自身』が特に如何なる方法によるか人間には想像し得ざる方法に依つて自づから反射的に指稱し得る能力有りと假定すれば自如稱は其の場合に於てのみ存在し得る。

が、著者の目的は吾人其の者が自如稱を實行し得るや否やと云ふ點にある。

現代の科學は吾人が自如稱を行ふ場合には必ず或る機關に依つて行つて居る事を認めて居る。その機關が吾人全體の如在を指稱するのである。それ故機關が全體を意味するのは自稱とは云ひ乍ら夫れは他人に對してさう佯はるのである。即ち

實は他稱なのである。即ち

他如稱

それ故其の他如稱を自如稱と考へるのは實は形而上的には

假定的自如稱（或は約束的自如稱）

である。前述の如く眞に形而上的妥當性の有る自如稱は人間には想像出來ぬ方法に依つて可能なので、決して斯くの如き約束的な形而下的なものでは無い。之れに反して之の僞りの自如稱は只吾人が他のものを指稱し得る能力を持つて居る爲め、其の能力に據つて已れ自身を意味すると佯號するので、何も已れ自身が反射的にもの其のものを捕へて居る譯ではない。依然たる擬如稱である。

只已れは機關の型式を捕へて居るので其の瞬間の實在を確實に意味して居るのではない。

擬如稱と假定的自如稱とは混亂を起し易い。大分類似してゐるが實は大きな相違がある。前者は自他は問題でない。只如識する對象が得られない爲めに他のもので代如するから擬如稱と云つたのである。故に擬如稱は形而上的には如何なる場合にも他如稱になつてしまふ。如稱す可き已れは假りに不動でも對象の流動の爲めに他如稱にならざる事を得ぬ。其反對に他如稱も亦擬如稱となる事勿論である。

處が假定的自如稱の方は他如稱を自如稱と變稱する點を問題として居る。或は自如稱が不可能になれるが故にそれを他如稱を持つて代稱する點と云つてもよい。即ち擬如稱は代如、自如稱は代稱が問題なのである。此の二つの關係を比較するに一切の如稱は凡べて代如であるが故に凡ては擬如稱となる。他如自如兩稱凡べて皆擬如稱である。處で其の擬如稱は如何と云ふに本來物其のものが物其のものを反射的に如稱する事が不可能な以上は、必ず其れは其の理由で他如稱とならざるを得ない。即ち對象が代如の場合も云ふ迄もなく他如稱である。然らば之の二つの理由に依つて一切の如稱は皆他如稱となる。形而下の自如稱は皆之の他如稱を假定的に考へたものに過ぎない。

斯う考へると如稱の一切のものは必ず形而上的には擬如稱にして又同時に他如稱であると云ふ大定則が立つのである。

之の如稱の擬他兩性は錯覺自我論とは重大な關係がある。

自如稱の問題を論ずるに先つて私は

同等如稱（或は同等自如稱）

の概念を設定する必要がある。之れは實在する譯ではない。只の空想的概念である。少しく閑概念の樣ではあるが如稱の形而上的研究の順序としてどうしても之處から出發しなくてはならぬので御注意を願い度い。

之處に一個の實在原子があるとする。之れは絶對單一物で又實在の單位物也と假定する。尙ほ之れが『己れ自身の實在』を反射的に認識し意味する奇異な能力を持つて居ると假定する。

私が特に原子を採つたのは方便に過ぎない。然し指稱者に指示意識を取らずに原子を採つたのは方便ではない。同等如稱の本質から來たのである。之の場合には彼れの行ふ反射的如稱は眞正な理想的な自如稱で彼れ自身の實在を立派に意味して居るから確に彼れ自身が彼れ自身を意味してゐる事になる。之れを『同等如稱』と云ふ。彼れ自身と彼れ自身との同じくして等しきより來て居る。それ故原子でなければ都合が惡いのだ。處で之の實在原子が他の原子に如稱を行ふが如きは

不同等等級他如稱

である。又一原子が他の個物に對したる場合は

不同等不等級他如稱

である。又或は他の個物が他の個物に對してなすが如きは

不同等等級他如稱

である。不等級の譯けは『原子』と『原子を集めた個物』とはそのスケールが違ふからである。

同等不同等或は等級如稱同志が原子である場合には單純な實在如稱だが、不等級になると單に其の實在如稱の對象の分量の相違と云ふ譯けに行かず、其の原子の複數の上から起る全體の意味を如稱する事がある。即ち一個物を如稱するに原子の集團として如稱するのは

一次如稱

であり、同じ集團でも全體の意味の上の如稱は

二次如稱

である。それ故二次如稱は自分では眞の形而上に徹した如稱也と思ふ事があるが、必ずしもそうは行かぬ。元々一切の如稱が擬如稱だと云ふ意味から云つても眞に形而上に徹した如稱なぞはない筈である。

石が一塊の石として假に『俺だ！』と云ふのは二次の如稱なのは明瞭である。決して一次如稱の如き實在同等或は等級如稱ではない。即ち『俺』と云ふものを作へて居る石の原子が云ふのでなく、其の集團が云ふ丈けでもなく、集團の上に立つて特殊の意味から云ふのである故に二次如稱である。そうして俺だ！と云ふ自如稱は石を組成せる原子の如稱の量的全集團であるとすれば之れ依然として一次如稱であるが、若し彼れがその組成の上に別個の實在を主張して其の如稱を道白して居るなら彼れの如稱は別個の二次如稱となるのである。

そうしていつでも之の二次如稱は一次如稱とは外延的には同一でも內包的には對象が單位的に違ふのである。若し違はぬ場合は一次如稱となる。

■そこで愈々自我が自如稱たり得るかを見やう。

本來自我が『俺だ！』と云ふのは之の爪先き迄の分子の如稱を委任されて居る譯ではない。分子の方では一向知らない。そこで彼れ分子は云はむ。『一體之の世に如稱なぞと云ふものがあるのか？』と。團體の何處かで俺！俺！と連呼してゐるものがある相だが、彼れ分子には本來風馬牛である。彼れは只宿命に隨つて之の個體分子の一連の中の仲間入りをして己れ自身の生存を營んで居る。そうして其の周圍に對して必然に彼れの爲す自然結果的効果が何處の馬の骨か知れない『俺』なるもの

に生存的効果を與へるのに過ぎない。若し之の獨立分子が一寸でも動くと直ちに其の何處かの『俺』氏に大影響、時には其の存否問題が起る。故に分子の方では餘り『俺』氏を意識して居ない。尊重して居ない。が氏の方では非常に之の分子を重視して居る。そうして頼みもせぬのに氏の方では分子を彼の一部分として勝手に心に登錄し、他人他者にもそれを宣言して押賣的モンロー主義を實行して居る。法律は之のモンロー義を保證する爲めに出來たもので、只管『俺』氏にのみ都合の好い樣に出來て居て、個物を作つて居る分子の自由に付いては何等の考慮を拂つて居ない。(もつとも拂ひ樣もないが)

故に『俺』氏の『俺』を如稱として考ゆるなら、

(一) 彼れは各分子の獨立如稱を考慮に入れて居ない。

(二) 又其の一集團的一次二次兩如稱を考慮に入れて居ない。

(三) 經驗的直覺に訴ゆるなら『俺』の如稱は分子や其の集團や其の意味でなく『彼れ自身』の如稱である。そうしてそれは經驗に訴ゆるなら確に一次如稱である。即ち在來自我を一つの實在と考へ來つたものより考へるなら其れは自我自身が自我自身を一次的に反射的に如稱する積である。或る單一絶對な不可思議な單位物を指して居ると號して居る。されば斯くの如き人間の誤まれる信仰に依れば一次同等等級自如稱とならざるを得ない。

之れは諸君の心を刺戟する面白い問題である。

(一)の場合に於て若し『俺』氏が分子に對して眞の如稱を立て得るとすれば神の力に依らなくてはならない。形而上的『俺』ではどうにもならぬ。即ち『俺』は之の分子に對しては己れの存在の權利を持つて居ない。且つ之の分子に人間が無理に如稱を作れば不等級他如稱の擬制となつて了つて『俺』の本質と全然矛盾して矢張り『俺』の存在を許さなくなる。

故に若し『俺』が其の本義に於て立つ事が出來ず第三の本城を逐出されても、之の分子の處へ逃げて來る事も出來ない。

(二)に於ても然り。(二)は『俺』に取つて(一)以上に鬼門である。本來『俺』は單一絶對者である。如稱としてもそう云ふ自覺の上に自如稱して居る。然るに時空の上に於て『俺』の對象或は其の實質は永遠に捕へられぬとしたら、如何にして如稱が立つぞ。尙ほ(一)に於ては個物を集團細胞と考へて居るので、其點丈けでどうしても『俺』とは矛盾して『俺等』になつて、忽ち『俺』の錯覺たる事を此處で暴露しずに置かぬ。

之の(二)も又如稱を立てるとすれば『俺』に取つては不同等不等級他如稱の擬制である。之れは根本原

則として一次同等等級自如稱たる『俺』氏の致命的に嫌ふ處である。『俺』氏の方でも(二)の如稱を眼中に置かぬが、よし又第三の本壘を拔かれても之處へ逃げ歸る事は出來ない。そこで愈々(三)へ迫る。

經驗に依るなら『俺』の如稱は非擬制的な正直正銘の一次同等等級自如稱である。處が私が上に擧げた定理に依れば、非擬制的一次同等等級自如稱の形而上的妥當性は全然否定されて居る。私の之の定理は動かす可き樣はない。之れに矛盾するものがあればそれを動かし或は否定しなくてはならない。されば之の場合も必ず自如稱『俺』の方に誤りがあるのに相違ない。『俺』と云ふ觀念に必ず誤謬か錯覺が有るに相違ない。然し之の場合は只之の如稱としての大チレンマを指摘するに止めて自如稱『俺』の積極的究明は尙他の批判を待つて諸君に追々御滿足を與へやう。

一體斯ふ云ふ『俺』が存在するか否かを正面から考へる事は之の場合の問題でない。只之處ではそう云ふ『俺』が自如稱の對象となり得るや否やを見るにある。そうすれば錯覺自我の眞否は推論に依つて決定する事が出來る。

人間の空想するかう云ふ自我は非常に自如稱をなすに便宜ではあるが一體かう云ふ自如稱は可能であらうか？

然し其の前に斷つて置き度いのは傳統は『自我なる觀念に依つて意味された自己の對象』を自如稱とするので、觀念其のものを自如稱とするのではない事である。觀念の意味する對象が果たして觀念に適當するや否やと云ふ問題は之の場合の問題でない。されば吾人の求むる處は只觀念の意味する對象が自如稱の對象となるや否やにある。

それ故之の點を檢索して見やう。

偖て吾人が『俺』と言つて意味して居るものは之の靈肉及び其の他である。之れ等の合したものの上に之の不可思議な自我觀念を築いて居るのである。之れが私の動かない研究題目たる事實上の『自我』である。處で先づ之の自我と號せらるるものは如稱し能ふか否やを見る。

之の自我の對象として居る肉體や靈魂に付いて形而上的如稱を行ふ事は不可能である。代如的擬如稱すらも行へ居ない。何となれば、例の通り時空上の範圍が不確定であるからである。

之の事實は明かに『俺』なる如稱の大きな誤謬を暗示して居る。何が故に斯くの如く不可能な無理が發生したか？何か他に必要があつたに相違ない。何か之の範圍不明瞭な個物、否無範圍の個物をして時空の中に特に己れの範圍の確定を强想して如稱する必要が有つたに相違ない。

先づ問題を轉じて觀察するなら、之の點は多言を要せずして自然に明瞭となる。

人間の指自稱が失敗した理由は又如稱の方面にもある。吾人は『俺だ！』とは云ふが西洋哲學に依つては決して『俺』の本體は判つて居ない。時空内の範圍も判つて居ない。然らば凡べての時に於て流動してゐる本體や範圍が判らずして如何にして如稱を行へるか？何も如稱は物如を得むとするのでない。實在を得むとするのでない。只僅かに或る對象其のものを他のものと斷別して指さむとするのであるが實は之れが出來ぬのである。

之の斷別が出來ないとせば如稱は失敗す可き性質のものである。

其の原因は何處にあるか？

何處にもない。只如稱が出來ると思ふ處にある。俺だ！と如稱し得ると思ふ處にある。斯う云ふ無理な事が出來ると思つたのは過去の人間の妄想である、錯覺である、自我なるものが實在して居るなら自我は如稱し得ざる筈はない。處が之れが出來ないとすれば忽ち自我の觀念は滅却されるのである。

露骨に云へば吾人は『俺だ』と如稱する形而上的權利がないのである。

之の個物を如稱する道は神的空想的に想像するより外なく實現的には其の方法が絶對にないのである。更に之れを如稱しようとするのが誤つて居る。過去に於て個物が自づから錯覺に陷つて居た爲め何の反省する處なく、只出鱈目に自づから如稱して居たのである。

誠に吾人の遣つて居る『俺』は虚僞な胡魔化しの假裝的な如稱である。

處で之れが又自如稱となると如何？即ち之の自我が自分で自分を如稱するのである。『俺』なる如稱は自如稱として始めて意味が完成するのである。前述に於ては自如稱其のものが之の世界に於て許さる可きか否か、又自我觀念に正當に合致す可き對象ありや否やを研究したが、之處では、自我觀念に事實上對象となつて居るもの、矛盾を見たい。

彼れ自我が『俺』と云つて居る時に經驗上之れは之の靈肉全體が發想してゐると思はれて居る。其の事を自我が發想して居ると號するので、それでこそ自如稱となるのである。

處で之の靈肉全體の自如稱である以上は實際靈肉全體から發想せられなくては忽ち不都合が起る。が事實に於ては決して靈肉全體から發想せられない。靈肉は慥かに之の發想に間接に與つてゐるがそれが與つて居ると云ふ事は直ちに靈肉全部がそれを發想してゐる、自如稱を行つて居ると云

ふ事にはならない。丁度吾人の食つた野菜が之の發想に與つて居るからとて野菜が之の發想者也と云ふわけには行かぬ。

皆其の與り方にある。若し與つて居る一切が皆其の發想者也とするなら之の地球と山川草木皆形而上的に『俺』を發想して居るのである。

又吾人は『俺』と云ふ時に自分のみが其の自如稱を可能ならしむるに與つて居ると思つて居るが決して然らず。敢へて攝取せる野菜のみならず、與かると云ふ點では全宇宙も之れに與かつて宇宙の中の一部たる自我を如稱して居るのである。そう考へても自如稱の不可能が判る。

一體發想者、或は發想主格と云ふものが有るのか？

自如稱はどうしても發想者を强要する。如稱の場合には發想行爲のみを主要とするが自如稱の場合は

(一)發想行爲、(二)發想者、(三)そう云ふ發想者と如稱對象との完全なる形而上的合致、

之れ丈けが條件となつて居る。之の三つのどれでも缺ければ自如稱は成立しない。皆色々の方面から他如稱となつて了ふ。

處で、如稱の場合にも發想行爲が有れば必ず發想者或は發想主格があるに極つて居ると云ふ人も有らふが中々そうは行かぬ。それに關しては直ぐ後を見て頂き度い。

自如稱を行ふ場合には吾人の靈肉が其の自如稱の對象であるが對象其のものにして外のものに非ざるものが自如稱の發想者とは云はれぬ。與つてゐるものが必ずしも發想者ではない。吾人の見る處では自如稱に於て吾人の手足を決して行爲者とも見られない。手足が俺と云つてゐるのではない。手足は慥に吾人の自我ではあるが然し決して自我を自如稱するものではない。

只前には宇宙の方から廣く責めたが今度はかう狹く責めても吾人の行つてゐる自如稱は眞の自如稱でなく、一種特別な迷宮の中に住むで居る自如稱なのが判る。人は我が手や足を捕へて『之れは俺だ！』と自如稱して居るが手や足は決して之の發想に自主的に參與して居ない。只身體の一隅の何處からか聲が來つて勝手に無斷でそう主張するのである。云はゞ手足の名を冒すのである。其れは强い强力者であり手足は如何ともする力が無いので只その儘になつては居るが彼等は本來そう云ふ正反射的如稱の力もなし、又その不可思議者に己れを自由に處理する事或は如稱する事を委任した事もない。

かう云ふ矛盾のあるにも拘らず、吾人自我は『俺』と云う發言と同時に自分で自分を其のまゝ如稱して居る云ふ妄想を抱いて居る。即ち吾人の自我の中には何かしら自分を正反射的に如稱し得る

能力がある樣に妄想して居るのである。

之等の矛盾は私の提出せむとする別の定理に依るより外に說破する事は不可能なのである。然し自如稱其のものゝ形而上的に導き來る澤山の矛盾に依る非妥當性の存在は之等の說明でお判りであらう。

古人は措いて問はず。少なくとも現代科學は何か『俺』を認識する或る作用に依つて『俺』を意味して居ると考へて居る。或は尙以上に分化的に考へても居る。兎に角其の認識作用は一心理的機關より發する作用であるとして居る。そうして、其の『俺』たるや靈と肉と其の外のものより成る全體の上に立つ或る自我を指して居る。前述した通り之の自我に付いてそれが自我其のもので外のものではないと云ふ事を自我の中の或る認識作用が認識して表白する事を如稱と云ふので、現代心理學に於て之の表白は自我其のものが表白するとは考へられない。若し之の場合に自我と云ふ抽象的な或るものがそつくり其の儘彼れ自身を彼れ自身と表白するなら之れ上述の一次同等自如稱であるが今や斯かる虛構に應ずる心理學者は何處にも存在しない。

さすれば之場合の自我の如稱も實際に於ては强度の不等級擬如稱である。且つ之の如稱を行ふ認識的作用は複雜なる實在の輳合の上に現れた作用で上の一原子から單一に發したと云ふが如き想像を許し得るものでない。之れは明白に二次如稱である。然して之の如稱作用は實存する機關から發して居るが、誰れが發したかと云ふ形而上的責任者はない。それは特定的な個物的な何者からも發しない。凡てのものゝ結果として只そう云ふ發想現象が起つたのである。それ故其の如稱が自如稱たる爲めに眞に形而上的に正當に反射すべき處がない。そこで吾人の場合には偉大な約束を立てる。即ち之の如稱は吾人の希望する一定の或るものを意味する爲めに魂其のものから發したのだと約束する。其の約束に依つてのみ之の自如稱は可能なのである。然し之の『魂其のもの』と云ふ觀念に依つては何者も解決せられず滿足されない。相不變之れは自如稱にあらずして例の形而上的他如稱である。一言すれば二次的不等級他如稱である。

之の如稱發想の見地からも私が空想的に樹立した一次的同等自如稱の存在ぜざる事、及び之の宇宙に存してゐる唯一の自如稱は實は二次的不等級他如稱なる事を證明してゐる。

處が我稱と云ふものは本來自如稱でなくてはならぬ。他如稱と云ふが如き我稱は形而上的妥當性のないものである。

然し之の宇宙には眞の自如稱ありとは信ぜられぬ。

さらば之の點でも宇宙には我稱なるものゝ存在しないと云ふ事が判る。

則ち之處でも人間が自から『俺だ』と云ふ事の誤りを深酷に云現はしてゐる。

之の理由と原因は抑々如何なる處より來たか？それは暫く措いて尙別に觀察して見やう。

上來指自稱、如稱の形而上的妥當性のない事を說いた。之れ丈けでも自我の觀念は滅亡せざるを得ないのである。處が自我は觀念の上からは絕對存在で少しも妥協と讓步を許さぬ。少微の缺陷も忽ち致命的打擊となるのである。然らば上二稱の如何なる缺陷も自我にとつては奪命の毒矢でなければならない。我稱の本質に到つては自我に大困難を與ゆるに止らず自我を全然存在せしめないのである。

『我』の觀念には上述の如く單一同一等の色々の性質はあるがそれは付屬觀念で

第一には『俺だ』と云ふ說き難き觀念

がある。自如稱の俺でなく、我稱の俺は眞の俺である。之れが自我觀念の第一主要素である。處で之れは自如稱を條件として居る。自如稱を發し得るもののみが發し得る處のものである。眞の自如稱を發し得るものが眞の我稱を發し、虛僞な自如稱を發するものが虛僞な我稱を發するのである。故に若し眞に之の世に自如稱を發し得るものありとせば自我を寄與する事はそう云ふものには絕望ではない。少なくも絕對單一で永久不變で靈的で自主的で正反射的に己れを如稱し得るものありとせば、そう云ふものこそ吾人の抱いて居る自我の觀念を正當に抱き得るのである。がそう云ふものは之の宇宙にはない筈である。我稱とはそう云ふ存在者が他のものを排して己れ自身を意味する事を云ふので、之れは到底單なる概念を持つて說明する事は不可能である。上に私の述べた自我觀念の內素も尤も肝腎の我稱の觀念丈けは概念的に說明し得ない。他の色々の要素は自我の觀念の中に包まれて居る觀念ではあるが、それも自我を正しく可能ならしむ可き條件が觀念の中に意味されてゐるので、條件に依つて始めて生ずる之の特殊觀念は說明し難い。

之の我稱の形而上的妥當性のないのは之の我稱の條件とする凡てのものが不合理なのでよく判るが、それには之の場合は上述三稱を材料とするより外はない。實に下述の條件の破壞に依つて自我なるものの全然倒れ果る時に我稱も亦凡ての條件を失ひ果るのである。

之處では上述三稱のみを材料として我稱の條件を破壞して見やう。

一體指稱及び指自稱なるものは實在の無限の微分流動に依つて不可能であつた。それなら吾人の

我と云ふ考へは又何を指すか？と云ふ難問に出會する。吾人は我とか自我とか云ふ。然し其の對象は凡べて吾人が的確に摑み得ざるものを指稱して居る。處が我稱は必らず排他的な獨存的なものを絶對に要求してゐる。自分が他のものと何の差別も無いと云ふが如き事實は我稱の致命的打擊である。然し事實は致方がない。僅かにその事實を欺瞞して排他獨存的化粧の下に吾人の自我は滿足して居るのである。

之れは自如稱の場合にも宛嵌まる。

自如稱が已でに不等級他如稱である時、自分で自分を我れと號するのは全然無意味である。五尺の全範圍を假定して他人に對して『之れは內輪の問題である』と云ふ日常の論理は之處へ當嵌まらない。之れは形而上の問題で內輪も外聞もない。他如稱は全然の他如稱で自如稱と考ふ可き餘地はない。自我は形而上的自如稱にのみ可能なのである。外聞だけの自如稱では自我は發生しないのである。

自我觀念の第三の原理は時間的に絶對の單一だと云ふ考へである。之れは人格の同一性、即ち『渠れ』が絶對の同一であると云ふ事である。形而上的に不移不遷である事、『渠れ』は飽迄『渠れ』であつて別人でないと云ふ事である。處が之の同一は奇妙な同一である。所謂二つ以上の、即ち一定の時間と空間とに涉つて絶對に同一であると云ふのである。或人の場合には空間は考慮せられぬかもしれぬ。即ち、魂のみが自我であつて他は借物であり、魂は空間を占據しないと考へる樣な人は空間を自我の問題としないに相違ない。然し之の肉體、少なくも肉的な自我を肯定するものはどうしても空間を考慮せずに自我を考へる事は出來ない。

同一律については第二著循環論に於て相當に研究して置いたが、其の中で『一體之の世には一定の時や空間に涉つて形而上的同一律は立ち得ない事』を說いて置いた。

處で自我觀念が要求してゐる同一は形而上的同一であつて、然も一定の時空に涉つて居るものである。

之れ絶對に不可能である。

『自我』の觀念は之處に於ても地に塗れる。何うしても之處からも其れが錯覺である事を承認せざるを得なくなる。Aの時とBの時に於ける自我は全く別物である。赤の他人である。形而上的には重大な流轉物である。かゝる流轉物を自我と考へるのが無分別である。丁度水の流れの渦卷を自我とするに等しい。成程流轉物は渾然たる流動であつて之れを集合とは見られぬ。然し自我なる擬形而上的同一者から見れば絶對に複數物である。集合物である。即ち之の流動的集合物の上に斯かる

自我を得んとするには何うしても錯覺に依るより外はない。絶對の複數を絶對の一と見やうとするには誤念に依るより外はない。

■上來隨分自我の指稱に關して色々の新概念を提供して人々を煩はした。恐らく御一讀あつて直ちに正當な理解を抱かるゝのを困難とせらるゝ方も多からう。然し人生に於て錯覺自我の哲學程重大な問題は殆ど存在しない。よく〳〵御熟讀を願ふ。

之れを一括して表にして見る。どうも色々見地の相違から立てたものもあるので巧みに收まらぬは遺憾である。其れが其の本質であるから仕方がない。

- 指稱
  - 自稱（指自稱）
  - 他稱（指對稱　指他稱）
- 如稱
  - 完全自如稱（一次同等自如稱）
  - 擬如稱
    - 他如稱（等級、不等級二次他如稱）
    - 不完全自如稱（擬自如稱）——指我稱（自我稱）（不同等不等級二次他如稱）

誠に面倒な研究であるが之の指稱と如稱の研究丈けでも人間の『自我』なるものの錯覺なる事が、正當に推論されるのであるから大切な理論である。結局私の目的は人間の我稱が不等級二次他如稱なる事を云はむと欲したのである。若しそうだとすればそれは當然自我の觀念の存立を許さなくなる。

指稱と如稱との區別を一言して置く。

前者は方向を問題としたもの、後者は呼稱する對象の本質を問題としたもので、どちらも呼稱の仕方の違だと云へる。そうして如稱は指稱的見地から考へるなら自如稱は一種の指自稱と云へるか

も知れない。他如稱は指他稱等に付會する事が出來るが然しそう云ふ牽强を行ふ必要はない。自如稱には彼方此方と云ふ方向的豫想はないので、寧ろから云ふ付會は避けるが好い。在來の文法の一人稱は非常に不純なもので吾人は實生活に於て之の一人稱に我稱を混入して居る。それ故文法の一人稱を研究するにはどうしても之の指稱と如稱の兩稱を研究しなければならない。それから擬如稱の中に他如稱と自如稱とがあるので、實は擬如稱的他如稱、擬如稱的自如稱とも云へる。後者は更に代如的代稱である。

■それ故自我は何か獨自一個の存在であるかの如く誤解して己れを『私』とか『自分』と云ふのは大變な間違である。むしろ『我々』と云つた方が正しい。

がそれは比較的な事で、人間が己れを我々と云ふ事も矢張り自我を含んでゐるので正しくはない。只絶對唯一の自我と云ふ迷妄の反證として正しいのに過ぎない。『我れ』が不可能なのは單數複數の問題で不可能なのでなく、尙以上に深い處に原因がある。然らば『我れ』と共に『我々』も倒れなくてはならぬ。

人性を闡明するには自我を外にしては不可能である。自我は人性の鍵である。が然し人性を哲學的に科學的に研究するには、結局自我なる觀念を破壞し、放逐し、閑却して、研究しなくては却つて人性の眞相を得られない。成程自我は或る意味に於て存在するもの、故に之れを外にして人性は不可解である。然し

又自我は形而上的意義に於て存在しないものである。虛僞である。誤解である。人生を動かしてゐる妄想的信仰に過ぎない。故に之を破却して考へなくては本當の人生を得る事は出來ない。

之の自覺がないから哲學に於て、特に西洋哲學に於ては、色々の自我の正體を提供した。一寸その觀念を列擧すれば上層自我、表面自我、潛在自我、遺傳自我、種屬自我、全部自我、本質自我、一部自我、絶對自我、肉體自我、靈魂自我、純粹自我、云云。色々ある。皆自我の實在の暗中の搜索である。

■彼等が『在來云云は自我也』と云つたものを假りに眞也と假定して、批判すると何處からでも自我なる觀念との矛盾が出て來た。例へば肉體を自我也と云ふ場合に爪や髮の毛は自我かと反問する。自

我なら切つて捨てられるのを何と解くか？　肉體は五穀から來る。然らば五穀は如何なる刹那から自我となるか？之時に之等のものを自我の所有とすると所有者は何か？所有する物質が亡びる時に所有者が亡びるのを何と考へるか？云云。之等の論理的矛盾を考へると切りがない。皆錯覺自我を知らぬからである。

西洋哲學があれば程偉大な精華を開いたが遂に人間の自我について何等の成果を得なかつたのは之の錯覺自我の謎を解き得なかつたからである。

死と自我意識の錯覺

（大正四年夏）

■昨年『オイケン哲學の批難』の中で――人間の自我意識は生物意志の錯覺なる新說を提唱したが、自分の滿足する程澤山の人々に識認されなかつた樣である。說明が餘りに簡單であつた爲め、且つ問題が非常に直觀努力を要求するので、大抵の人々が『風變りな思想だ』位に不眞面目に看過して了つた樣である。然らずんばもう少し大きな騷擾の報告が各人の內生活から傳はる筈であつた。此の問題は『成程眞理だ』そう云つて忘れ果てる事の出來ない問題なのである。人類が之れから一度は必ず出會はなければならない處の幻滅であつて、且つ私の考では人類の最大な幻滅だと思つてゐるからである。

人間の自我なる意識の錯覺と云ふ事は、

一、生物學の上からと、

二、辯證の上からと、